
draw - - -

伴天連の人魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

d r a w - - -

【Nコード】

N 8 6 2 0 H

【作者名】

伴天連の人魚

【あらすじ】

商業で栄えている国、アイトラ。この国の中心部ベルガモのとある酒場で働く少年ジェリコは、世界をまたに駆ける画家を夢見ていた。コツコツと資金を蓄え、画家としての腕を磨く緩やかな日々は、段々とあらぬ方向へ捻じれてゆく……。

#1・はじめは日々の日常から（前書き）

初めまして、伴天連の人魚です。小説を書くのは初めてですので、拙い表現、読みにくい箇所が多々あるとは思いますが、楽しんでいただけたら幸いです。

#1 はじまりは日々の日常から

中天には太陽があり、雲は欠片も無い晴天の空。冬が過ぎたばかりだというのに春の日差しは少々強いが、風は包み込むような柔らかさを持っている。

商人の国アイトラの中心部に位置している町、ベルガモは今日も平和だ。

季節を知らせる南からの渡り鳥が頭の上を通り過ぎ、石畳の道には小さな子供が走り抜ける。

遠方から来た旅人が道の両側の露店に並ぶ様々な商品を物珍しそうに眺め、笑顔が耐えない町並みは繁栄している証拠だろう。

そんな景色の中、町酒場ラ・メール亭で働いている少年ジェリコは、一人買出しに出ていた。

歩き慣れた道を進み顔馴染みに適当に挨拶をしながら、巔頂にしている露店の前に立った。

店先に鮮やかな色合いで並べられてある野菜や果物の奥には、髭面の恰幅の良い男が一人座っている。この店の主、アルドンだ。

店の前に立って品定めしているジェリコにアルドンは気づくと、重い腰を上げて奥からやって来た。

「やあジェリコ。買出しかい」

アルドンは見慣れた笑顔を浮かべた。いつもの光景である。ジェリコもいつもと同じように返した。

「そうだよ。親父さんいつものちようだい」

ちよっと待ってろ、とアルドンは言いながら麻の袋を二つ取り出し、袋の中に次々と商品を入れていった。もちろん、入れていく商品は目に見える範囲で一番質の良さそうなものばかりある。いつものことなので、ジェリコも無言でその作業を見守っていた。

「ほら、まとめておいてやったぞ」

アルドンがどちゃり、と野菜と果物の入った袋をそれぞれ一つずつ

台の上に置いた。ジェリコは用意していた代金をアルドンに渡した。
—— かったのだが、髭みれの口を歪ませてジェリコの後ろの方を
見ていたせいで渡せなかった。

釣られてジェリコも後ろを向くと、そこには予想外の人物が立って
いた。

服装こそ地味ではあるが、肩まで伸びる金の細糸のような髪と、澄
んだ青い瞳を輝かせてジェリコを見つめているのは美しい娘だ。細
い腰に華奢な手を当て、ジェリコとアルドンに目を合わせるや否や
「やあ」とあいさつをしてきた。

アルドンはうれしそうに笑いながらあいさつを返していたが、ジェ
リコはため息をついて真反対の反応をしていた。

「ダニエラも来てたのか。まあこの荷物じゃ小さいジェリコ一人で
は運べんわな」

「親父さん、このくらい一人で運べるよ」

アルドンの言葉にジェリコは噛み付いた。もう十五だ。決して子供
ではない。

学校へ通っている者とは比べ物にならないだろうが、読み書きだつ
て独学で学んでいるし、知人からたくさん本を借りて勉強もしてい
る。年の割には世間を知っている自信があった。

「まあこの袋くらいは持てるだろうがな。しかしまだ他の材料も買
いに行くんだろ？ さすがにきついと思うがな。そういえばほら、あ
いつはどうした？ いつもはあの料理馬鹿と一緒にだろう」

「ベルナンドは調理器具を買いに行ってるわ。だから今日の買出し
はジェリコ一人よ」

言いつつダニエラは色とりどりの野菜と果物が詰まった袋に細い手
を伸ばした。

「待ちなよ」

ダニエラに言いながら、ジェリコはその手を掴んだ。先ほど言われ
たことで意地を張っているわけではない。彼女を止める理由は別に
ある。

「ダニエラはまだ寝てなきや駄目だ」

「もう大丈夫よ」

ダニエラはいつもと変わらないからとした笑みを浮かべてはいるが、態度とは裏腹にその言葉は『嘘』だった。

「どういうことだ？ダニエラは体の具合でも悪いのか」

アルドンは小首を傾げて二人の様子を見つめている。アルドンは騙せていてもジェリコは騙せない。

「僕に『嘘』は通じないって知ってるよね？」

ジェリコの言葉は強い。ジェリコのことを知らない人間からすれば、嘘を完璧に見破る人間なんて存在しないので軽く流すだろうが、この場に居るのは彼をよく見知った人間ばかりだ。

ダニエラはしばらく無表情にジェリコを見つめていたが、何を思ったか突然頬を赤らめてジェリコの手を払うと、握られていた右手をしおらしい仕草をしながら見つめ、左手で確かめるように重ねると、「いきなり女の子の手を掴むなんて、ジェリコったら随分大胆になったのね」

「はあ！？」

思わずジェリコは顔を真っ赤にして二歩ほど後ずさってしまった。後ろに下がったせいで商品籠に右手をぶつけてしまい、危うく落しそうになる。

ダニエラとは一つ屋根の下で暮らしていて基本的に慣れているとはいえ、ベルガモでも一、二を争う美しさを誇っている人物にいきなりあんな不意打ちをされてはいくらなんでも焦るじゃないか……！そんなダニエラは鼻と口で呼吸をしているジェリコを捨て置き、金髪をなびかせ電光石火の勢いで袋を手を取った。そしてジェリコの方を振り向くと心底楽しそうに笑うのであった。

「うふ、やつぱまだまだ子供ね」

勝ち誇った笑みを浮かべるダニエラの両腕には、野菜と果物が詰め込まれた袋がある。目の前で宝を横取りされたような、いや、それとは少し違う微妙な敗北感にジェリコは包まれた。

しかしジェリコも若い身空で様々な困難を乗り越えてきた人間である。とつさの判断力や、危機に陥ったときに冷静になる心得はすでに持ち合わせている。

昂ぶった心を深呼吸一つで沈めると、ダニエラに向かって言い放った。

「今は大丈夫かもしれないけど、熱がぶりかえしたらまずいだろ？働いている最中に倒れでもしたらお客さんもこっちも困る。病氣つてのは治りかけが一番大切なんだ」

「そんなこと分かってるわ。けどこの程度の風邪なら寝てばつかりよりある程度体を動かしていた方が治りがいいのよ。熱は間違いない下がつてるし、後は体を慣らしていくなんだから大丈夫よ」今の言葉に『嘘』はなかった。聡明な彼女のことだ、自分の体のことは自分が一番分かっているに違いない。ジェリコは上手に切り返せず、むうと唸るだけだった。

——もつと体が大きくて力があれば。最近、何かと悩むことが多くなっている。何をするにしても、自分の無力を感じることがままあるのだ。

ふと、小さい頃の記憶がちろりと覗いた。

長身で、煌きを放つ黒いスーツを纏い、闇を映したかのようなハットを目深にかぶってステッキをかざす男の姿が目に見えた。

幼い頃見た紳士の背中。一期一会の出会いではあったが、彼は人としてのあり方を教えてくれた。彼はもうジェリコのことを覚えていないだろうが、父親のいないジェリコにとって、かつこい男の背中というものを初めて見た瞬間だった。だから余計に彼の勇姿は目に焼き付き、今も心に残っている。その場に居た友人達もまったく同じことを思ったに違いなかった。

——もつと強くならなくては。

そんなことを思いながら、ジェリコはダニエラが抱えている袋を仇のようにして睨みつけると、

「じゃあ一つだけ持っていてよ。片方は僕が持つ」

言うが早いか、果物が詰まった袋を奪い取った。直感的にこちらの方が重そうだったからである。事実、持ってみるとずしりと来る重さだった。

ジェリコはそのまま次の目的地である魚屋へと足を向けようとしたが、ダニエラに襟首を掴まれた。悔しい。まったく、今度は何だというのだ。

「代金はきちんと支払った？」

じと目でため息をつきながら言うダニエラに釣られて、ジェリコも魂が抜けそうなため息をついた。

「まったく、お前達はほんとに仲がいいな」

アルドンの苦笑いから逃げるように、ジェリコは渡し損ねた代金を渡したのだった。

#2・はじめは日々の日常から part 2

ダニエラと一緒に歩き出してから、住民の視線が一気に集まるようになった。まるで貴族を見る目のようである。

好奇、羨望、嫉妬など。ジェリコはこの色々な種類の視線にまだ慣れなかった頃、彼女と街を歩くのがたまらなく嫌だった。

しかしその視線も一年経って慣れてしまった。というより町の人間達が二人に慣れたというべきか。今ではジェリコ自身もある方面で有名なのである。そのおかげでジェリコもこの住民には温かく見守られているのだ。最近ではラ・メールの義姉弟なんて世間では呼ばれている。

「ねえジェリコ。最近はどうな絵を描いているの？」

ダニエラが藪から棒に尋ねてきた。青く、どこまでも広がる空を見上げてジェリコは答えた。

「最近はや中の町並みを描いてるよ。夜空の表現を考えるのが楽しいんだ」

まだまだ研究中だが、その風景が持つ雰囲気によって明度を落した藍色や紫色、はたまた緑色など様々に変えるようにしている。その上で星や町を描いていき、自由な世界を構築していくのだ。

「そう。前に見せてもらった絵も綺麗だったけどそれも凄そうね。今度見せてよ」

「いいよ。まだ満足いくものは描けないけど、それでもいいならいつでもどうぞ」

うん、と花が開くようにダニエラは笑顔を浮かべた。こんな満点の笑顔を見せられたら、絵を描く時に気合が入るというものだ。独りよがりの絵を描くのも嫌いじゃないが、誰かのために絵を描くというのもまた別の良さがある。そこには人と人との繋がりがや温もりが満ちているからだ。

「おや、ダニエラとジェリ坊が買出しとは珍しいな」

後ろから精悍な男の声が聞こえてきた。馴れ馴れしい言葉ではあるがそれは幾分親しみのこもったもので、往年の友人に声をかける感じによく似ている。

ジェリコとダニエラが振り返った先には、こんがり小麦色に焼けたたくましい体付きの男が立っていた。何が面白いのか、そこだけ妙に真っ白い綺麗な歯を見せながら笑っている。

「マドックさんこんにちは。丁度いいところで会いましたね」

「おうよ。今日も活きの良い魚が入ってるぜ」

がははと豪快に笑いながら、ダニエラの細い肩を軽く叩く。彼はこれから向かおうとしていた鮮魚店の主、マドックだ。ラ・メールの常連客でもある彼は、ジェリコとダニエラのことを良く知っている。「なあ、ジェリ坊、今度俺の船を描いてくれよ。船室に飾りたいからよ」

「もちろんいいですよ。その代わり——」

「あー、皆まで言うな。ちゃんと駄賃払ってやるよ。お前さんの描いた絵は不思議な力が宿るっていうからな。タダで描いてもらおうなんて思っちゃいないさ」

「いや、冗談ですよ。お金なんて要りません。マドックさんが満足する絵を描けるかも分かりませんし」

ジェリコの描いた絵は商売繁盛を約束されるといわれている。事実、儲けが上がった店がいくつあつて、この町ではちょっとした有名になっている。

——鍊金の若画家。それがジェリコの異名でもあった。

「そういえばジェリ坊。この前アドリアンがジェリコをフレンソの知人に紹介したいと話していたぞ」

「フレンソ!?」

抱えていた袋を落しそうになった。

アドリアンというのは芸術の国フレンソからやってきた画商で、彼もジェリコが働いているラ・メールの常連客の一人だ。ちなみにジェリコの画才に最初に気づいたのも彼である。さらに画材を格安で

提供してもらっているんで彼にはかなり世話になっている。

そんな彼は画商であるが故に色々な画家と繋がりがある人物だ。その知人といったらもはや人間は限られてくる。

マドックは拳動不審なジェリコを微笑みながら見つめ、

「おそらく画家の一人だろう。お前も一人前の画家になる一步が踏み出せそうだな」

ジェリコの夢は世界をまたに駆ける画家になり、絵で人々を幸せにすることだ。そのためには世界を旅する必要があるため、こうして働いて資金を貯めているのである。

その夢に一步近づける。本物の画家の姿を見ることによってたくさんのもので得られるだろう。しかし――。

「今日明日辺り、ラ・メールにアドリアンが来るんじゃないか。いやまあお前も顔が広くなったものだな」

がははと笑うマドック。……確かに、自分もこれほど色々な人と知人になれるとは思わなかった。

商業で盛んなこの国の特質も関係しているだろうが、酒場で働いていると本当に人種も性別も仕事も違う様々な人が来る。さしたる理由も無く直感的に酒場で働き始めたが、大正解としか言いようが無かった。

そのまま三人で話をしていると、いつの間にか目的地についていた。マドックの店は鮮魚店である。露天ではなく、きちんとした屋根のある石造りの建物だ。店に入ると、氷を敷き詰めた木箱の中に並べられている魚や貝達が、輝きながら出迎えてくれる。奥の方では生簀もあり、そちらの魚も購入することができる。この辺りの魚屋では一番立派な店で、雇っている人間も多く、取り扱っている魚の量も質も良い。ただ、仕入れのために定期的に南の港町モンツアへ行くため、店が休みになることがある。

「よし、いつもの青魚で数も一緒だな？」

「はい。お願いします」

店に戻ったマドックは奥にいる手近な店員に声をかけて、手際よく商品を手配する。その姿は先ほどの友人のような態度ではなく、完全に商人の姿だった。流れるような作業を見つめていると、あつという間に青魚数匹と貝類を種類別にまとめた包みを四つほど持ってきた。

「そういえば、なんで今日はダニエラと一緒にベルナンドがいねえんだ？荷台がねえと買出しもままならんだろ」

包みを手近な台に置き、マドックが言った。ジェリコは代金を取り出しながら答えた。

「ベルナンドは調理器具を買いに行っていて、荷車も持って行ってるんです」

「そうか。確かに料理道具は重い上に嵩張るからな。販売している店も食料品関係とは逆の方向にあるし」

マドックは納得するように頷いた。

「それでダニエラとか。お前達二人が買出しに来ているのを見ると、昔を思い出すな」

顎鬚をさすりながら、マドックは懐かしむように遠くを見た。

そしてよし、と一人うなずくと、

「さすがに荷車は貸せんが、肩掛けのついた鞆ぐらいは貸せるぞ。

それ使つて今日は帰るな」

「ありがとうございます」

正直に言わせてもらうと、内心かなり助かった。今持っている袋に加えてあの四つの包みを持ち帰るのは不可能に近い。ここは大人しく好意に甘えることにした。

「おいヤレン！掛け付きの袋二つもってこい！」

マドックは店の奥のほうへ声を投げかけた。するとすぐさま「はい」と返事が返ってきた。

ヤレンはマドックの一人息子だ。あまり話したことは無いが、真面目な人だという印象を持っている。傍から見る限り、他の店員よりもよく働いているし、動きも効率的だ。マドックのようにきつと良

い商人になるに違いない。

「店長、明日の祭り用の魚はどの生簀に入れとくんでしたっけ？」

店員がマドックの背中に話しかけてきた。体格の良い若い男だ。名前は知らないが彼もヤレンのようによく見る顔だ。

「三番だ。さつき伝えといただろ。ちゃんと人の話し聞いとけ」

「すみません」

若い店員はマドックに一礼してとそそくさと奥の方へ消えて行く。

彼の言葉で思い出したが、そういえば明日は祭りの日だった。

毎年この時期になると新たな年の幕開けと町の繁栄を祝う祈春祭というものが行われる。中心部の広場で色々な店が開かれ、楽団の音楽に合わせて人々は踊ったりするので。そして商人の町だからか、祭りの日はどの店も商品を安く売るのである。おかげで町はけが人が出るほど客でこった返しになるため、この地方でも有名な祭りの一つだ。

マドックは毎年中央広場で美味しい魚料理を販売しているはずだ。

先ほど店員が尋ねてきたのはおそらくそれ用の魚のことだろう。

「明日は祈春祭か。うちも大変だが、お前達も大変だな」

「ええ。毎年客が酔いつぶれて店を占拠しちゃいますから」

ダニエラは笑いながら答えた。祭りの日はいつにもまして客が押し寄せるので、通常の倍以上は忙しい。それこそ猫の手でも借りたいほどだ。しかし祭りの熱気に当てられて気前良く金を払ってくれる連中もいるので稼ぎ時でもある。

「しかしお前達も不憫なもんだな。年頃だつてえのになかなか遊ぶ時間が無いだろ」

「いえ、そんなことないですよ。今みたいに昼間は基本的に自由な時間ですから」

まんざらでもなさそうにダニエラは言った。

「いや、祭りに出たことあるか、ということだよ。一度も無いだろ。年頃の女が遊びを一つも知らないのはどうかと思うんだがなあ。今度ドメニコに一言言ってやろうか」

「いや、いいですよ。私は今のままでいいですから」

はは、と乾いた笑いを浮かべるダニエラ。

それもそのはず、以前マドックとドメニコはこの話題で揉めたことがあるのだ。ドメニコの教育方針に文句を言ったマドックをドメニコが人様の家に口出しするな、という風に。

結果はダニエラが割って入って無理やり二人を落ち着かせたという、最悪の事態で終わってしまった。

二人ともダニエラのことをとても大切には思っているのだが、空回りすることが多い気がする。まあ、それもこれもダニエラがあまり自己主張をしない性格だからなのだが。現に病み上がりの癖に自分を手伝っているのだ。正直なところ助かっているが、もう少し自分を大切にしてほしい。

マドックは以前のことを思い出したのか、気まずそうに顔をしかめると、

「むう、そう言うなら仕方が無いが……。せめて男がいれば、俺やドメニコも少しは安心するんだけどな。お前は男っ気が全く無いからなあ。その辺の軟弱な男よりも立派だから無理もないが」

そして「そういう点ではドメニコも育て上手なのかな」と続けながらマドックは軽いため息を吐いた。

問題点その二はこれだ。ダニエラは何でもでき過ぎる。男が必要な場面というのがとにかく見当たらない。男からしてみれば、美人で性格もいいという時点でかなり難しい攻略対象な上に、ダニエラはとにかく賢いのだ。下手な小細工は通用しないし、噂では言い寄ってきた男をやりわりと断ち切るのも上手で、反論する暇も無く引き下がるのを余儀なくされるらしい。天は二物を与えるのだ。不公平なものである。

そしてそんな心配を知ってか知らずか（おそらく知っているだろうが）、ダニエラは至ってのんきに微笑んでいる。

「きつとそのうちできますよ。私も女ですから」

「いや、そうなんだがな。最近物騒な話もあって、ちょいと心配な

んだよな」

「物騒な話？」

思わずジェリコは呟いていた。昔から好奇心旺盛なせい、善悪構わず何にでも首を突っ込みたがるのだ。この性格は直そうとしてもなかなか直らないところだった。

ジェリコの言葉に頷いたマドックは話を続ける。

「二週間くらい前か。南のモンツアで仕入れをしているときに地元の人から聞いた話だ。モンツアでは先月から若者の失踪事件が多発しているらしい。とりわけ女子の失踪が多いそう。モンツアの警備隊やギルドが動いているそうだが、結果はさっぱりだ。噂では二十人近く失踪してるらしいぞ」

「二十人も！？まさか……」

ジェリコは激しく動揺した。生まれ育ったモンツアの事件ということもあるが、何より気になったのは共に育った友人達のことだ。

ジェリコは物心つく前にセプロという修道女がやっている孤児院に預けられた。そこではとてもよくしてもらって、色々な経験をした。今のジェリコがあるのもセプロのおかげだ。

そして今のジェリコを形作ったもう一つの要素は、友の存在である。シンリー、フォレンティーナ、モンテロッソ、エンリコ、ジョルジヨ、そしてジェリコを含めた六人はこの孤児院でも有名な子供達だった。孤児院の院訓である弱きを助け強きをくじくという、子供にとっては巨大すぎる旗を掲げてモンツアの街を駆け回ったものである。

笑いあったり泣きあったり、怒鳴りあったり死にかけたりと、波乱に満ちていながらも充実した日々だった。そんな時間を共に過ごしてきた彼らはもはや血肉となってジェリコの中で生きていた。

そしてその友人達は今もモンツアにいるはずだ。何人かはロンバルディというアイトラ屈指の都市で学校に通っているが、他の仲間はそのままモンツアで暮らしているはずである。

——彼らは、無事なのか。

ダニエラとマドックは黙り込んだジェリコを驚いた様子でしばらく見ていたが、ジェリコがモンツアから来たということを思い出してようやく理解したようだった。

「そうね。故郷でこんな凶悪な事件が起きてたらびっくりするわよね。友達もいるでしょうし」

ダニエラはそつとジェリコの肩に手を置いた。

「いなくなった二十人にお前の友人が入ってるとは限らんだろ。モンツアだって人口が少ないわけじゃないし、若い者といっても年齢層の幅は広いそうだ。俺も今度仕入れに行くときにはこの話について調査してくるからよ。安心しろとは言わないが、そこまで気落ちするな」

「……あ、はい」

気づかなかったが、どうやら自分はかなり落ち込んでいるらしい。傍らの窓に映った自分の姿を見ると、死んだ魚のように顔面蒼白で精気が無かった。

「とまあ、話は前後するが、この町は色んな物資があらゆるところから来るからな。こういう事件性のあるものも間違つて入ってくることも多いんだよ。何が言いたいかわかるか？」

マドックは暗い話を払拭するように、妙に大きな声で話し始めた。そしてダニエラに向かって問いかけたが、彼女は無言のままだった。そんな様子を見てマドックは不満げに腕を組んだ。

「だからダニエラ。お前に頼りになる男がいれば、俺たち大人も安心するのに、ってことだよ」

それは確かにそうだ。隣街の未解決の事件が流入するのはあり得ない話ではない。マドックの言うことも尤もだ。街のものが皆が愛しているダニエラを守ってくれるような、頼りになる屈強な男が居れば安心である。ましてやダニエラは美人なのだ。失踪事件にこれほどぴったりの人材はいまい。

ダニエラはマドックの言葉に微笑みながら、

「そうですね。確かにその通りだと思います。ですが――」

ダニエラは両腕をジェリコの首に回して、その細い体の方へ引き寄せた。ふわっと、桜色のように優しげな匂いがした。

「ジェリコがいるから大丈夫ですよ」

ふふっと笑いながら、こんなことを言うのである。こんな男のどこが頼れるのか。姉のような存在に抱き寄せられただけで馬鹿みたいに赤面するような男など、情けなさ過ぎて役に立たないだろうに。

マドックは顔面蒼白の顔を一気に沸騰寸前のやかんのように変化させたジェリコを見て、

「まったく、大層な騎士様だな」

憎まれ口を叩いた。ごもつとも。

しかしダニエラに抱かれていると、小さい頃置き忘れたような、遠くに置いてきてしまった様な大切な何かを感じるのである。この春の風のように柔らかい優しさに包まれる度に、何かが思い出せそうになる。

だがそれは、深く朝靄の立ち込めた川の上で、目隠しをして手づかみで魚を捕ろうとしているようなものだ。そんな芸当、ジェリコにできるはずはない。

それにしても、ここ数年でダニエラはなんというか柔らかくなった。四年前、ラ・メールで働き始めた頃はもつとあつさりというかさばさばしていた気がするのだが、ここ数年で妙に角が無くなったと思う。なんというかこう、色々丸みを帯びたような……。

ジェリコは少しずつ冷静になりながら、現状を客観的に観察していく。彼女の身長はジェリコの頭一つ分上である。この状態、頭の後ろ辺りはダニエラのお腹の上の辺りか。

そんなことを考えながらたった今、明確にこの事態を把握した。

「うう！」

頭の後ろにあるモノを頭の中で明確に捕らえた瞬間、冷め始めた顔が再び燃え盛る業火に突っ込まれ、熱く火照りだした。駄々をこねる子供のようにダニエラの腕を振り解くと、飛び退る獣さながらに素早く彼女に向き直った。

「あら、もういいの？」

ダニエラは形の良い目を細めてうふふと嫌らしい笑みを浮かべている。正直もう少しあの優しさに浸っていたかった、なんて思う辺り、我ながら本当に大層な騎士である。あんな姿を見られれば誰だって呆れ果てるだろう。

「いつまでも子ども扱いしないでよ」

知らず、そんなことを口走っていた。

「それは最低でも私より背が高くなってから言うべき言葉ね」

赤くなった顔はそのままに、心はつららを打ち込まれ急冷されながら破壊していくようだった。まったくもって返す言葉が無い。

「ジェリ坊の将来は実に楽しみだな」

頭を垂れるジェリコの背中を、海の男は豪快に笑うのだった。

#3・はじめは日々の日常から part 3

マドックの店を出た後、魚の鮮度を落さないために一度酒場へ戻った。その後、再び別の材料を買いに行った。

ラ・メールを出るときダニエラがまた付いて来ようとしたが、断固として断った。これから店を開き忙しくなったら嫌でも働かなければならないのである。そのために少しでも体力を温存しておいてもらわなければならない。荷車も帰ってきていたことも相まって、ダニエラは渋々引き下がったのだった。

そして一人で買出し出て、馴染みの店で肉と雑貨を仕入れて酒場に戻ると、地平線に座っている黄金の夕日が眠りかけていた。

荷車を倉庫にしまい、そのまま持てるだけ荷物を持って裏口から店内に入る。

倉庫にある裏口からは短い空間を挟んで厨房に繋がっている。ジェリコは先ほど仕入れた肉を運びに行った。

厨房にはこの店で唯一の料理人であるベルナンドが調理台の前に立ち、小気味良く包丁を操っていた。

元々この厨房はドメニコの妻、アンナの管轄だった。しかし六年前、彼女は事故に遭ってしまい利き手の右手が悪くなった。料理を作れないことはないが、たくさんの料理を素早く作らなければならない酒場の仕事はできなくなってしまったのである。

そんなとき、料理人修行をするために働ける店を探していたベルナンドと出会った。以後、彼はこの店の料理人として働くこととなった。

ジェリコは彼のことを兄のように慕っている。山のような注文をたった一人でこなすという腕もさることながら、なにより冷静で風格のあるその姿を尊敬していた。

だがそんなジェリコの気持ちとは裏腹に、ベルナンドはジェリコのことをあまりよく想っていないようだった。露骨に毛嫌いする様子

は微塵も感じさせないが、ジェリコの鋭い勘が警鐘のように知らせていた。彼がなぜそんな風にジェリコを見ているのか理解できなかったが、そういう人間もいるのか、くらいにしか今のジェリコは考えていなかった。

「おかえりジェリコ。お疲れ様だな」

黙々と野菜を刻みながら、ベルナンドが話しかけてきた。低く通る声が狭い厨房に満ちて、全身を声に包まれるようだ。

「いえ、いつものことですから。それよりベルナンドさん、この豚肉はどこに置いておきますか？」

「買いに行ったのは豚だけだったよな？」

「はい」

「なら材料棚に入れられるだけ入れといてくれ。残りは地下でいい。後で処理しとくから」

「分かりました」

ジェリコは片隅にある材料棚の前に立つと、下の段を開いた。棚の中には既に、さきほどジェリコが購入してきた魚が所狭しと並んでいた。

材料棚の大きさはジェリコよりも頭二つ分大きく、四カ所に仕切られている。半分より上の段は野菜や果物用、下は魚や肉用である。

「そつえば、ダニエラの具合はどうですか？」

肉を敷き詰めながら、ジェリコはダニエラのことを気になった。一人で買出しに行く前、ダニエラの様子は至って普通に見えたが、働けるほど体力があるのだろうか。さきほどは問題無いだろうとジェリコの勘は判断したが、いつも冴えているわけではない。もし今日無理に働いて熱がぶり返してしまったら、明日は一人で頑張らなければならなくなる。ダニエラの調子に対してジェリコは身内としての心配と職場の同僚としての心配が混在していた。

ベルナンドは包丁を動かす手を止めずに答えた。

「レモン酒を持って行ったときに少し話をしたが、問題はなさそうだ。あいつの体はあいつが一番分かっているだろうし。本当にまず

い状況なら自分から言ってくるさ」

「ですよね。ダニエラはしっかりしてますし」

「ああ。それよりお前の体調はどうだ？ 祭りは明日だが、忙しさは実質今日からみたいなものだろう。客にとって今夜は前夜祭だからな」

ジェリコは微笑みながら材料棚の扉を閉めると、

「大丈夫です。それに忙しい方が楽しいですから」

ジェリコはたくさんの方がごった返し、笑い合いながら酒を飲む姿を見るのが大好きだった。

今日の不幸を肴にし、酒と笑いで明日を迎える彼らの姿を見てみると、昔の自分を思い出すようで心が温かくなるのだ。孤児院ではいつも仲間達と一緒に、寝ても覚めても騒いでいた。

明日はどこへ行くのか。森にある湖で釣りをしようか。街の治安を守るため一日中街の周りや中を歩き回ろうか。自由に生きていたあの頃が本当に懐かしく、愛しかった。

「まあ、あまり無理をするなよ。ダニエラとお前が倒れたら店が成り立たんからな」

「はい。ベルナンドさんもあまり頑張り過ぎないようにしてくださいね」

「余計なお世話だよ」

微笑むベルナンドを見て、ジェリコは厨房を後にした。

#4・はじめは日々の日常から part 4

夕日が瞼を閉じて藍色が世界を包みこんだ頃、ラ・メールは満席になりつつあった。

ベルナンドの予想通りの展開だ。今日はいつもより客が来る時間帯が早く、これからもっと増えそうな雰囲気満ちている。中にはもう酔いつぶれている者もあり、仲間にかかわれながらも介抱されていた。

ジェリコとダニエラは店の中を縦横に駆け巡り、それぞれが孤軍奮闘していた。注文を受け、厨房に伝達し、料理ができるまでの間にまた注文を受け、料理が完成したら運ぶ。単純な作業だが、仕事量が半端ではない。比率で言えば一対二十くらいである。

ただ、客の大半はスープや酒などの簡単ですぐに運べるものを頼むので楽ではある。だが、中にはそれなりに量も形もしっかりした料理を頼む客もいる。正直そんな注文を受けたときは殺意に似た気持ちすら沸いてくるが、我慢しなければならない。厨房のベルナンドも、そういった手間のかかる料理の注文を受けたときは涼しい顔を無意識に歪ませている。

最前線のジェリコとダニエラも、客の前では笑顔を絶やさないが、料理や酒取りに厨房の中へ入った途端、感情を白紙に戻すように真顔になっていた。段々とこれが酷くなると眉間に皺を寄せたり目つきが悪くなったりする。それでもしないとやってられないのである。

主人のドメニコ曰く、「人件費が高張るから今以上雇えない」らしいが、せめてあと一人くらいは雇っても罰は当たらないだろうとジェリコとダニエラは共感していた。雇わないのは、人件費以外の他意があるに違いなかった。

そんな野暮な考えも放り投げ、さきほど注文を受けた人間の顔を思い出しながら額の汗を乱暴に拭い、手に手に料理を持って再び戦場

へと向かう。圧倒的不利なこの戦況を覆すことは叶わぬ夢だが、食い止めることはできる。女のダニエラが頑張っているのに負けていけないという気持ちもあるが、ジェリコは己の弱さに打ち負けることがなによりも嫌だった。

「やあジェリコ。今日も精が出るね」

瀑布のような喧騒の中、突如落ち着いた初老の男性の声がジェリコの耳に滑り込んで来た。

注文を殴り書きした紙を握りしめながら声の方へ目を向けると、画商のアドリアンが一人ブドウ酒を飲んでいた。

ジェリコはアドリアンに近づくと軽く会釈した。

「こんばんはアドリアンさん。ご注文ですか？」

「ふむ、そうだな。ならわしの好物を一ついただこうかな」

アドリアンの好物といえば、この店でも人気の野菜と肉の煮込みスープだ。

ジェリコは常人では読めないような崩れた字で注文を書き留めると、アドリアンから差し出された料金を受け取った。

「かしこまりました。少々お待ちを」

ジェリコは微笑んでいるアドリアンに向かって一礼すると、急いで厨房へ向かった。

ドメニコがいるカウンターの端にある、もはや開放たれた厨房の扉をくぐると、色々な料理が所狭しと並べられていた。これらはこれから運んでいく料理達である。半数はジェリコが請け負った分、もう半数はダニエラの分だ。

「客はまだ増えているか」

鬼のような形相で肉と野菜を炒めているベルナンドが歯を食いしばりながら話しかけてきた。

「いえ、だいぶ落ち着いてきました」

「わかった。そっちも負けるなよ」

「はい」

ベルナンドもかなり参っているようだ。たった一人でこなしている

のだから無理も無い。ジェリコは左手にブドウ酒を四つ持ち、右手に豆のスープを持って厨房を出た。

すれ違いにダニエラが入ってきたが、とくに挨拶を交わすことなく通り過ぎていく。お互いそんな余裕はもう無い。とにかく少しでも多く注文を消化しなくてはならない。話をするのはその後だ。

ブドウ酒とスープを運び、その後炒め物とブドウ酒三つをやっつけた後、ようやくアドリアンが頼んだ料理を手にとった。

人ごみを掻き分けてアドリアンが座っているテーブルへと向かう。

アドリアンは知人らしき男と話しをしていた。

「お待たせしました。豚と野菜の煮込みスープです」

「おう、ご苦労さん」

テーブルの上にスープ置いて去ろうとすると、アドリアンは「少しいかな」とジェリコを引き止めた。

「？」

ジェリコは次に片付ける仕事を頭の片隅に置きつつ、アドリアンに向かい合った。

アドリアンはスープを一度口にして、

「ジェリコ。実は君の絵に興味を持った画家がいてな。彼に君を紹介したいんだがどうだろう」

「はい？」

アドリアンが何を言っているのか分からなかった。自分の才能に興味を持った画家がいるだと……？

一瞬彼が言っていることに頭がついていなかったが、昼間マドックが言っていた言葉を思い出し、合点がいった。

「それはどちら様ですか？」

アドリアンはうなずくと、

「ティツア・ノ・ベゼリオーだ」

アドリアンの言葉に、ジェリコは今度こそ頭が真っ白になった。客で雑多になっている景色は、目眩と共に急激に遠ざかり、この緑色の瞳の奥にはアドリアンの笑みしか映らない。

天啓さながらの言葉は一本の槍となり、ジェリコの体を真つ直ぐに串刺しにして地面と繋げてしまっている。故に体が動かない。まるで石膏像にでもなってしまったようだ。

その凍りついた時を融解したのは、からん、という乾いた音だった。ペンと紙が床に落ちたときの音でジェリコは我に返り、全身から汗が噴き出した。

面白いくらいに動揺しているジェリコを見つめて、アドリアンは話を続けた。

「先日フレンソに行ったときに、面白い絵描きがいるという話をティツアにしたら随分と興味をもつてな。ぜひ一度会ってみたいと言ってきたんだ。どうだい、君にとって悪い話じゃないだろう」

アドリアンは両手を組みその上にあごを置くと、にやりと笑った。厳格な顔に刻まれた皺によって奥に潜む木目色の両眼は隠れていく。ジェリコはその瞳に吸い込まれるように目を奪われた。研ぎ澄まされ、あらゆるものを穿つような鋭さを秘めているそれは、長年培って得た『観察眼』というものだ。

彼の話は確かにおいしい。むしろ断る要素は皆無に等しいだろう。なにせ本物の画家と対談できるのである。一般人が画家のアトリエに入ることなど普通は出来ないのだ。こんな二度となさそうな話、画家を志しているものなら一も二も無く頷くのが当然だ。

そしてこの話はアドリアンにとってもうまい話だった。うまくいけば、ジェリコは若き画家として世界に飛び立てるかもしれない。ただでさえ厳しい画家の世界で、名のある画家に興味を持たれた若者なんぞいれば、ジェリコの名はその筋で一気に広まるだろう。そしてジェリコの描いた絵を一目見ようとやってくるはずである。そこでアドリアンはその時に生まれる利益を求めるはずだ。

しかし画商が利益を求めることはまったくもって当たり前である。商人はいかに利益を出すかが問題だ。それはジェリコもよく分かる。だが、個人的にジェリコはそういった私利私欲のための絵描きにはなりたくなかった。青二才がこんなことを考えるのは小賢しいにも

程があるのだが、考えてしまうのだから仕方が無い。

ジェリコは気づかない振りをしていたが、今までアドリアンが格安で画材を提供してくれていたのは、将来ジェリコが有名な画家になったときに備えて貸しを作ろうとしていたからである。才能を認めてくれるのは涙が出るほど嬉しいが、それを「金」に結びつけるアドリアンはある部分で大嫌いだった。

そして、そのアドリアンの計画の大きな転換期が今だ。

ここでティツア氏に会いに行けば、確実にジェリコの名が広まる。うまくいけばそのまま商売に繋がる。すでにある程度の実績もあるのだ。今まで描いてきたジェリコの絵はそれなりの価値が出るに違いない。そうすれば画家としてとてつもなく大きな一歩を踏み出せるだろう。

しかしその瞬間、今まで魂を込めて描いてきた作品が、その辺りに転がっているような俗物に成り下がってしまいそうなのが猛烈に嫌だった。

ジェリコが黙り込んでいると、アドリアンがスプをまた一口飲んだ。

「どうかね。悪い話じゃないと思うが」

おそらくアドリアンはジェリコの胸中を悟っているだろう。その上で誘ってくるのである。そしてアドリアンほど熟練の商人ならば、売れるもの売れないものを見る目が相当肥えているはずだ。そんなアドリアンが誘ってくるのだから、きっと売れるのだろう。ジェリコは。

そんな風に考えた途端、あっさりと結論が出た。そしてその結論を熟考することなく、思いが口から流れ出る。

「すみませんアドリアンさん。僕はまだティツアさんのように巨大な画家とお話するほど絵描きとして出来てないと思います。なので、今回は遠慮させてもらいます」

ジェリコは後頭部が見えるくらい頭を下げた。周りの人間から見れば、アドリアンに対して何かしらの粗相をしてしまったと見られる

だろう（事実、粗相なのだが）。そうなる場合によっては客に悪い印象を与えることとなり、最終的には店の評判を落とすことにも繋がる。後でドメニコにどやされるかもしれない。

しかしジェリコにも譲れないものがある。空っぽの幼い心が憧れた美しい絵画の世界。自分や他人が望む理想の世界を作り上げることが出来るその素晴らしさに、下賤なものを付与したくは無い。

「ふむ、そうか。本人がそういうなら仕方が無いな」

アドリアンはあっさりと引き下がった。彼は食い下がってくるかと思っただが、予想は外れたようだ。

アドリアンは努めて穏やかな表情で、

「ジェリコはまだ若いからな。これからどんどん成長していくだろう。将来が楽しみだな」

そんなことを言いながら笑った。そしてブドウ酒をぐびりと喉を鳴らして飲み干した。

「ティツアには伝えておこう。今以上に力をつけてから出直します、とな」

アドリアンは立ち上がるとジェリコの頭をぽすつと叩いた。

「ではな。しっかりと働けよ」

そして磨きぬかれた杖を手に持つと、出口へ向かった。ジェリコはそのピンと張った後姿を見つめながら、やはり勿体無いことをしたかな、と少々悔やんだ。

扉に手をかけたアドリアンは、用は済んだとばかりに外へと足を踏み出しかけ、

「ああそうそう」

——ふと、振り向いた。

「言い忘れていた。良い目をするようになったな、ジェリコ。その調子で腕を磨けよ」

老獪な画商はそういい残し、ラ・メールを後にした。

スーパはまだ半分以上残っていて、表面には膜が張り始めていた。

5・はじめは日々の日常から part 5

深夜。町が完全に眠り始めた頃、ジェリコは少し埃臭いベッドに腰掛けていた。

傍らには小さな机があり、借りてきた本やデッサンするときを使う木炭、ナイフなど色々な物が散乱している。

部屋の隅には空き瓶やら筆やらの画材が無造作に固めて置いてあり、その隣には今まで描いてきた絵たちが柱のように積み重ってジェリコを見下ろしている。

そして部屋の中心部にはジェリコの宝ともいうべきイーゼルが、窓から差し込んだ月明かりによってぼんやりと照らされていた。

ジェリコは立ち上がると窓際の方へ歩いた。藍色の空には、ぽっかりと開いた白い穴のように月が浮かんでいる。しばらくの間、無心にその姿を見つめていた。

浩々と輝く満月は、ジェリコの顔を白くする。あの月まで辿り着くには、どれだけの時間と距離が必要なのだろうか。

そんな突飛なことを考えながら、いつか月まで好きな人と歩いて行けたらいいな、などと柄にも無く感傷に浸り、

「綺麗だ」

気づいたら、そう呟いていた。

「あら、ありがとう」

「——！？」ジェリコは心臓が、口から飛び出しそうになった。人間は本当に驚くと、声が出ないものなのだと今更ながら知った。

振り返ると、いつの間に近づいてきたのかダニエラがジェリコの後ろに立っていた。

そして微笑みながら端正な顔をジェリコに近づけてくる。白い光を弾く金髪がさらさらとジェリコの頬を撫で、深い青色の目に魂が吸い込まれそうになる。

「綺麗なのは私？それともお月様？」

一瞬、月が部屋の中に落ちてきたと思った。

声が出ない。体も動かない。空に浮かんでいる月とまったく同じ浩浩とした輝きを放つダニエラに対して、まともな答えなんて存在しない。一心同体のものを比較するなんて無理じゃないか。ダニエラはいつも無理難題を押し付ける。本当、こういうことをされるのは困る。

「……そう」

答えに困り果てたジェリコを見かねたダニエラは、仕方が無いとばかりに顔を離した。

青い目から開放されたジェリコは安堵の息を吐きながら、ようやくまともにダニエラを見た。

「ノックぐらいしてよ」

「したわ。六回もね」

ジェリコは無意識に頭を下げていた。完全に自分の不注意である。

「で、何の用？」

ジェリコは話をそらすかのように適当に尋ねた。大方昼間言っていた絵を見に来たのだろう。

ダニエラは近くにあった椅子に腰掛けるとため息を一つ吐いた。そしてジェリコを静かに見据えると、柔らかそうな唇を開いた。

「どうしてアドリアンさんの誘いを断ったの？」

そう来たか。

最初ジェリコとアドリアンの話を聞いていたのか、と思ったが、ジェリコの頭を下げた姿をダニエラが見ていたとしたら、この結論に辿り着くのは当然か。昼間にマドックの話を聞いているのだから、簡単に想像がつく。

ジェリコは窓に寄りかかると視線を合わさずに答えた。

「本物の画家と話をするほど偉くないからさ」

「そういう問題？本当に貪欲に画家を目指しているんなら、本物に会って技術の一つや二つ盗むくらいの気持ちでいるのが普通じゃない？」

随分とダニエラは食いついてくる。なぜだろうか。

「こんな話二度と無いかもしれないっていうのに」

「いいんだよ。僕が決めたことだし、ダニエラには関係ないだろ。

僕には僕の目指す絵描きの姿があるんだ。今はそれに向かってがむしやらに走りたい。そう思ったただだよ」

不満そうな表情を示しているダニエラは、無言でジェリコ見つめた後、

「理由は本当にそれだけ？」

実を言うと理由はそれだけではないのだが、ダニエラに話してもしょうがない事ばかりだ。ジェリコは月を見上げながら「そうだよ」とぼつりと答えた。

「……」

ジェリコの答えにダニエラはうんともすんとも返事をしなかった。

ただ無言で、ジェリコを見つめているようだった。

そのまま幾分かの時が過ぎ、月が薄い雲に隠され始めた頃、

「モンツアの友人達が心配なんでしょ？」

唐突にダニエラが口を開いた。

「今フレンソなんかに行ったらしばらくはこっちに帰ってこれないもの。ジェリコ、あなたモンツアに行こうとしているわね」

「……」

ダニエラの頭の良さには本当に感服する。心が読めるのだろうか。

ジェリコは月明かりが消えたと同時にダニエラの方に向いた。ダニエラの青い瞳が、真っ直ぐにジェリコに注がれていた。

「モンツアへ今行くのは危険よ。ジェリコのことだから、一人で行こうとしてるのでしょう？」

そのとおりだった。ジェリコという人間は基本的に人に世話をかけることが好きではない。できるだけ何でも一人でやろうとする。ダニエラはジェリコの性格を完全に把握していそうだった。

「ここはマドックさんにまかせて、ジェリコはいつも通り過ごしておきなさい」

ダニエラは珍しく強い口調で、言葉を結んだ。

「……」

ジェリコは鋭さを増した青い瞳に対抗するように無言で視線を合わせた。まさかこんな夜中にダニエラと睨めっこする羽目になるとは人生何が起こるかわからない。

猫が睨み合う様に、ジェリコとダニエラは身動き一つせず、互いの顔を見合わせていた。かち、かち、と時計の針の音だけが、部屋の中に響いていた。次第に月明かりも消えてしまい、真っ暗になってしまったが、それでも二人は見つめ合っていた。

「……そう」

先に音をあげたのはダニエラの方だった。彼女は椅子から立ち上がると、ジェリコに背を向けて扉の方へ歩いて行き、

「おやすみなさい」

そう言い残してジェリコが声を掛ける間もなくダニエラは静かに部屋を出て行った。

一人残されたジェリコは、無言でダニエラが座っていた椅子に座った。そして先ほど自分が立っていた場所、窓際の方をぼんやりと眺めた。

——なぜダニエラはジェリコをここまで心配するのか。

そんな疑問が、初めて頭に湧いた。今まで思いもしなかったが、至極当然な疑問である。むしろ今までなぜ考えなかったのかおかしかった。

ジェリコがこの店で働けるようになったのも、ダニエラのおかげだった。住み込みで働かせてくれと頼みに行ったとき、ドメニコとアノハはジェリコを雇うのを渋っていた。能力的には問題が無かったのにもかかわらず、二人はジェリコを拒絶していた。そのときの二人の目は今でも覚えている。二人とも悲しみに満ち満ちているような、最も会いたいのに出会いたくない人間に会ってしまったような。ただひたすらに報われない気持ちとその空間に満ち溢れていた。

そんなとき、ダニエラがやってきてジェリコを雇うよう二人を説得

してくれたのだ。あくまで冷静にジェリコという人間を見て、雇うに足るかどうかが、客観的に判断するようドメニコとアンナに提案したのである。

その結果が今の状態だ。客観的に見れば、ジェリコを雇わぬ要素は皆無だったからだ。

それにジェリコを雇ってから客が以前よりも来るようになったらしい。ダニエラの采配は正しい方向を示していた。

——それにしても、だ。

なぜダニエラはジェリコに固執するのか。いや、固執とまではいかないが、ダニエラは常にジェリコを視野に入れた行動を取っている気がする。

ジェリコを雇うか否かのときも、あのままジェリコを雇わない道もあったのだ。にも拘らず、わざわざ彼女はジェリコを雇うようドメニコとアンナに仕向けたのである。ここには何らかの他意があると考えてもいいだろう。

だが、それから先が分からない。単純にジェリコのことを可愛がってくれている可能性もあるし、ダニエラの過去に今日まで引きずってしまふような出来事があったのかもしれない。本人に聞くのが一番手っ取り早いですが、そんなことを聞けるわけが無い。

聞くとなればドメニコやアンナか。もしくはベルナンド。彼らに聞けばダニエラの過去についていくらか知ることができるだろう。

「——何を考えてるんだ。僕は」

ジェリコは椅子から立ち上がると、再び窓際へ歩いた。

「人の過去を詮索するなんて、趣味が悪い」

誰にだって知られたくない過去がある。それはジェリコ自身が一番よく分かっている。

ダニエラはダニエラで、ジェリコはジェリコだ。人生は積み木のようなもので、楽しかった過去、悲しかった過去、生きるということ。はそれらの経験を積み上げていくということだ。

人は忘れることで生きられるというが、過去を完全に忘れることは

できない。下の方に行き過ぎた記憶が意識の範疇から外れてしまっただけだ。決して消え去ったわけではない。

いつ、どんなとき、誰に、どうやってその過去を引きずり出されるか分からない。良い過去ならばいいが、二度と思い出したくない過去だって存在する。ダニエラの過去を探るということは、その嫌な過去を知ってしまうことになるかもしれないのだ。そうなると今までどおりダニエラと付き合うことができなくなりそうな気がする。そしてそれ以前に人の過去を知ろうとするなんて、

——趣味が悪い。

雲を退けた月は先ほどのようにまばゆく輝き、ジェリコの顔を照らしていた。

すべて曝け出すように。白く。あらゆるところを。白く。

#6・換えられた転轍機

祈春祭当日。

ジェリコは午前中買出しに行かされた。昨日確認し忘れて足りないものがあつたらしい。ジェリコはそろそろと街を歩く人々をかわしながら、買い忘れていたものを購入してさつさとラ・メールへ戻った。幸い嵩張るものではなかったので、事故が起こることもなく安全に済ませることができた。

買出しを済ませて軽い昼食をとった後、ジェリコは店が開く時刻まで外に出ることにした。本格的に祭りが始まるのは夜だが、少しでも祭りの空気を楽しみたかった。それに祭りの雰囲気絵を描くつもりだったので、こういうものか知る必要があるのだ。

ダニエラと一緒に行くかと思つたが、ダニエラは朝からどこかへ出ているらしかった。それに昨晚のこともある。正直顔は合わせ辛かった。

結局ジェリコは一人で街へとくりだした。まずは一番賑やかな中央通りへと向かう。

ジェリコの予想通り、中央通りは人で溢れ帰っていた。道を歩く主な人間は観光客や旅人、行商のようである。

ベルガモは色々なものを売っていて、尚且つ価格が安い。おまけに今日は祭りの影響でさらに値段が下がる。みんなそこを狙っているのだろつ。

「おどきなさいよあなた！」

「うるせえなあ、こちとら生活かかってるんだよ！」

衣服を取り扱っている店の前で、派手な服を着た貴族と、行商らしき男がいがみ合っていた。この光景も毎年のことだ。初めて見たときは貴族が何か物騒なことをするのではないかとハラハラしていたが、数年もすれば慣れてしまう。それに不穏な空気が漂い始めると自警団が現れて仲裁してくれるのだ。ベルガモは他の街と比べて治

安もいい。

——そういえば、モンツアは治安があまり良くなかった。

港町ということで、船がたくさん往来するモンツアでは密入国者が後を絶たない。それと相まってあまり表沙汰にはならないが、影で妙なものを取り扱った取引が頻繁に行われているらしい。噂では警察もそいつらと組んで甘い汁を吸っているそう。そういう意味でモンツアはあまりいい町ではなかった。

ジェリコが孤児院に居た頃はそういう悪者を追っ払うために、友人達と自警団の人たちとで街の治安を守るべく活動していたこともある。今思えば随分と命知らずなことをしていたと思う。親代わりのセブロや自警団もよく許可したものだ。

警察が当てにならない以上、自警団やギルドに街の治安を維持する必要があるため、街全体の連携はアイトラの中でも高い方だった。だからある意味では安全な街だといえる。もし困りごとを抱えてしまっても、周りが助け舟を出してくれる。モンツアの治安は人々との繋がりによって造られた街だ。

そんなモンツアでの誘拐事件。犯人は高確率で外部によるものだろう。そして警察がまともに機能していないところから判断して権力者、領主も一枚噛んでいる可能性もある。この事件には、何かどうとろとした人の嫌な部分が深く関わっているような気がした。

「……悪い癖だ」

ジェリコは興味があることならば、何にでも首を突っ込みたがる。

『好奇心旺盛なのはいいが、このご時勢では身を滅ぼしかねない』

セブロの言葉が胸に蘇る。セブロはできた人間だった。人を見る目も、導く技術も持っている。そのセブロの忠告なのだ。この癖を直さなければいずれジェリコの首を絞めるに違いない。

自分自身、この癖の悪い部分は良く分かってはいるつもりだ。分不相応な事柄に関わるということは極端な話、死に直結する。モンツアの事件もただの少年であるジェリコが関わるには大きすぎる話だ。改めて、ダニエラはジェリコのことを良く分かっていると痛感して

しまう。本当、彼女には頭が上がらない。いや、そもそも上がる日が来るのだろうか。

だがせめてモンツアの友人達の安否だけでも確かめたい。事件の真相は喉から手が出るほど知りたいが、今回は本当に危険そうだった例の『直感』がそう告げるのである。人の嘘を嫌でも確実に見抜く妙な才能。そこから派生したと思われる妙に冴えた勘がジェリコをぎりぎりのところでせき止めていた。

「あの、すみません」

モンツアまではジェリコの足で歩いて二日。一本道の街道を突っ切るだけだから迷うことも無い。人通りも多いし、途中には宿もある。ダニエラは心配しているが、事件に巻き込まれる可能性は極めて低いだろう。

「あの、もしもし？」

さしあたって出発日は祭りが終わって街が落ち着いた頃、明後日以降か。ドメニコに話して許可を貰わなければならないが、おそらく大丈夫だろう。休んだ分給料を差っ引かれるだろうが、そこは我慢するしかない。

「……あのねっ！お尋ねしたいんですがっ！」

突然後ろからぐわし、と肩を掴まれて強引に振り返された。まったくの不意打ちだったのでジェリコは心臓が止まるほど驚いた。

「あのね、何度も声かけてるのに、なんで気づかないの」

「え？はあ、ごめん」

呆然とし、いまいち現状把握ができないジェリコはとりあえず目の前の相手に謝った。

「周りうるさいからあたしの声聞こえ辛いかもしないけど、返事くらいしてよ」

ジェリコの肩を掴んだのは、自分より五つか六つは年下と思われる少女だ。紺色の外套を纏い、青色の縁取りが付いた漆黒のスカートを穿いている。三つ編みにした飴色の髪をか細い両肩に下ろし、空色の瞳を燃え上がらせて腕を組んでいる。

年に似合わず大人びた態度を取っているが、不思議なことにその姿は様になっていた。姿かたちは可愛らしい少女そのままののだが、身にまとっている気配がアドリアンのような、長年厳しい環境で育ってきたような重厚な年季を感じる。傍らには荷物袋と思わしきものが転がっており、なるほどどうやら旅人のようである。

――幼い十歳前後の少女が、一人旅？

「あのね、人を化け物を見るような目で見ないでよ」

知らず、まじまじと少女を見つめていたらしい。

「いや、だって十歳前後の女の子が一人旅なんてしてたら誰だって驚くじゃないか」

「あのね、そういうあんたも私と大差ないと思うよ」

個人的には問題ありな発言なのだが、世間一般から見れば確かに大差ないだろう。大人にとって子供は子供なのだ。それに彼女とジェリコは背も同じくらいなのである。周囲から見れば兄弟と思われるても相違ない。

「それは置いといてだ。君、僕に声をかけていたらしいけど何か用事があるんじゃないの？」

なんとなく押し負けているジェリコは話をそらすべく、話題を変えた。

すると少女は「ああ、そうだった」と、手を叩いた。

「あのね、シド・バティっていう酒場を探してんだけど、どこにあるか知ってる？」

ベルガモには酒場が三カ所ある。それぞれの店を繋ぐと三角形になるような形で点在しており、旅人の疲れを癒す要所となっている。シド・バティはこの街で唯一宿も経営している酒場でもある。おそらく彼女は宿を取りに行きたいのだろう。今日は祭りの日なので、急がないと部屋が全て埋まってしまう。

ジェリコは中央通りの奥を指差しながら説明を始める。

「シド・バティへはまず中央通りをこのまま真っ直ぐ歩いて、ジャーノンという花屋が見えてきたらその角を右に曲がって、そのすぐ

次の角を左に曲がって真つ直ぐ歩いていけば着くよ」

「ジャーノンを右で次に左ね。わかったわ」

それじゃ、と言いながらたくましくずた袋を担ぐ。そして少女はジエリコの脇を通り、振り返ることなく過ぎていく。あつという間に人ごみに紛れ、小さな旅人は雑踏に消えてしまった。

（世の中変わった人があるんだな）

世間の広さをほんの少しだけ知ったジエリコは、しばらく少女が吸い込まれていった人の波を見つめていた。

#7・換えられた転轍機 part 2

ラ・メール亭は、ベルガモで最も小さい酒場である。店に入るとまず広間がある。そこには七人用のテーブルが五つ規則的に設置され、椅子は人数分以外に十脚ほど隅に置いてある。左手にドメニコがいるカウンター。ここは八人ほど座れる空間がある。そしてカウンターの奥はアドリアンの厨房だ。ラ・メール亭の間取りはさして珍しくも無い普通の間取りをとっている。

しかし他の二件の酒場は、ここよりも多く人を招くことができるし、店の中は空気の出入りもいい快適な空間だ。シド・バティは宿を経営しているし、もう一軒のアリゼ・ドンは二階建ての酒場という珍しい形態を取っている。二件とも雇っている人間がラ・メールより多いのも魅力的だ。頼んだものがすぐ来るといえるのは、客にとって重要な要素の一つだからだ。

しかし周りがそんな好条件にも拘らず、このベルガモで最も集客率が良い酒場はラ・メール亭なのだ。最大でも五十人程度しか収容できないというのに、今日のような祭りやめでたいことがあると、七、八十人くらい押し寄せることがある。それほどの魅力がこの酒場にはあるのだ。

それはなにか。答えは至って簡単である。

店には看板というものがある。用は人を寄せ付けるためのエサだ。看板は物であつたり噂であつたり人であつたり店によって形態が変わる。

そして酒場での看板というのは、大抵主人が雇っている人物の事を指す。その看板が優れていればいるほど人がよく来るのだ。

ラ・メールがベルガモ一の酒場として君臨しているのは、偏にこの看板がベルガモ一の看板だからである。彼女のお陰でラ・メールは今日も安心してご飯が食べられるのだ。

——しかし、

「なあジェリコ、ダニエラはどうしたんだ？」

テーブルと人の間を足早に歩くジェリコに、ブドウ酒を手に持った三十代後半くらいの男が話しかけてきた。

彼はまだ知らないのか。この手の質問はもういい加減飽きたのだが。ジェリコは彼に振り向くと、早口に答えた。

「ダニエラは朝から大事な用事があると出て行って、まだ帰ってきていないんです。今日中には帰ってくると思うんですが」

ダニエラがどこへ行ったのかジェリコは知らない。ドメニコやアンナに尋ねようかと思ったが、やめたのだった。なんとなく気がひけたのである。ダニエラほどの人間なら大抵のことはできるし、危険は回避できる。だから野暮な心配はしなくてもいいのだ。……と、心の中では思っていたが、いまいち本心とは違う気がした。その理由がよく分からないのだが、仕事が忙しくてなかなか頭をそちらに割くことができなかった。

「なるほどだからアンナが出ているんだな」

酒場という名の戦場の最前線にはジェリコの他にアンナがいた。今日のような祭りの日はジェリコとダニエラの二人でようやくと対応できるというのにダニエラは席を外しているため、アンナが緊急参戦してくれたのだ。

「にしても珍しいな、ダニエラが仕事を休むなんて」

先ほどの客の隣にいる髭を蓄えた男が話しに加わる。

「何かあったのかな？それともこれか？」

髭の男は小指を立てると嫌らしい笑いを浮かべた。

「あいつにもようやく春が来たってか？いやあめでたいねえ。祭りの日に駆け落ちたあなあ」

がははは、と豪快に笑う客二人。ジェリコは呆れてものが言えなかった。

「あの子に春なんてまだ来やしないさ。ベルガモはあんたらのような男ばかりだからね」

力強い声と強気な発言とともに現れたのはアンナだ。両手にスー

を持っている。アンナは彼らの前にスープを置くと腰に手を付いた。「ははっ。そりゃごもつとだ。だがつまらない男に惚れる女がいるのも事実だ。ダニエラは世話焼きだからな。そっちの方が可能性は高いんじゃないのかい？」

客はアンナからスープを受け取ると、早速食べ始める。

「そうなんだよねえ。あの子はちよつと人に気を遣いすぎなのよね。誰に似たのかしら」

アンナは腕を組みながらため息をついた。ダニエラの性格は完全に生活環境の影響だと思うが。

「さあな。最近の乙女心は俺達にはわかんねえよ。あ、ジェリコ、ブドウ酒一つ持ってきてくれよ」

「はい。かしこまりました」

ジェリコは機械的に返事をする、早速厨房へ向かう。ジェリコの頭の中はダニエラが半分、客の顔と注文が半分以上を占めていた。精神的には十割がダニエラで埋め尽くされている。

（ダニエラの用事が駆け落ちだったらどんなに安心することか）

ジェリコはモンツアの事件とダニエラがどうしても繋がってしまい、あまり仕事に集中できないでいた。それでも失敗することなく作業をこなせるのだから経験というものはすごい。意識ではなく体が勝手に動くのである。これぐらいの高みに絵を描く技術を昇華させたものだ。

その後、アンナと協力して注文という侵略者をことごとく粉碎し、戦利品であるお金をたまりと稼いだ。やはり祭りの日は儲かる。客が調子に乗ってジェリコに絵を描かせたのがまたよかった。今のラ・メールという題で描いたのだが、騒ぎ散らしている客たちをよく表現している、と好評だった。誰ともなく、空になった木のコップに銅貨を入れ始めたのがきっかけで、描くのを観ていた客たちはジェリコに賛美の言葉と共に銅貨も与えてくれたのだった。

今までこれほど評価されたことは無かったので、ジェリコは努力が

報われたと思った。やはり地道な努力が身を結ぶのだと肌で感じた瞬間だった。

ジェリコの絵描きが終わった後、丁度祭りも区切りがついた頃だった。いつの間にかもう次の日になっており、客も騒ぎ疲れたのかテーブルに突っ伏して眠る者や、代金を支払って帰る者がちらほらと現れ始めた。

そうして小一時間ほど経つと、店の中はがらんとした雰囲気になった。残っている客はカウンターの客と広間の十人くらいしかない。大半が常連の客で、残りは旅人や行商人だろう。

ジェリコは窓から外を見た。深い藍色の空には昨日の様な真っ白い月がこれでもかと輝き、大人しくなった街を見下ろしていた。

街に人々はほとんどいなかった。祭りは終わったのだ。人々は明日（今日か）の英気を養うために遊び、そして甘い夢に抱かれているのである。

馬鹿騒ぎも好きだがこの祭りの後の静けさもジェリコは好きだった。祭りというのは人の生を表わしているように感じる。華やかな表の顔、そして穏やかで静かな裏の顔。人が生まれてその命を激しく燃え上がらせ、そして灯火が消えると共に訪れる死。非常に感慨深い行事だとジェリコは思っていた。

窓の外から盛者必衰を眺めていると、玄関が開く音がした。また誰か帰るのだろう。ジェリコは変わらず外を眺めていた。

結局、日が変わってもダニエラは帰ってこなかった。益々心配な気持ちで胸に広がっていく。まるで黒があらゆる色を飲み込んでいくように、じわり、じわりと。

——そんな折、

「ふう、ただいま」

雲雀のような声が酒場に響いた。

反射的に声の方を振り向くと、そこにはジェリコの頭の中にしかいなかった人物が立っていた。

「おかえりダニエラ。英気は養えたかよ」

ドメニコがダニエラを横目で見やる。

「ダニエラ、さっさと着替えて私と代わってちょうだい」

アンナが首をぐるぐる回しながらダニエラに言う。

「おおー、ようやく女神登場かよ。焦らすなあダニエラは」

残っている客たちがダニエラを見るなり大げさな表現で迎えた。

ダニエラは彼らにもう一度「ただいま」というと、にんまりと笑った。

そしてその美しい顔をジェリコに向けると、

「ごめん。仕事辛かったでしょ」

申し訳なさそうな顔で、謝るのであった。

ジェリコは窓辺から離れると、腕を組んで精一杯背伸びして、

「そんなことないさ。これくらい慣れてる。それに謝るなら僕じゃなくてアンナさんだろ」

ジェリコの言葉にダニエラはうふ、と嬉しそうに笑うと、

「そうね。じゃあさっさと着替えてくることにするわ」

ダニエラはそう言うとそのくさと二階へ上がっていった。

その懐かしいような後姿を眺めていると、ジェリコは胸につつかえていた物がようやく取れた。ダニエラは誘拐されたわけじゃなかったようである。

一体どこへ行ってきたのか。遠くへ行ってきたのだろうか。それとも遊び過ぎて遅くなったのだろうか。しかしまあ、なんにせよ無事でよかった。

ダニエラの姿を見届けた後、ジェリコは厨房へと足を伸ばした。少し喉が渴いたのである。水を飲みたかった。

「ジェリコ・パブルオ」

すぐ近くのテーブルから、ジェリコを呼ぶ声が聞こえた。それは小さな声だが、妙に刺々しく、ジェリコの耳に滑り込んでくる。耳を閉じていても聞こえてきそうな、異様な気配のこもった声だった。ジェリコはその怪しい雰囲気警戒しつつ、眉間に皺を寄せて声の主の方を向く。

視線の先には旅人が二人座っていた。若い男と女。二人とも黒い髪、黒い瞳をしており、変な形をした石の首飾りをしていた。見たこともない茶色い毛皮の外套を纏い、その顔立ちはこの辺りの者ではなかった。年に数度見かける遠い東の国からやってくる行商と雰囲気、が似ている。

なんとなく、不吉な感じがした。全体的に黒っぽい彼らを、失礼だと思いが死神のようだと感じてしまった。男の方は多少表情があるのだが、女の方は精巧に作られた人形のように動かずただ一点、ジェリコのことを見つめているのである。その不気味さにジェリコは知らずたじろいでいた。

ジェリコが無言で二人を見つめていると、切れ長の目をした男が口をゆっくりと開いた。

「突然呼んですまない。だが、大切な話がある」

男は言葉を選ぶように一度目を閉じ、話を切る。そして宝石のような一点の曇りの無い両眼をジェリコに合わせて言った。

「君、命を狙われているよ」

「は？」

時が、止まった。……気がした。

アドリアンが持ってきた名画家ティツアの件以上に、ジェリコの思考は真っ白になっていた。初めて会った見ず知らずの旅人に、あるうことか死の宣告をされたのだ。まともな反応なんてできるはず無かった。

男は固まったジェリコの姿を鼻で笑うと、

「驚くのも無理は無い。だが事実だ。君は知らぬだろうが、君の血を求めて欲望にかられている人間がこの街に潜んでいる。今はまだ少ないだろうが、いずれ大勢の者が君の命を狙ってくるだろう」

何を言っているんだこの男は。
だんだんと男の言っている事に腹が立つてきたジェリコは、腕を組んでいる男を睨みつけた。

「あの、言っていることがよく分からないのですが。あなたは一對

何者ですか？それになぜ僕の名前を知っているのです」

「すまない、申し遅れたな。俺の名前はアヤジ。こっちは妹のエメだ」

女の方を目で追いながら説明する。エメという女はジェリコに軽く頭を下げた。

「俺達は何者かという話だが、少なくとも君の敵ではない。俺達は君の命を守るためにここへ来た」

「どういうことです？」

ジェリコはいまいちアヤジの言う話が理解できない。そもそもなぜ自分が命を狙われる羽目に陥っているのか。誓ってもいいが、今までジェリコは人に恨まれるようなことをしてきた覚えは無い。

「まず君が命を狙われているところから話そう。簡単に言うとな、あらゆる願いを叶える秘法を発現させるために、君の命が消えるくらの血が必要なのだ。だから命を狙われている」

アヤジが説明していることは現実味がないし納得いかないが、とりあえず今は反論をしないことにした。そしてなぜか得意の直感がうまく働かない。動揺し過ぎてまともな判断が下せないのかもしれない。

アヤジは話を続ける。

「しかし、その術の発現方法というのは明確に解明されていないのだよ。今回君の命が狙われたのも、今まで調査してきた結果、君の血を使った方法が術を発現させる確率が最も高いからだ」

「ま、まさかそれだけの理由で――」

「命が狙われている。連中にとって人の命なんざ虫に等しいからな」ジェリコの言葉を遮りながら、アヤジは冷徹に言い放った。

そんな成功するかも分からないおかしい儀式のために、命を捧げなければならいなんて絶対に納得がいかない。あまりにも理不尽すぎる。ふざけるなとジェリコは叫びたかった。

「そこで俺達の出番だ。連中からの襲撃は、すべて俺とエメが対処する。君の命は、必ず俺達が守って見せよう」

アヤジはジェリコを真っ直ぐに見つめ、力強い声で言った。確かに、必ずジェリコを守り通すという意味が込められていた言葉だと思う。しかし、

「それは、なぜ？」

そう。なぜ彼らはジェリコを守るのか。その理由が謎だった。

「あなたたちの目的は何ですか」

「分からないか？秘法を発現させるのが目的だよ」

瞬間、ジェリコは彼らに対する警戒を強めた。ならば、彼らの目的はジェリコの命ではないのか。

しかし彼らはジェリコの命を守るといふ。それはつまりジェリコの命を取らないということではないのか。アヤジは矛盾した話をしてる。

「なぜ自分の命を取らないのか分からない、と言いたそうな顔をしているな。なるほど、随分荒んだ人生を歩んできているようだ」

ジェリコはアヤジの云わんとしていることが分からない。

アヤジはジェリコの態度が気に入らないのか、不機嫌そうな顔をした。

「簡単だよ。俺達は殺生を好まない。それが自分の願望を達成するために必要かもしれないとしてもだ。俺達は君を死なせない方法で秘法を発現させようと考えているのだよ」

ジェリコは驚いた。彼らはわざわざ面倒な方法を執るのである。ジェリコの命という容易く摘める秘法への鍵を拒否しているのだ。

「一番可能性が高い方法を選ばないなんて変ですよ。お二人が叶えたい願望というのはその程度のもののですか？」

ジェリコの問いに、アヤジはさらに不機嫌そうに顔をしかめた。

「いや、必ず叶えたいと思っている。そのために世界中を旅しているからな」

「だったら今ここで僕を殺すのが普通でしょう」

「先ほども言ったが、俺は人殺しが好きじゃない。これはもって生まれた信念のようなものだ。君にもあるだろう？譲れないものの一

つや二つは」

確かにそれはある。ジェリコは必ず画家になり、人々を幸せにするのだ。その目標だけは誰にも否定させないし、邪魔もさせない。ジェリコにとって存在観念そのものともいえるものだからだ。

「君の命は必ず守る。約束を守るのも俺の信条の一つだ。もし君を裏切るのならば、そのときは自分の腹を切るさ」

その言葉は『嘘』ではなかった。アヤジの言葉に『嘘』という妙な突起物は感じられない。ようやくいつもの判断力を取り戻したようである。

「だから君も俺達を信じてほしい。何が起きようとも君は俺達を裏切らないと」

「……もし裏切ると?」

ジェリコは興味本位で尋ねてみた。するとアヤジは恐ろしく無機質で冷たい目をして答えた。

「助けを求められても、君を守らない。君の血を手に入れた連中から血を横取りするだけだ」

なるほど、それならば己の信条を汚さずに目的を達成できる。ジェリコは納得した。

「事情は分かっただかな? ならば旅立つ準備を始めてくれ。早く行動するに越したことは無い」

「ちょ、ちよつと待つてくださいよ。僕はまだあなたが言ったことを完全に信じたわけじゃありません。それに僕が旅立つ必要があるんですか? あなた達に付いて行っても何もできませんよ」

アヤジはいい加減めんどくさそうに眉間に皺を寄せてジェリコを睨んだ。

「これだけ説明してもまだ分からないのか? ……いや、まだ説明しきつてはいないから分からないのかもしれないが。君は自分が必要無いと言っているが、君が死ぬほどの血が必要ではないだけで君は必要だ。イセ暦一四五二年、草原を瞳に宿し青い地平線の大地から生まれし者。それが秘法を発現させるために必要な存在の名であり、

君自身のことだ。秘法の発現に必要な存在が共にその場所に来ないなんておかしいだろう」

大真面目に理解不能な言葉を口にしてているアヤジが正直滑稽でたまらなかったが、不吉なことに彼は嘘を言っただけだった。つまりそれはジェリコが命を狙われているということを裏付ける結果となっている。

……瞬間、愕然とした。落下していくような、鈍器で頭を殴られたような、おかしな衝撃に体が包まれた。ジェリコは生まれて初めて自分の直感を疑った。

しかし、ジェリコの揺るぎ無い『無意識の判断』は彼の言葉を肯定している。もちろんジェリコはジェリコであるので、行動を決定するのは『無意識の判断』ではなく『ジェリコの意味』だ。なので『無意識の判断』を無視した行動を取ることはもちろん可能である。だが今までこの『無意識の判断』が違えたことはただの一度も無い人の嘘か本当かに関して、『無意識の判断』は神懸かり的に絶対なのである。

「そう、ですか」

随分と遅くなったが、ジェリコはようやく現実を理解した。それもすこぶるとんでもなく受け入れ難い現実を。

同時にこの強制的に人の言うことの真偽が判ってしまう自分の能力を呪った。

間接的とはいえ、自分の命が狙われているなんて分かってても気持ちのいいものではない。人によっては知らない方がいいこともあるだろう。少なくともジェリコは知りたくなかった。

「大丈夫か？突然顔色が悪くなったが」

こんな話をされて顔色が悪くならない奴はいないだろう。しかしアヤジからすれば先ほどまで普通に異常（笑）な会話をしていたのに、今頃急に顔色が悪くなれば驚いてしまうのだろう。なんで今更驚くのか、と。

ジェリコはこの話を信じたくなかった。あまりにもありえない。例

え神の意思とでも比喻できそうな『無意識の判断』が肯定していても、自分が殺されるなんて話、確たる証拠が無い限り信じたくなかった。だって考えても見ろ、

——あらゆる願いを叶える秘法？

——イセ暦一四五二年、草原を瞳に宿し青い地平線の大地から生まれた人間？

——絶対にジェリコを守ると言い張る初対面の怪しい二人組？

——なにより、自分の命が狙われている？

今日世界ではあらゆる国同士が連盟を組み、昔の戦で築き上げたいざこざを協定で封じ込め、暗澹で残酷な過去からの脱却を図り、平和な世界へと歩を進ませようとしている。アヤジが先ほど話したことは、様々な経済を開拓させ安定した豊かさを追求している現実的世界からあまりにもかけ離れていた。まるで子供が話す夢物語だ。くだらない。馬鹿馬鹿しい。こんなことが現実にかき起さるはずは無い。

『しかし、是である』

そんな意識が再びジェリコの胸に蘇った。思わず胸元を無造作に掴んでしまう。今までジェリコを様々な危機から救ってきたこの能力が、初めて恐ろしく、無駄なものだと感じた。

——僕、殺されるかもしれない。

「ジェリコどうしたの！？」

突然、何者かに肩を揺すられた。真っ白になった頭のまま、体はぐらりと揺れ、ジェリコは床に倒れ附した。倒れる最中、アヤジとエメが人形のように無表情な顔でジェリコを見つめているのが見えた。「ちよつと、しっかりして！」

懐かしいような声は段々と遠くなり、景色は暗闇に落ちていく。

（このまま目覚めなければいいのに）

そんな言葉が脳裏に浮かんだ瞬間、ジェリコは完全に意識を失った。

8・換えられた転轍機 part 3

深い闇の中、遠くから何かの音が聞こえてくる。ぼそぼそ、ぼそぼそと。それらは次第に形を持ち始め、音は聞いたことの無い女性の声だと気がつく。

「可哀想な子」ある声はそう呟いた。（違う）

「不幸な子」またある声はこう呟いた。（違うんだ）

「運が悪い子」三人目はこのように呟いた。（違うよ）

深淵に反響する声は、ジェリコをあらゆる方向から包み、背筋を撫でられるような気持ち悪さと共に心に沁み込んでくる。

（やめてくれ）

口を開けて叫んでみても、声にならない限り声は聞こえない。そんなジェリコの苦悩を嘲笑うように無数の声が聞こえてきた。今度は女性だけではなく、色々な人間の声が混じっていた。

汚い子、鬱陶しい子、愚かな子、憐れな子、いい身分の子、さもしい子――。

抵抗する間もなくジェリコに投げられた言葉はあまりにも鋭利過ぎた。薄っぺらい同情、歪んだ、蔑みに彩られた目、嫉妬に満ちた背中、姿形は見えずとも、声の主たちの姿はジェリコの頭の中に浮かび上がる。

なぜ彼らはここまでジェリコを攻撃するのだろうか。いや、きっと攻撃している自覚が無いのだ。だからこんな無造作に、躊躇うこと無く気持ちを表わすのだ。彼らはこちらが聞こえていないと思って、陰で話す。仮面の笑顔に隠して、心で暴露する。ジェリコの友人を騙しても、ジェリコは騙せない。それを知らない彼らはおぞましい感情でまみれた裸をジェリコに見せ付けるのだ。

嘘。

彼らの攻撃に対し、ジェリコはいつの間にか抵抗しなくなっていた。なぜなら意味が無いから。多勢に無勢すぎて為す術が無いのだ。

（もうやだ。あきらめたからやめてよ。なんでこんなに苦しまなくちゃならない。捨てられたわけも知らないで勝手なこと言わないでよ。せめて話を聞いてよ。欲しくも無い憐れみなんてしないですよ。ほっとしてよ。もう一人でいいよ。静かに眠らせてよ）

涙目の心の中、声にならずともジェリコは誰よりも声高に叫んでいた。誰も聞かない、聞くことのできない声を上げること、なんとかジェリコは自我を保っていた。だが、

「いない子」

耳元ではつきりと囁かれた言葉で、ジェリコは堅く閉ざされた目を見開いた。

「……」

目の前には木製の天井。見慣れた、いつもの光景だ。辺りには画材のしんみりとした独特の匂いがうつすらと立ち込めており、ここがジェリコの部屋であることを示している。

——嫌な夢を見た。

全身には汗と熱。心には開かれた古傷と、謎の二人組みから理不尽に付けられた新しい傷跡がある。

それにしてもなぜベッドの上で横になっているのか。ジェリコは記憶を辿ってみた。

あの二人組みと話しをしていて気分が悪くなってからの記憶が無い。まさか気を失ったのか。思わず自分の根性の無さに情けなくなった。祭りの日だというのに最悪だ。現実も、夢も。

「……まさか、あの二人組みも夢だった？」

そんなノミのような希望が脳裏をよぎり、反射的に起き上がったが、希望は流れ星のように消えていった。

そんなことあるはずがない。今のジェリコは現実だ。間違いない。ベッドの質感、匂い、手足の感覚、駆け抜けるように躍動する心臓。現実を証明するに足るものはこの場に腐るほどあった。

ジェリコは力なく仰向けに倒れる。ぎしりと反発するベッドがジェリコを受け止めた。

『いない子』

胸焼けを催す言葉が蘇った。悪夢の記憶は再び心の奥底に押し込めてほとんど覚えていないが、最後に聞いた言葉だけは脳裏にへばりついている様にはつきりと覚えていた。

『君、命を狙われているよ』

次いで現実での最悪の言葉が蘇る。

今やジェリコは命を狙われるほど必要とされている。夢の声は嘘だったようだ。

ざまあみろ、とくだらない勝利を鼻で笑ってみるが、ふと気づいた。
(いや、正しいか。僕は、結局必要とされていない)

虚しい事実に気づき、ますます落ち込んだジェリコだったが、流石にこれ以上腐っていてもしょうがないと思った。

自分の意識だけは、自分という存在だけはしっかりと地に立たせなくてはならない。ジェリコはジェリコなのだ。誰にも否定はさせない。

心の中で気合を入れると少し気が楽になった。これから待ち受けるであろう絶望的な運命をどう乗り越えていくかはまったく分からないが、一生懸命生きるだけだ。そう、一生懸命に。あの頃と変わらず、這い上がるように荒波を乗り越えていくのだ。

そうと決まれば不幸の配達人であるアヤジとエメに会わなければならない。今後の方針をしっかりと話さなければ。

正直自分が命を狙われているという実感は未だ無いが、アヤジは嘘をつくような人間ではないと思う。ということはジェリコが狙われているのは事実で、ジェリコを守ってくれるのも事実のはずである。そんな自分の命を守ってくれる者たちと連絡が取れないのは非常にまずい。すでにジェリコの命は危険に曝されている可能性もあるのだ。

自分がどれほど眠っていたか知らないが、外を見るとまだ夜の帳は下りたままだ。街は静かに寝息を立てている。

今度は意識を下の階へ向ける。人の声は聞こえない。店は閉めてし

まったようだ。だとするとアヤジとエメはもう帰っているだろう。仕方が無いので、ジェリコは日が昇るまで待つことにした。こんな時間に外を出歩くのは、例え命が狙われていなくてもあまり良い行動ではない。夜中に街を徘徊する人間というのは、大概ろくな人間ではないからだ。もしそんな連中と鉢合わせてしまったら面倒である。アヤジの言葉から判断すると、ジェリコの命を狙っている『連中』は何人かベルガモに入ってきているはずだ。ならば下手に動かない方がいい。

そういえば、なぜアヤジはジェリコがここで働いていると分かったのか。ベルガモの街は決して小さくは無い。どちらかというと大きいほうだ。アイトラの中でも五本の指に入る大きさを誇っているはずである。まともに探索しようと思えば、二日くらいはかかるだろう。前々から街に入って調査していたのだろうか。

それとも、ジェリコの人相や住所を特定できるような情報が流れているのだろうか。その場合非常に厄介である。ジェリコの命が本当に狙われているのなら、限りなく危険だ。一刻も早くベルガモから離れなければならない。

——ベルガモから、離れる。

その事実に辿り着いた時、ジェリコは妙な寂しさを感じた。

ベルガモでの生活は孤児院の時より短い。だというのに、この街から離れるのはなんだか嫌だった。

ジェリコはベルガモ自体に思い入れはそれほど無い。しかし共に笑った人、助けてくれた人、喧嘩した人など、ベルガモでは色々な人達と出会ったせいか思い出が非常に濃いものであった。ここでの生活はジェリコに新しい知識を、世界の広さを教えてくれた。

ジェリコはそんな彼らが好きなのだ。助けてくれた恩返しもしたいということもある。正直ここでの生活はもうしばらく続けていたいたいだが、それは叶わないだろう。このままベルガモにいればジェリコはいずれ殺されるだろうし、何より街の人たちに迷惑をかけてしまう。それだけは命に代えても避けたかった。

故にジェリコは旅立たなければならない。みんなのため。そして何よりジェリコ自身が生きるために。

元々絵の勉強のために旅には出るつもりだったのだ。それが少し早まったと考えれば、多少気が楽ではある。しかし、絵を描く暇がこれから訪れるかどうかは知らないが。

「ふう、落ち着かないな」

気が逸っているのだろうか。心がそわそわしている。

常識的に考えて当然の反応ではあるが、ジェリコはもう少し気持ち落ち着かせたかった。経験上、こういうときは物事を見る視野が狭まっており、正しい判断がくだせないことがある。自分の命運を決めかねているときにそんなあやふやな目で行く先を決めるのは危ないにも程がある。

（何でもいい。絵を描こう）

こういう気持ちがぶれているとき、ジェリコはいつも絵を描いていた。絵を描くことで集中力、発想を広げる能力を取り戻すのだ。今までジェリコの危機を救ってきたのは無意識の判断と仲間の力、そして絵だった。

ジェリコはベッドから降りようと床に足をつけた。

「！」

瞬間、視線の先の暗闇にゆらりと揺らぐものがあった。

どくり、と心臓が一際大きく唸り、全身からどつと汗が吹き出る。

「まさか——」

敵か、という言葉を読み込み、ジェリコはその揺れているものを凝視した。

そしてその姿を見極めると、違う意味で驚いた。

「ダ、ダニエラ？」

椅子に座っているダニエラは頭を垂れうつすらと寝息を立てていた。彼女が小さな呼吸をする度に金髪がはりと揺れ、暗闇の中、目が慣れていないときに見れば奇怪な生き物のようにも見える。先ほどはこれに驚いたようだ。

「それにしてもどうして、ダニエラが……」

もう一度ダニエラという言葉聞いて、ジェリコの脳裏に忘れていた記憶が舞い戻ってきた。

そつえば気を失う寸前、ジェリコを気遣うような声があった気がする。懐かしいようななんともいえない声だったが、まさかあれはダニエラの声だったのか。

ダニエラの声だったと認識した瞬間、ジェリコはいつもの情けなさに襲われた。頼りない男だ、と。

ジェリコは俯きながら深いため息をついた。そして自分をぎりぎりまで見てくれていた恩人をじっと見つめる。

どこことなく、ダニエラにしては珍しい疲れ果てた様子が見て取れた。くたつ、とした感じ。いつも毅然ではきはきしているダニエラからは想像もつかない姿だった。

しかし考えてみればそれもそのはずである。朝から用事で外に出て、日が変わってようやく帰ってきたと思ったら今度はジェリコの看病。そんな過重労働、誰でも心身ともにくたびれるだろう。

ダニエラはいつも自分を後回しにする。どれほど自分が疲れていても、人のために力を尽くす。おかげで何度ダニエラに助けられたことか。

そして逆にジェリコがダニエラを助けたことは、いくつあったらうか。今まで築き上げた様々な思い出が、怒涛のごとく脳内を駆け巡る。一年前、二年前、三年前……。

思ひ出の濁流に包まれていると、いつしか頬を伝うものが流れている。触れてみると、濡れていた。記憶の濁流が漏れ出したのだろう。

「ごめん。ダニエラ……」

そんなことを呟きながら、ジェリコはダニエラに頭を下げた。

「男の子がそう簡単に泣いちゃダメでしょ」

突如、予想外の声が耳に飛び込んできた。

はっとして頭を上げると、そこにはダニエラの微笑みがあつた。いつもの柔らかい、見る人を安心させるような表情だ。

「体はもう大丈夫？」

臉をこすりながら尋ねるダニエラを見て、ジェリコは思わず目を逸らしてしまった。そして「もういいよ」と小さく呟く。

ジェリコの言葉にダニエラは一度頷くと、大きなあくびを一つした。「なら、私は部屋に戻るからね。おやすみ」

「うん、おやすみ——」

ダニエラはゆっくり立ち上がると、ジェリコをもう一度見つめ、そして静かに部屋を出た。

——なぜ何もしないのか。

ジェリコは自分を思い切り殴りたくなつた。いつもだ。いつもジェリコは肝心なときに素直になれない。ただ一言、「ありがとう」の言葉すら言えない。

『いない子』

なるほど納得である。ジェリコのような人に迷惑しかかけない人間は確かに邪魔なだけかもしれない。世界をまたにかけける画家になつて人々を幸せにするなんて言っている人間が、他人に迷惑をかけてしまったら本末転倒である。なんてバカらしい。情けない。つまりない考えなのだろうか。

「——っ！」

顔を、一度張り飛ばした。苦痛に歪めた顔は、誰のものだったのだろうか。

……今日は、もう寝よう。色々なことが短い間に起き過ぎた。何事も一度に全てを解決しようとするのは得策ではない。少なくともジェリコが今考えていることはすぐに結果が求められるものではないのだ。ならば少しずつ、一步一步山を登るように時間をかけて解決するべきだ。落ち着いて、確かな判断の元に導かれる道を選ぶのである。それでいい。少なくとも今は、それでいい。

何とか気持ちを落ち着かせて冷静になると、ジェリコはなんとか床に就いた。心に生まれた黒いわだかまりを背負い込んだままで。

#9・夜明け

夜が明けると、ジェリコは重い腰を上げてアヤジとエメを探す準備を始めた。

まずは色々とごちゃごちゃした頭を覚ますために顔を洗うことにした。ラ・メールを出て右に曲がれば脇に井戸がある。ジェリコは毎日そこで顔を洗っていた。

苔むした石造りの井戸からはうつすらと冷気が漂い、朝の澄んだ空気が相まって気持ち落ち着かせてくれる。数度深呼吸した後、傍らの桶を井戸の中へ落とした。

透明の冷たい水を汲むと、思わず頭から被りたい衝動にかられたが、さすがにそれはまずいか、と踏みとどまった。

ジェリコは大人しく桶から水をすくって顔を洗った。きんきんに冷えた水が、痛いほど顔に沁みる。

「意外だな。君は朝が早いのか」

背後から聞き覚えのある声がした。妙に偉そうで、自信満々で、そして不吉な声色。

胸のわだかまりが巨大化し、何かを叫びたくなる喉をジェリコは唾ごと飲みくだす。そして顔を叩くようにして水を弾くと、ジェリコは勢いよく後ろを振り向いた。視線の先には昨日と同じ服装のアヤジが立っていた。ちなみにエメはいない。

ジェリコは皮肉たつぷりの顔で言葉を返した。

「そちらこそ。探す手間が省けましたよ」

「と、いうことは旅に出る決意はもうできたのかな」

「ええ。このままベルガモに残って周りに迷惑を掛けるよりかはましですから」

「そうか。ふふっ、そうか」

何がおかしいのか、ジェリコの言葉にアヤジは一度嘲笑を浮かべた。頭にきたジェリコはぎろりとアヤジを睨みつける。

「いや、すまん。君のような年頃の男が周りの人間に迷惑なんて考
えるのが不思議だな。なるほど君は妙にできた人間らしい。面白い」
貶しているのか褒めているのか分からないが、とりあえず腹を立て
ていていいだろうとジェリコは判断した。ジェリコは「そうですか」
とぶっきらぼうに答えると、桶の水を井戸に戻した。

「それで、今すぐにも旅に出られるのか？」

その言葉に、ジェリコは思わず体が固まってしまった。

ベルガモから離れ、どこぞの馬の骨とも知らない二人と旅に出る。
思い返すたびに感じるが、本当に信じられない現実だった。自分は
そんなに今まで悪いことをしてきたのだろうか、と因果応報を考え
てしまう。だが考えれば考えるほど仕返しされるようなことをして
きてはいない。この不運はどう考えても仕組まれたものとしかしい
ようが無かった。

硬直しているジェリコに、アヤジは再び声をかける。

「ふむ、今すぐには出られないか。まあそれもよからう。俺も昨日
は少々単刀直入すぎたと反省している。それに周りの人間にはまだ
何も話していないのだろう？今まで世話をしてくれた人たちに礼も
何もせず無断で家を出るのは不忠者というやつだ。そんな男と旅を
するのはご免だな」

ジェリコの心中を見透かしたように喋り続けるアヤジを見つめ返す
と、その目は予想外に真剣そのものだった。

水のように澄んでいながらも冷徹な目。覚悟がまだ甘いジェリコを
諫めるような瞳をしていた。絶対に裏切らないと昨晩も言っていた
が、こと信義に関してアヤジは非常に厳しい人間なのかもしれない。
アヤジはいつまでもジェリコが目を見つめているのが鬱陶しくなっ
たのか、目を閉じぐるりと背を向けると、横顔で口を開いた。

「夜にまた来る。それまでに準備をすべて済ませておけ」

ではな、と最後に付け加えアヤジは一人雑踏を歩いて行く。

その頑強な後姿は頼りがいがありそうで、とても力強く見えた。彼
なら大抵のものは守れそうだと思う。ジェリコを必ず守るといった

言葉は本当に信じても良さそうだ。

しかし、その勇ましい姿はそれらが張りばてに見えるほど非常に寂しくもあった。あの逞しさは寂しさを紛らわすため、乗り越えるために手に入れたような、なんとも形容しがたい虚しさがある。

もしやこの旅を最もやりたくないのは話を持ちかけてきたアヤジ自身ではないのか。ふとそんなことを思ってしまった。

もちろん理由なんてものは無い。いつもの直感である。アヤジもジェリコのように他人に言いたくない過去を引きずっている気がした。まあ怪しい儀式を信じている辺り、まともな人生を送っているとは思えないが。

「……ふう」

アヤジの姿が見えなくなると、ようやくジェリコは我に返った。動物のように頭を振って雑念を消し去る。あんな一方的に不幸な知らせを押し付けてきた人間をまともに信じるなんておかしい。ジェリコはそこまでお人好しではないし、疑う知恵を持っている。

だが、それは自分の勝手な考えではないのか。昨日は気が動転してまともに物事を考えられなかったが、先ほどの哀しげな背中を見る限り、アヤジはジェリコの不幸を喜ぶためにこの話を伝えに来たわけではなさそうである。

もしかすると、アヤジの本質は非常に人間臭いものなのかもしれない。皮肉な口調と態度で隠そうとしているが、それは自分の身を置く場所がそうせざるを得ないからなのではないか。

アヤジがいつからこんな裏の世界にいるのか知らないが、その期間がもし長いものであれば今まで意識的にしてきた行動がいつの間にか無意識にやってしまうこともあるだろう。アヤジのあの態度は、その長年積み重なった暗い歴史の澱のようなものなのかもしれない。もちろん、これはあくまで想像に過ぎない。本当のところは本人しか分からないだろう。

しかしあの後姿と横顔はなぜかジェリコの頭にこびりついていた。本当ならすぐさま忘れたい憎き姿のはずなのだが、ジェリコは後ろ

髪を引かれていた。

「それにしても」

通り過ぎていく鳥たちを眺めながらジェリコは思う。これくらいの観察力を常に出せるようにしたいものだ、と。当の人物が去った後に考えてもあまり意味が無い。相変わらず自分の素の対人能力は並以下だとジェリコは痛感した。絵を描くときは自由に時間を調節できるため、普段の物事に対しては必要最低限しか考えを巡らさないのである。重要な人間関係に対してもそれは変わらない。

好奇心旺盛なくせに妙に淡泊なところがある自分の性格を、なんとかしたいと思いはするが、実際に行動に移さない自分が少々苛立たしかった。

苦し紛れに朝日を睨んでみるが、世界は何も変わらない。ぶつかってくる眩しさに、ただ自分の暗部が照らされていくだけだ。

そしてジェリコは目を閉じる。知らず体に纏わりついていた街を駆け巡る風に心の淀みを任そうとしても、柔らかい風はジェリコを固く拒絶する。自分のことは自分でしろ、と言うように。

最後に空を見上げてジェリコは悟る。空はすべてを包み込んでいるわけではなかった。空は雲という傍観者を留めておく受け皿に過ぎない。近くにあるようで遥か彼方に存在するその青い空間は、すべてを優しく包んでくれているようで実は泡の膜のように薄っぺらで無感情な存在なのだろう。黒くなったり金色に輝いたりするが、それは文字通り表面上だけの変化なのだ。上っ面。まるで誰かさんのようである。

——そう、世界は誰のためにも回っておらず、ただ世界のため自身に回っている。ジェリコはちっぽけだ。自分たちがちっぽけだと思っている存在のように、ジェリコも等しくちっぽけな存在なのだった。

「そんなこと、前から知っていたさ」

今更そんな事実を噛み締めても意味がない。物心ついたところからわかってる事だから。

だが、今になってそのようなことを考えてしまうのは、やはり自分に課せられた運命の影響だろう。それ以外に考えようがない。ここ数年は非常に安定した生活を送っていたのだ。その温もりに満ちたところから無理やり連れて行かれてしまうという世界の理不尽さに、憤りを感じているのかもしれない。

「あらジェリコ、おはよう。昨日は大変だったでしょ？」

隣家の夫人が微笑みながら井戸端へとやってきた。街もそろそろ目を覚ます頃か。いつの間にか時間が経っていたようである。

「おはようございます。毎年のことですけど、やはり昨日も大変でしたよ」

屈託のない笑顔を浮かべながら、ジェリコは彼女に笑い返す。今日もまた、ベルガモは変哲のない一日を過ごそうとしていた。

#10・夜明け part 2

ラ・メールに戻り、ぼそぼそのパンとチーズを一人頼張りながらジェリコはラ・メールの広間をぐるりと見回した。ところどころ染み付いた木の壁やブドウ酒の匂い、椅子やテーブルの跡がついた床を見ていると、懐かしい記憶が体の奥から沸いてくる。

六年の間、この店でジェリコは泣き、笑い、日々を過ごしてきた。それはとても温かくて優しく、心地の良いものだった。

仕事を始めて間もない頃は、酒場の仕事に慣れずに注文を間違ったり料理をこぼしたりして随分と迷惑をかけたっけ。それから客に酒を無理やり飲まされぐでぐでんに酔っ払い、意識を失ったこともあった。アドリアンに出会い絵画の歴史や技術の勉強をさせてもらったし、アルドンの露天の手伝いをして小遣い稼ぎもやった。マドックの船に乗って大海原に沈む夕日を眺めた。そのときに描いた絵はたまたま居合わせた船乗りに買ってもらったんだっけ。他にも読書家から読み終えた本を恵んでもらって読み書きを学んだり、異国から来た行商人から旅の話の話を聞いたりして世界の広さを学んだ。ジェリコは知識を得ることで、描く世界観に現実感を増すことできた。そのお礼に一段階向上した技術で描いた絵を額に入れて渡したこともあった。ラ・メールにやってくる人間たちは、ジェリコにとってあらゆる方面の先達であり、ジェリコという人間の道しるべだった。ジェリコの異様に素早い判断力は、彼らがもたらせた様々な知識に裏付けられたものかもしれない。

そしてなによりジェリコという人間をここまで運んできてくれたのは、ダニエラの援助があったからだ。

そもそもラ・メールで働くことが出来たのはダニエラのおかげである。ダニエラの一言がなければ、今のジェリコは絶対に存在しなかっただろう。

ジェリコが働き始めてからも、ダニエラは先輩としてジェリコに

仕事を教えてくれた。注文の取り方や料理の運び方、客との接し方などだ。他にもモンツァから流れてきたジェリコを街に溶け込みやすくしてくれたのもダニエラが一枚噛んでいた。これに関しては豪快な性格のマドックがよくジェリコを連れまわしたの原因だが、時折ジェリコの傍にいたダニエラのおかげで、より馴染み易くなったのも事実だ。

そしてダニエラはジェリコの絵をよく見てくれた。作品というのは、見てくれるものがいてこそ価値がある。部屋に閉じこもり、誰の評価も受けず一人黙々と絵を描いていたジェリコを、今の開放的な描き方に修正してくれたのもダニエラだった。時折孤児院で描いていたものと今の絵を比べるが、技術抜きにして明らかに作風が変わっていた。方向性が大きく変わっていたのである。孤児院の頃は攻撃的なものをよく描いていたのだが、ラ・メールで働き始めてからは風景画や人々が笑っている絵を描くようになった。人々を絵で幸せにするのがジェリコの夢である。人間の温かみがある絵の方が、方向性としては合っているだろう。

そんなジェリコの姉のような存在だったダニエラとも別れなければならぬと思うと、ついため息が出る。身を裂くような思いとはこのような気持ちと言うのだろうか。孤児院を去るときも自分の一部を置いていくような一抹の寂しさがあつたが、それとは別の辛さをジェリコは抱えていた。だが、それを言葉に表わす術をジェリコは知らない。まだまだジェリコは無知だ。嫌というほどに。

もう一度ため息をついたとき、二階から人が降りてくる気配がした。こつこつと響く足音を聞くだけで誰か分かるほど、ジェリコはラ・メールに馴染んでいることになった今気づいた。

振り向くとあくびをしているダニエラが目に入った。眠そうに瞼をこすりながら、ゆっくりと階段を下りてくる。ジェリコはパンを一气にかきこんで飲みくだと、

「おはよう、ダニエラ」

ダニエラより先に朝の挨拶をした。

若干寝癖のあるダニエラはジェリコに気づくと「おはよう」と返した。だがその声にいつもの張りはなかった。もともと風邪気味だったこともあるし、昨日は一日中動きっぱなしだったのだから無理も無い。

「あの、ダニエラ。少し話があるんだけど」

ジェリコはダニエラに礼を言う義務がある。そして、これからのことを伝えなければならない。二度と会えなくなるかもしれないということ。

ダニエラはジェリコの言葉に頷くと、

「丁度いいわ。私も話したいことがあったから。その前に顔を洗ってくるからそこに座ってて」

そう言ってジェリコに背を向け、すたすたと玄関へ歩いていった。ダニエラの話とはなんだろう。見当がつかないが、あまり良い予感はない。アヤジに出会ってからどうも憂鬱な考え方をするようになった。悪い傾向である。

「それにしても、どこから話すべきか」

ジェリコが抱えている事情をそっくりそのままダニエラに言うのは得策ではない。おそらくダニエラは信じないだろうが、万が一信じた場合、旅についてくる可能性がある。そうなってしまうては本末転倒である。なんとかダニエラに心配させずに話す方法は無いだろうか。

下手な嘘はまず通用しないだろう。画家として腕を磨くために出かけてくるといっても説得力に欠ける。何せアドリアンの話を断ったのだ。今更絵を描く技術云々という話は避けたほうがいい。

ではモンツアの友人を訪ねるという話はどうか。ダニエラは危険だ、といって聞かないだろうがアヤジとエメという同行者を連れていえると言えれば問題は無いだろう。アヤジ達は昨日の酒場で知り合い、意気投合してモンツアへ行くこととなったとでも説明すればいい。

ただ、彼らと話している最中に倒れてしまったところや、その後

の展開をジェリコ知らないという点が少々怪しい。ジェリコが気を失った後、アヤジとダニエラが何らかの話をした可能性がある。そのときに妙な話をしていたら、ジェリコは嘘をついているということを経易く看破されてしまう。

「うーん」

妙案が思い浮かばない。いつそ素直に全てを話してしまうべきか。思い悩んでいると、がちやりという音がした。ダニエラが帰ってきたようである。

はっとしてそちらの方を向くと、さっぱりとした顔のダニエラが歩いてくる。もはやこれまでか。

ダニエラはジェリコの斜め前の椅子に腰掛けた。そして左手で頬杖をつくと、

「で、話って何？」

青い瞳から放たれる穿つような視線を、真っ直ぐにぶつけてきた。「実は」

一瞬、一から十まで説明しようという気がよぎった。だが、

「今日あたり、モンツアへ行こうと思うんだ。行って仲間に会いに行く。そして、そのまましばらく旅に出ようと思う」

頭で考えるより先に、喋っていた。

「今日モンツアへ？そしてそのまま旅に？また唐突なことを言うのね」

ダニエラは目を丸くさせて驚いた。

「うん。祭りも終わつたし、丁度いいかなと思ったんだ。旅に出たいというのは、前から言っているように少しでも見聞を広めようと思ったんだよ。長くて一年。船に乗って行こうかとも思っている」

我ながらよくもこんな口から出任せを言えるものだと思った。半分くらいは本心ではあるが、それにしても嘘を見抜けることができる自分が人に嘘をつくとは、実に酷い。吐き気がした。そもそもダニエラに対してこんな心理戦のようなものを仕掛けるのが嫌だった。自分で自分を傷つけるような気がしてくる。

「そう。でもモンツアの友人に関しては、問題ないわよ」

「どういうこと？」

ダニエラはよく分らないこと言った。

「私が話したかったことはモンツアのこと。昨日、モンツアへ行つてジェリコのお友達に会ってきたわ」

予想外の展開に、ジェリコは固まってしまった。ダニエラはそのまま話し続ける。

「知り合いに孤児院の主であるセプロさんを知っている人が居て、その人づてで会いに行ったの。そしてセプロさんを通じてお友達の居場所を聞いて、一軒一軒尋ねて周ったの。おかげで帰るのが随分遅くなったけどね」

なんとということだ。ダニエラはジェリコの代わりにわざわざモンツアへ行つて友人たちに会いに行ったという。信じられない。

しかしジェリコが持つ例の意思はダニエラの言葉を肯定している。だから尚更信じられなかった。

なぜダニエラはここまでジェリコに優しいのか。彼女が危険を冒したことよりも、このことの方がジェリコは気になった。ついこの間も思ったが、いい加減怪しかった。仲が良いとはいえジェリコは赤の他人である。家族でなければ血も繋がっていない。それにも拘らず、ダニエラは家族以上とも思える情をジェリコに与えてくれる。言いたくはないが、ダニエラはジェリコに対して異常な感情を持っているとしか言いようがなかった。

それを裏付ける理由は今回の件のみで充分である。まず、危険だと承知の上でモンツアへ向かったこと。若い人間が次々に失踪しているというのに進んでその中に飛び込んでいくのは愚の骨頂だ。賢いダニエラならば尚更ありえない行動である。しかし事実モンツアへ行つたという事は、それだけの危険を冒してまでジェリコのために行動するのは正直妙だ。

それから、時間的にダニエラは早馬を使ったと判断できるのだがこれには大きな問題がある。なにせモンツアへの早馬は非常に金が

かかるのだ。最低でもここからモンツアへ早馬を使えば銀貨七枚はかかるだろう。往復で十四枚。ちなみに、銀貨十四枚分とは三食付で一月近く過ごせる。そもそも早馬とは本来貴族が移動用に使ったリ、緊急時に使うものだ。街酒場の娘が早馬を手配するなど、親の死に目になんとか間に合わせるときくらいしか思い当たらない。ジエリコが一刻も早く友人たちの現状が知りたいということ、できるだけ酒場の運営に迷惑にかからないようにするために早馬を使うのはあまりに常識はずれな行動だ。断言するが、赤の他人に銀貨十四枚を使うなんて贅沢、貴族ならいざ知らず常人ならば絶対にしない。

次に、モンツアへ到着してからの行動。聞いた話からするとまずセプロのところへ行き、その後街に散らばった仲間のところへ向かったはずだ。ベルガモと比べてモンツアは小さいが、それでも女の足で歩くには十分な大きさを持つ。おそらくは一日中休まず街を駆けずり回って友人達を訪れたと考えられる。そんな銅貨一枚の得にもならない苦勞など、普通の感性を持った人間ならば絶対にしない。思わず考え込むジエリコをよそに、ダニエラは穏やかに微笑みながら話を進める。

「それで、モンツアに住んでいる友人はみんな無事だったわよ。ジエリコの話を話すと懐かしそうに笑っていたわ。そうそう、たまには帰って来い、ってセプロさんが言っていたわね」

友人達は無事だったらしい。まあ冷静に考えてみれば、ちょっとやそつとでくたばるような連中ではない。共に死線を乗り越えてきた仲だ。彼らの生命力はジエリコがよく知っていた。

「それから旅に出る、って話だけど、絵を描く腕を磨くのが目的ならアドリアンさんの話に頷けばよかったのに」

ダニエラは予想通りの返答をしてくる。ジエリコは饒舌に返す。「前にも言っただけど、著名な画家であるティツアさんに会えるというのは大きな経験になる。けど、僕はまだ未熟だから彼が話すことを理解しきれるかどうかわからない。それに、僕が絵に対して求

めているものは、ティツアさんはどうか分からないけど、少なくともアドリアンさんとは方向性が違うんだ。だから断った。おそらくこの気持ちはいずれ変わっていくと思うけど、今は自分のわがままに従いたかったんだ」

「そう。まあジェリコがそう言うのなら私は何も言わないわ。けど、旅に出るってどういうこと？突然過ぎるわ。何かあったんじゃないの？」

この展開はまずい。やはりダニエラを説得するのはちょっとやそつとの嘘で言いくるめるものではなかった。

「何も無いさ。最近絵を描くのが行き詰ってて、気分を入れ替えをしたいんだよ。だから旅に出て色々なものを見て、心機一転して絵を描きたいんだ」

「それはモンツアに行かなければならないの？」

「いや、モンツアへは行かない。友人が無事なのは分かったから、北のロンバルディに向かう」

「でも船に乗って行くんじゃないの？」

「ああ、まあそれは確定した話じゃないから」

「そんなあやふやな計画で旅ができると思ってる？甘いわよ」

ジェリコは完全に墓穴を掘っていた。段々とダニエラの顔が険しくなっている。

ダニエラの視線に射竦められたジェリコは思わず視線をそらし、黙り込んでしまった。馬鹿。これでは何かを隠しているということを示しているようなものだ。

「……何か、隠しているでしょ」

案の定ダニエラは尋ねてきた。必死に頭をめぐらせるが、妙案は出てこない。どうやらここまでのようだった。元々嘘をつくのは苦手である。ましてや相手が相手だ。ボロだすのは必然だったのだから。

ジェリコは観念してため息を一つつくと、素直に話すことにした。
「実は昨日——」

11 幕開け

ジェリコはダニエラに洗いざらい話した。

アヤジとエメの二人組みのこと。自分に課せられた運命のこと。そのために周りを巻き込みたくないこと。ジェリコの言葉にダニエラは黙って耳を傾けていた。

「だから、僕は旅に出なければならぬ。ベルガモともお別れた」
ジェリコが言い切ると、ダニエラは閉ざしていた口を開いた。

「今言ったこと、本当なのよね」

「うん。僕が人の嘘を見抜けるのは、ダニエラもよく知ってるだろう」
「ええ。でも正直、信じられないわ」

そりゃそうだろう。当の本人であるジェリコ自身、今でも信じきれていないのだ。蚊帳の外のダニエラにとっては、おとぎ話を話している様に聞こえていたかもしれない。

「そのアヤジっていう人、信じられるのよね？」

「少なくとも、嘘はつかない。ちよつと頭にくる性格をしているけど、根は真面目な人なんじゃないかと思う」

「そう」

突然ダニエラは立ち上がり、

「やっぱり私じゃあどうにもできないのね、ジェリコ」
俯いたまま言葉を繋げる。

「え？」

そしてダニエラは寂しそうな目を潤ませながら、

「因果なものね、運命は」
つう、つと涙を流した。

「ダ、ダニエラ？」

ダニエラは涙を拭くと、再び椅子に座る。

「ごめん。取り乱しちゃった」

ダニエラはいつもの微笑を浮かべた。だが今はその場しのぎの仮

面にしが見えなかった。

「そうね。もう会えないわけじゃないものね」

「うん。旅に出るだけだよ。きつとすぐに帰ってこれるさ」

ジェリコの言葉で、ダニエラの涙は再び頬を伝った。その姿を見ていたたまれない気持ちになったジェリコはつい謝ってしまふ。

「なんだかごめん。やつぱろこんな話するんじゃない無かった」

まさかダニエラが泣くとは。今までダニエラが泣いている姿なんて見たことが無い。ダニエラのジェリコに対する過剰反応は本当に驚かされる。一対何がここまでダニエラを突き動かすのか。

「いいの。よく分かったわ。なら、旅の準備をしないといけないわね」

「うん。でもその前にドメニコさんにも話しておかないと」

「そうね。父さんにも話しておかないと」

そう言っただニエラは頭を垂れた。繊細な前髪がはらりと波打ち、ダニエラの顔を隠す。

「ダニエラ。一つだけ訊いていいかな」

ジェリコは表情の分からないダニエラの顔を見て言った。「いいわよ」とダニエラがくぐもった声で答える。

ジェリコはごくりと生唾を飲み、

「ダニエラは、どうして僕に優しいの？」

我慢ができなくなったジェリコはダニエラに質問をする。ダニエラはジェリコの言葉に何の反応を示さず、ただ絶望するように頭を垂れるばかりだった。

一時、重苦しい空気が滞り、

「ダニエラ？」

張り詰めた空気が途切れた瞬間、ダニエラは立ち上がった。そして顔を隠したまま、ジェリコに背を向けそそくさと二階へ上がって行く。

「ダ、ダニエラ？」

ジェリコの言葉は空しく空気に溶け込んでいく。ダニエラは何も

聞こえていないようにそのまま上がって行き、ジェリコの視界から消えた。

「どういうことだ……」

やはりダニエラには何か秘密がある。ジェリコには言えない秘密が。

（だが、それを暴くのは――）

人と安定した関係が続けるにはできるだけ過干渉を避けなければならぬ。無闇に人の心には踏み込んではいられない。自分にされて嫌なことは他人にしてはならない。これらはジェリコが今まで生きてきた中で学んだ教訓である。

それを今、ジェリコは自ら破ろうとした。今まで築き上げてきたダニエラとの絆を疑ったのである。それは場合によっては裏切りと同義であり、紳士としてあるまじき行為だ。

それにダニエラはジェリコの話を理解してくれた。どんな心境で聞いてくれたのかよく分からないが、納得してくれたのだ。ダニエラにとってその決断は自分とジェリコの気持ちを天秤に掛け、その結果ジェリコに対してかなり譲渡したはずなのだ。それにも拘らず他人の心に土足で上がろうとするなんてありえない話である。今更ながらジェリコは大きな失態を犯してしまったのだ。

おまけにダニエラに対して礼の一つもしていない。自分の欲求のままに突き進んだ愚かな結果がこれだ。思わず自分を殴りたくなる。「まさかあんたがそうだったとはね」

突然、ダニエラとは正反対の高飛車な声が、ラ・メールの広間に響いた。

声のした方を向くと、朝日を背にして玄関に佇む人間がいた。

身長はジェリコと一緒に少し低いくらい。三つ編みにした金髪と紺の外套が風に揺れ、少女にも拘らず腕を組む姿が妙に型にはまっている。

ジェリコは驚きながら声を漏らした。

「君は、確か昨日の――」

「ええ。昨日あんたに道を教えてもらった通りすがりの旅人よ。文句ある？」

少女は顎をあげて思いつきりジェリコを見下す。その冷たい瞳は玄関まで結構距離があるにもかかわらず、異様な気配を放っていた。「ジェリコ・パプールオ。十五才。幼い頃両親に捨てられ、モンツアの孤児院で育つ。その後はベルガモの酒場で働き、日々を繋げている。栗色の髪と翡翠のような瞳を持ち、若くして洞察力、観察力に長ける」

感情の無い声で少女はジェリコの素性を語る。異様な展開にジェリコ危機を感じとり、知らず椅子から立ち上がり身構えていた。

「一見変哲の無いただの人間に見えるが、体に流れる血液には強力な魔力を保持した遺伝子が組み込まれており、魔術の運行、実験に最適である……か。」

まさか、この女の子……！

「なら、死んでもらうわ」

少女が腕組みを解くと同時に、ジェリコは何も考えず左に飛んでいた。

とっつ！

先ほどジェリコが立っていたところに、細身のナイフが突き刺さっていた。しかもナイフには何か塗ってあるらしく、刃に触れた床が腐食し始めている。

「君は！」

「問答無用よ」

言いつつ少女は立て続けにナイフを投げる。

っひゅん！

ジェリコは転がりながらナイフをかわしつつ、なんとか逃げられないかと思いをめぐらせる。

酒場の唯一の出口は少女が塞いでいるから正面から出ることはできない。ならば窓からはどうだろうか。

横目で窓を見てみると、間の悪いことにがっちりと鍵まで掛けて

閉じられている。ラ・メールでは、窓を開けるのは最初に一階に降りてきたものが開ける決まりだ。今日に限ってジェリコが最初に降りてきたらしい。こんなことならすぐに開けておくべきだった。

「ちょこまかとしつこい奴ね。さっさと降参しなさいよ」

ひゅひゅひゅ！

苛立つ少女の手から、朝日を受けてきらめくナイフが風を切って飛んできた！

「危ない！」

とととつ！

咄嗟に近くにあつた椅子を盾にしてナイフを防ぐ。ナイフが突き刺さる音と椅子が溶ける音が生々しい。あと一歩判断が遅ければ、ジェリコの顔面にナイフが突き立っていただろう。あまりにも唐突に訪れた死の恐怖に、どくりと心臓が波打った。

それにしてもどうやら少女は策をじつくり考える時間は無いらしい。しかしそれは少女からすれば至極当然なことだ。立場が逆ならばジェリコも同じことをしているだろう。

なんとか攻撃をかわしながら逃げ道を探すしかないのだが、唯一の出口を防がれていては手の打ちようがない。大声を出してドメニコを呼ぼうかと思つたが、そんなことをすれば被害が余計広がりそうなのでやめておく。

「ちい、護衛をつけてるなんてあんた結構抜け目無いのね。迂闊だったわ」

突然少女は舌打ちをすると、話す方向を変更した。

「護衛？」

玄関の方で人が走り去る音が聞こえてくる。話の流れからしてまさか少女が逃げていったのだろうか。

そのまましばらく沈黙が辺りを包み込んだ。少女が攻撃してこないどころか人の気配すらない。

ジェリコは勇気を出して椅子から顔を覗かせて、玄関の方を見てみた。

「！」

玄関には見覚えのある姿があった。全体的に黒く、精巧に作られた人形のように無機質な表情。人形ならば人の気配がしなくて当然である。だが視線の先にいる者は人間であるにも拘らず、気配を感じさせない存在だ。姿かたちをこの目で捉えていてもなお、彼女が発する気配とはその辺にある無機物そのものだった。

玄関に佇むものは、アヤジの妹エメだった。

「……」

外を見ていたエメはジェリコの視線に気がつくと、その黒い瞳を真つ直ぐにジェリコに浴びせてきた。その体の芯まで凍らせるような揺ぎ無い視線に思わず体が硬直してしまう。

そのままエメはジェリコのところまで歩いてきた。途中、床に刺さったナイフを無表情に抜いて懐にしまう動作が余計に機械を連想させ、ジェリコは本当にエメの存在が恐ろしくなった。

「……」

「あの、ありがとう。助けてくれた……んだよね」

ジェリコの言葉はちゃんと耳に入っているのだろうか。エメは無言でジェリコを見下している。

近くで見るエメは遠目の時よりも一際不気味な気配を放っていた。綺麗なんだけど不気味。一瞬そういうテーマで絵を描いたら面白いものが描けそうだとジェリコは思った。

「……」

突然エメは顎をしゃくつた。顎を上げろといったらしい。

ジェリコが顎を上げると、今度は頭を掴まれた。そして無造作に髪を触り、次に肩や胸を触られる。持ち物検査をされているようだ。正直気持ちのいいことではないが、逆らうとまずい気がするのだからがままにしておく。

ひとしきり体を触った後、エメは満足げに頷いた。今更気づいたが、どうやら怪我をしていないか確認していたらしい。

「……」

怪我の有無を調べた後、用は済んだとばかりにエメはジェリコに背を向けた。そしてそのまま玄関の方へ歩いていく。

「あ、あの」

「……」

ジェリコの声に反応してエメは足を止める。だがすぐさま歩き始め、そのままラ・メールを出て行った。

後に残されたのは、ジェリコと少し散らかった広間のみである。さりげなくエメはナイフを全て回収し、戦闘の痕跡を最小限に抑えてくれていた。実に合理的な行動である。ますます機械を連想させる。

「……ふう」

思わずジェリコは椅子に座り込んだ。そして数分前の出来事を振り返る。

僅かな時間ではあるが、ジェリコは命の危機に瀕した。まさかあの少女がジェリコの血を狙う刺客だったとは。昨日道で会った小さな通行人に命を狙われたのだ。正直信じられない。しかしこれから今見たいのことが当然のように起きるのだ。これくらいでくたびれていては命がいくつあっても足りやしない。

「いや、そんなことよりも」

考えなければならぬことがある。なぜ昨日道で会った少女が先ほどやってきたのか。それから彼女は手を組んでいる人間がいるのか。

まずは最初の疑問だが、おそらく彼女は昨日の段階でジェリコがどこに住んでいるのか知らなかったのだろう。昨日彼女は酒場の場所を聞いてきた。彼女はジェリコが酒場で働いていることを知っていてもどの酒場で働いているか知らなかったのだ。おそらくベルガモンの全ての酒場を回るつもりでいたのだろう。

ならばなぜ「ジェリコという少年が働いている酒場はどこだ」と尋ねなかったのか。

おそらくできるだけジェリコという言葉を使いたくなかったのだ。

彼女や刺客にとってジェリコの血は金銀財宝と等しい価値がある。ならば宝の鍵であるジェリコの血はなるべく穏便に手に入れようとするはずだ。できるだけ周りに気づかれないようにひっそりと。

そういう心理状況だったとすると、「ジェリコ」という単語はできるだけ出さない方がいい。ましてや「ジェリコ」という少年が働いている酒場はどこだ」なんて人に尋ねるのはある意味自殺行為だ。もしその場を同業者に聞かれたり目撃されれば、手を組んでいない限り同じ宝を狙うものとして彼らは黙っているわけにいかないだろう。邪魔者はできるだけ排除するに限る。ましてや物騒極まりないものを求めている連中だ。一戦交える事態になるだろう。

故に彼女はたくさんの方が出入りし、情報も錯綜する酒場で聞き耳を立てることにした。ジェリコの姿やベルガモの酒場で働いていることはすでに知っているのだから、運がよければその酒場でジェリコを発見することができるかも知れないのだ。しかもジェリコはベルガモでそこそこの有名なのだ。自慢ではないが酒場の話の種くらいにはなるだろう。

それから道で会ったとき、彼女はすでにジェリコのことを気づいていた可能性は無い。それは先ほどの言動に裏付けられている。彼女が話す言葉に嘘は一言も無かったから確実だ。

次に彼女が一人なのか複数の人間と手を組んでいるかどうかだが、現時点では一人の可能性が高い。手を組んでいるのなら現場に二人いないとおかしいからだ。ジェリコを始末するのは彼女一人で他がその補助をするという作戦だとしたら、エメと戦っていないとおかしい。その様子が無かったのだから、あの場には彼女一人だけだったはずだ。つまり、彼女は一人でジェリコの命を狙っている。現段階では分かるのはこれくらいだろう。

最後になぜあの場にエメがいたのかが気になるが、こればかりは考えようが無い。ジェリコは常に監視されているのかもしれないが、常に監視されているのならすぐに助けにくれてもよさそうなものだ。それがなかったのだからたまたま居合わせたのかもしれない。

この件については後に聞いてみることにする。

「なににせよ、早く街を出ないとまずいな」

このままだと周りに多大な迷惑を掛けてしまう。ダニエラのが気がかりだが、そんなことを言っていたらダニエラを危険に曝してしまう。疫病神はさつさと去るのが得策だろう。

そのためにはドメニコに事情を話して無理やりにも旅に出る許可を貰わなければならない。「しかしその前に、ドメニコが起きるまで一階の掃除だ」

命を奪われそうになった割には戦いの痕跡は極めて小さい。椅子やテーブルを元に戻せばそう簡単に怪しまれることは無いだろう。

ジェリコは一人立ち上がると、散らかった椅子やテーブルの整理を無言で始めた。

#12・幕開け part 2

広間を片付けた後、ジェリコは二階から降りてきたドメニコを呼び止めて事情を説明した。もちろんジェリコの血が狙われているとか、怪しげな連中と旅に出るとかは伝えていない。以前から話していた、絵描きとしての技術を向上させるための旅に出ると伝えた。

ドメニコとの話し合いの途中、アンナも話し合いに加わった。アンナは無言でドメニコとジェリコの話聞き、時折頷いていた。方針はドメニコに任している様子だった。

ジェリコの話にドメニコは始終渋い顔をして聞いていたが、ジェリコは最近の描いた絵の評判や新しい発想を求めている旨を説明し、なんとかドメニコの首を縦に振らせた。

ただしそれには条件が三つ付けられた。一つ目は必ず帰ってくる。もう一つは定期的に手紙を書くこと。三つ目は帰ってきたら店に飾る絵を描くこと。ジェリコはその条件を快く引き受けた。

「流れる血は違えど、お前はラ・メールの家族だ。旅に出るからには必ず帰ってこい。いいな」

ドメニコのその言葉にジェリコは泣きそうになった。ドメニコとアンナがジェリコのことを心配していることが嬉しかったのだ。だが、そんな気持ちの裏側には、二度と会うことができないかもしれないという悲しみの念も込められていた。複雑な感情を歪に変形させながら、ジェリコは二人の了承を得たのだった。

ドメニコとアンナを説得した後、ジェリコは二階へ行きダニエラの元へ向かった。ドメニコと話している間、ダニエラは一度も下に下りてこなかった。涙の件もあり、ダニエラに伝えなければならぬことがたくさんあった。

「ダニエラ？」

言いながらジェリコは黒ずんだ木の戸をノックする。乾いた音が心の奥まで響いてくるようだった。

——数秒経ち、ジェリコはもう一度ノックしようとする。

「どうぞ」

その瞬間を見計らったように、こもったダニエラの声が戸越しに聞こえてきた。抑揚の無い、水のように無色な声のせいでジェリコは思わず硬直した。

ジェリコは一度深呼吸してからノブに手を掛け、ゆっくりと開いた。

「……ダニエラ」

部屋の奥には、椅子に座って窓の向こうを眺めているダニエラの姿があった。

朝だというのに妙に黄昏でいて、まるで魂が抜けてしまったように空虚な気配を纏ったダニエラは、ジェリコの方は向かずただひたすら窓の向こうに広がる大空を眺めている。声を掛けなければそのまま飛んで行ってしまいそうなほど、覇気が無かった。

ジェリコは部屋の中へ一歩を踏み出すと、そのままダニエラの傍まで歩いた。

ようやくこちらを振り向いたダニエラは、眉をひそめ、困ったような顔をしていた。

「ジェリコ……」

ダニエラはぽつりと呟く。捨て猫のように寂しげで、か弱い声だった。

ジェリコは丁度近くにあった椅子に腰掛けると、ダニエラの目をじつと見つめた。

「ダニエラ、さっきはごめん。許して欲しい」

ジェリコの言葉にダニエラはそっぽを向いた。朝日に輝く金髪が儚げに揺れ、

「気にしてないわ。大丈夫」

そんなことを言うのだった。ジェリコはじつとダニエラを見つめながら話を続ける。

「この数年間、いつもダニエラは僕を助けてくれた。ラ・メールで

働けるようになったのもダニエラのおかげだし、今までともに言ったことなかったけど、本当に感謝してる。ありがとう、ダニエラ」
ダニエラはゆっくりとジェリコの方を向いた。その青い両目には涙を湛えている。

「ジェリコ、私は……」

「さっきも言ったけど、僕はダニエラに恩返ししなくちゃならないいや、まあ、恩返ししなくちゃならないのはダニエラだけじゃないんだけど。ごめん喋るの下手で」

ジェリコは頭をかきながら、つい足元に目をやった、白く細いダニエラの足首が目に入り、どきりとした。どうもダニエラと話すときはいつもようにいかない。妙に緊張してしまう。ドメニコと話していたときはこんなこと無かったのだが。

ジェリコはなんとか再び視線を戻した。ダニエラは真っ直ぐにジェリコを見据えている。

「だからその、なんていうか」

一度言葉を切ってから続ける。ダニエラの視線が厳しい。

「僕は旅に出る。けどみんなから貰ったものを返さなきゃならないんだ。僕は紳士を目指しているから」

それは幼い頃の幻だったのかもしれない。まどろんだ夢かもしれないが、今でもその姿に憧れている。自分を許容してくれる唯一の光のように。

「だから、僕は必ず帰らなきゃならない。恩返しするために」

なんとか言い切る。

「だから、安心して」

さらに「泣かないで」と言おうとした時、

「ごめんなさい。私……」

先に釘を刺された。ダニエラは口を手で覆い、嗚咽を隠しながら涙を流している。

なぜダニエラはジェリコに過干渉するのか。なぜこれほどまでに過剰に反応するのか。ダニエラが秘めている謎は尽きないが、いつ

の間にかジェリコはもうそんなことどうでもよくなっていた。

——だから、抱きしめる。

「……ジェリコ？」

「泣かないでよ。ダニエラが泣くのは、嫌だ」

椅子に座っているダニエラの身長は丁度ジェリコの頭一つ分低い。ダニエラはジェリコの胸に顔をうずめる形になった。

あまり厚くないジェリコの胸板にダニエラの顔が沈む。いつもと逆だ、とジェリコは思った。

ダニエラを抱きしめていると、彼女の気持ちが無となく伝わってくるような感じがした。寂しさ。焦り。束縛。

ダニエラにはやすらぎが必要だ。どんな間違いがあろうと、それだけは確かである。ジェリコは確信していた。

しかしそのためにはジェリコは離れなければならない。彼女の心の枷になっているのはジェリコの存在だ。ジェリコがいる限り、ダニエラの気持ちたちが穏やかな草原のようになることは無いだろう。

間のいいことに、ジェリコは今日ベルガモを発つことになっている。ジェリコとダニエラは嫌でも離れる運命に置かれているのだ。因果なものだとジェリコは感じた。

「ありがとうジェリコ。もう大丈夫」

ジェリコの胸から離れたダニエラの顔は、腫れ物が落ちたようにさっぱりとしていた。いつもの柔和な顔とは少し違い、今まで背負い続けていた荷物をようやく降ろしたときのような気配に満ちていた。

「ジェリコ。必ず帰ってきて」

ダニエラはいつもの年上からの目線で綴った言葉ではなく、同じ高さからジェリコに話した。

「待ってるから。父さんも、母さんも。みんな」

ジェリコはダニエラの言葉を噛みしめながら深く頷いた。

「もちろん。僕は紳士を目指している。約束は必ず守るよ」

ジェリコの言葉に、ダニエラはようやく笑顔を浮かべた。影のな

い、文字通り輝くような笑顔だ。

ジェリコはその顔を待っていた。つられてジェリコも笑ってしまふ。やはりダニエラに悲しげな顔は似合わない。笑っていないと。ダニエラはこうでなくちゃならない。

「それじゃ僕は部屋に戻るよ。荷物や部屋の整理をしておかないと」「わかったわ。何か手伝えることがあるなら言って。私はもう少し」「ダニエラはそこで話し終えると再び窓の外を見た。

「こうしていたいから」

窓の外にはベルガモの町並みが広がっている。赤茶の屋根がずらりと並び、空には渡り鳥が気ままに飛んでいる。商人や子供の声がダニエラの部屋まで届くあたり、今日もベルガモは活気に満ち溢れているようだった。

ここからの景色は決して良いわけでもないが、慣れ親しんだ街を眺めるのは悪くない。景色の一つ一つにはかつての思い出がたくさん保管されており、その本棚から記憶を取り出しパラパラとめくると、懐かしさについ心が温かくなる。

おそらく今、ダニエラもそんな気持ちなのだと思う。ジェリコとの思い出を抱きしめているのかもしれない。

「それじゃ、また」

ジェリコは最後に声を掛けると、静かに部屋を出て行った。ダニエラはただ穏やかに窓の向こうの青空を眺めていた。

13 ・幕開け part 3

ダニエラと和解した後、ジェリコは部屋に籠もって今旅支度や今まで描いてきたものなどの整理をしていた。一枚一枚自分の作品を見ていると、さきほどダニエラの部屋の窓から見たベルガモの景色ではないが、色々な思い出が蘇る。この記憶は二年前。あれは働き始めた頃。こあそこにあるのはジェリコが鼻高々になって調子に乗っていたときのもの――。

感傷に浸りつつも、仕事はしっかりとこなしていく。いるもの、いないもの、無数の絵たちを箱に仕舞い、大切に保管しておく。ありがたいことに、旅に出ている間ジェリコの部屋は倉庫になることなく、しっかりと空けておいてくれるらしい。ドメニコのそういった計らいもあり、部屋の整理は意外と軽快に進んでいく。忙しさでいえば少し大げさな掃除と大差ない感じである。

懐かしいものを見つかるたびに口をほころばせ、作品をわが子の如く愛おしく思っていると、急に窓が何かに打たれるように鳴き始めた。風だろうか。ジェリコは様子を見に窓の元へと行く。

ばたんっ！

「！」

ジェリコが窓の取っ手に手を掛けようとした瞬間、その窓はひとりでに開いた。そしてジェリコは窓の向こうにいる人間に度肝を抜いた。不幸の運び屋、アヤジである。

「刺客の一人に感づかれたようだ。夜を待つのは危険だ。準備しろ。行くぞ」

アヤジは一方的に話すと、黒い外套をはためかせて部屋の中に入ってきた。そして切れ長の黒い瞳でジェリコをじろりと睨んできた。「何をばやっとしている。急がないと命が危ないぞ」

確かにそうだろう。あの少女がここにきてジェリコを襲ってきたという事実をアヤジが知っているのだから、当然同業者である刺客

にその情報が漏れている可能性が高い。そうするとラ・メールに長居するのは非常に危険だ。なによりラ・メールの住民に迷惑を掛けしてしまうのがジェリコは嫌だった。

アヤジはジェリコの部屋をぐるりと見回すと、

「丁度部屋の整理をしているところだったか。ならば大体必要なものとそうでないものの区別がついているはずだな。早く準備しろ」

一方的なアヤジの話にジェリコはいい加減頭にきた。

ジェリコはアヤジの黒い瞳を見返すと、閉じていた口を思いっきり開いた。

「少し黙ってくれませんか。確かに事態は芳しくないだろうけど、心の準備くらいさせてくださいよ」

ジェリコの言葉にアヤジは信じられないといった顔で、ため息をついた。

「君は馬鹿か。命を狙われているのだぞ」

そして一呼吸置き、ジェリコに背を向けると、

「……仕方が無い。外で待っている。急げよ」

アヤジはそういうと窓から出て行った。その異様な身体能力に驚きながらも、ジェリコは静かに自分の身に降りかかっている事態を把握した。あの落ち着いているアヤジがこんな豪快な登場の仕方をするのだから事態は本当に危険なのだろう。分かってはいるが、やはりそう簡単に心の整理がつく話ではない。

ジェリコは片づけが途中の荷物をちらりと見ると、口を硬く引き結んだ。

こうしている間にも凶悪な刺客がジェリコの下へ接近しているかもしれないのだ。そう思うと身震いした。

アヤジが出て行った窓からは風が吹き込み、ジェリコの髪を優しく撫ぜる。整理がついていない作品達を吹き飛ばすその風は、まるで今のジェリコのような風だった。

そんな風を受けながらジェリコは再び動き出す。しかし今度は部屋の整理ではなく荷造りの方だ。

ジェリコは冷静に考えた結果、アヤジの言うとおり一刻も早くベルガモを出ることにした。どの道ベルガモを去る運命なのだ。早く去る方が案外後腐れ無く済むかもしれない。

ジェリコは大きめの袋を引っ張り出すと適当な服を詰め込む。そして机の引き出しから手のひら程度の大きさの布袋を取り出した。ジェリコの貯金である。

貯金と手持ちを合わせて金貨二枚と銀貨十七枚。それから銅貨が六十枚程度。これだけあればしばらくは旅ができる。ちなみに金貨二枚は銀貨約七十四枚分に相当する。我ながらよく貯めたものだ。金と着替えは用意した。後は――。

「画材をどうするか」

ジェリコにとって筆と紙は無くてはならない存在だ。だが自分の命をかける旅に持つていくには、画材は少々かさばる。荷物は必要最低限に留めておくべきだ。

しかし画家としての心がそれを妨害する。一流になるにはいついかなるときも妥協してはならない。

――ジェリコは葛藤した。

今ここで、絵描きとしての生命線とも言える画材を手放していいのか。それは今までの生き方を全否定する行為ではないのか。絵と共に生き、そして死ぬのではなかったか。

手垢にまみれた筆を持ちくすんだ筆先をぼんやりと眺める。これは大事に使ってきた筆の一本だ。初めて町の絵画大会で受賞した作品を描いた筆である。その分思い入れも強く、この一本はジェリコの宝物だ。この筆と今生の別れになるかもしれないと思うと胸が痛くなる。

ジェリコは一本一本筆を愛おしく見つめ、ある結論に至った。

「筆だけ持つていこう。筆さえあれば、どこでも絵を描ける」

もともと絵画修行のための旅に出るとドメニコに説明したのだ。画材を一つも持たずに出るのはおかしい。それに筆はいざというとき武器になるかもしれない。世の中何がおきるか分からないという

ことはとうに身に沁みている。筆数本ならそうそうかさばらないし問題は無いだろう。

ジェリコは筆を十二本ほど選んだ。判断基準は特に無い。直感で選んだ。

これから旅の途中挫折そうになったときはこの筆たちを見て自分を奮い立たせることにしよう。

世界をまたに駆ける画家になる、ということを見失わないために。

ジェリコは荷物をまとめた後、ダニエラの元へ向かった。これからラ・メールを発つということを伝えるためだ。

「ジェリコ、必ず帰ってきて」

未だ窓辺で黄昏ているダニエラは、部屋に入ってきたジェリコに一言そう言うつと再び窓の外を見始めた。ダニエラの細い両肩が小刻みに震えているのを見たジェリコは「約束する」と言い残し、速やかに部屋を出た。あのままダニエラの部屋に居たら、彼女の心が再び迷い始めるかもしれないと思ったからだ。ジェリコは去り、ダニエラは残る。二度とこの決断を変えてはならない。

ダニエラと短い別れを伝えた後、ジェリコは一階に降りた。一階ではドメニコとアンナが珍しく二人で話していた。話しの内容はこちらまで聞こえないが顔が険しい。ジェリコのことを話しているのかもしれない。

「行くのか。ジェリコ」

ドメニコはジェリコの存在に気づくと、いつもの強面の顔に戻った。

「はい。勝手に申し訳ないですが、しばらく暇をもらいます」

「構わんよ。そのかわり、交わした約束は必ず守れ」

ドメニコと結んだ三つの約束が思い浮かんだ。ジェリコはそれをもう一度噛みしめると、

「もちろんです。僕は、約束は守ります」

自分でも驚くほど、決意に満ちた返事をした。ドメニコはジェリ

コの雄雄しい返事に頷くと、

「ならば問題ない。存分に学んで来い」

ジェリコは無言で頷くと、ドメニコとアンナに背を向けた。そして長年くぐってきたラ・メールの門を出たのだった。

#14・旅立ち

空には輝く太陽があり、ところどころに千切れた雲が漂っている。相変わらず春の日差しは強いが、街を駆け巡るベルガモの風は、いつもと違い敵意に満ちているかのように強風だった。

渡り鳥たちも今日は休みなのか、数えるほどしか飛んでいない。石畳の道にはカーテンのような風除けを付けた露店がずらりと並び、いつもと違う雰囲気醸し出していた。

しかし客足はいつもとそう変わり無く、客と店の主人との言い合いがあちこちから聞こえてくる。ベルガモの町は今日も活気づいていた。

しかしジェリコの足取りは重い。肩に背負った荷物が重たいからではない。心に背負ったものがあまりに巨大で重過ぎるからだ。

そんなジェリコの目の前には二人の人間が立っている。ジェリコは最初彼らを死神だと思った。

黒い服装。異国の気配。そして得体の知れない知識。死神としての条件はそれなりに揃っていると思う。

だが彼らはジェリコの命を守ってくれる守護者らしい。不幸の運び屋が守護者なんて、つまらない冗談にも程がある。

ジェリコはこれから二人の死神と旅に出なければならぬ。もし拒絶すれば運命に体を押しつぶされ、容易く殺されるだろう。

しかしジェリコは死ぬわけにはいかない。やる必要がある。やらなければならないことがあるのだ。その目標を掴み取るまでは、生き続けなければならない。それがどれほど辛いことであっても。

「覚悟はついたか」

太陽を背にしたアヤジが話しかけてきた。背の低いジェリコは彼の影にほとんど収まってしまう。

ジェリコは一瞬声を詰まらせた後、「ついたさ」となんとか返す。「ならば行くぞ。まずは南のモンツァへと向かう。俺とエメに挟ま

れるようにして歩け。はぐれるなよ」

言うなりアヤジは南の方向を向き、口を真一文字にして歩き始めた。一時の猶予も無い、そんな言葉が話さずとも感じられた。

エメはというと、相変わらざるの無表情でジェリコの後ろを陣取る。時折左右を確認、いや、監視しているようだった。二人ともかなり神経質になっている。

だがジェリコのような素人の一般人と旅をするのだからこれくらい気を張るのは当然かもしれない。ジェリコは殺気を感じ取ることもできなければ、剣を持った相手と戦うこともできない。そんな男を守りながら旅をしていくのだから、二人にとってかなり面倒な事態に違いない。

「先に釘を刺しておくが、モンツアに着いても感傷に浸る暇は無いぞ」

歩きながらアヤジが話しかけてくる。

「モンツアでは今お前を探し出そうと失踪事件なんて噂が出るほど連中が躍起になっている場所だ。そんなところで悠長に過ごすわけにはいかないからな」

やはりモンツアで起きている失踪事件というのは、自分と関係があったようである。自分のせいで無関係な人間を巻き込んでしまったことにジェリコは心が痛んだ。

「お前のことだ。自分のせいで他人を不幸にしてしまったなんて考えるだろうが、気にすることはない。それがそいつらの運命だからだ」

アヤジはジェリコの心を見透かすと、大きな背中中で語りかける。しかし人々を幸せにするのが目標のジェリコにとって、自分のせいで他人を不幸にするのはとてつもなく不快だった。なまじ運命というものが非常に理不尽だということを身を持って知っているので、アヤジの言うことを理解できるのがさらに嫌だった。

「僕は、人を幸せにしたいだけなんだ」

意識せず、口に出していた。最近無意識に声を出す癖がついてき

たような気がする。

「なら、俺とエメも幸せにしてくれるのか？」

探るような声でアヤジは返してきた。予想外の返答に、ジェリコは再び声を詰まらせてしまう。

「お前が今言った言葉は、生半可な気持ちで言っているいい言葉ではない。肝に銘じておけ」

それきりアヤジは黙り込んでしまった。ジェリコも気まずくなつて声が出ない。一行は無言でベルガモの町を歩いていく。

それにしても先ほどのアヤジの言葉は効いた。

確かに、今の自分では誰一人幸せにすることができない。あらゆる点であまりにも非力だ。そしてアヤジの「俺とエメも幸せにしてくれるのか」という言葉。これはつまり現状のアヤジとエメが幸せではないということである。この幸せを成就するにはおそらくジェリコの血を使った儀式が必要なのだろう。それを無意識のうちに察知したジェリコはすぐに言葉を返せなかった。

だが、ジェリコの夢であり目標であり願いである「人々が幸せに暮らす」というのは、特定の人間だけに許されるものではない。すべての人間平等にもたらせるものである。しかし世の中にはジェリコの与り知らない世界があり、そこでは人の幸せを横取りすることによって幸せを手に入れる人間達がうようよいるのだ。ジェリコは彼らを幸せにすることができるのか。

——いや、そもそもそんな非道を行う連中の幸せなんてジェリコは願っていないのか。人々の幸せを願うというのは、まだまだ余分なものがついた状態のジェリコの目標なのかもしれない。

ジェリコは絵の力によって人々の幸せを願った。それは間違いない。しかし本当に「幸せ」を願ったのだろうか。今、こうして自分の生涯の目標を再考していると、「幸せ」という言葉に妙な違和感を受けるのはなぜだ。

「止まれ」

ぼす、とジェリコはアヤジの背中にぶつかってしまった。つい前

を見るのがおろそかになってしまったようである。

「何が――」

アヤジは手でジェリコの声を制する。ただならぬ様子である。

「仕方が無い、道を外れよう、左に向かう」

言うなりアヤジは左手にある雑貨や服を売っている露天の隣にある細い通りに脚を向けた。一人人がようやく通れそうなほど狭い道だ。おまけに見通しも悪い。距離は二十数メートルほど続き、ここを出れば地理的に別の大きな通りに出るはずだ。

一行は道に足を踏み入れ、日陰に体を隠す。そして早歩きで露天の隙間を縫って歩く。

人気の少ない埃っぽい道を進みながらジェリコはアヤジが何を見たのか尋ねた。

「三十メートルほど先に連中がいた。やはり続々とベルガモに進入してきているようだな」

ジェリコを探しているのだろう。見つければ一巻の終わりである。そういえば、ジェリコは連中のことを詳しく知らない。普段どういったことをやり、何を生業としているのか。情報はこの上ない武器である。知る、知らないでは天と地の差がある。

だが、今はそんな野暮なことをアヤジに尋ねる暇は無い。まずは連中から離れることが先決である。

「エメ」

残り数メートル程まで歩いたところでアヤジが短くエメの名を呟く。するとエメは短くヒュ、と口笛を吹いた。

「そうか」

口笛を聞いたアヤジは安堵の息を漏らし、歩を止めた。ジェリコは二人の一連のやり取りにいつにない興味と疑問が湧いてしまった。しかし疑問を尋ねる前に、アヤジが先に口を開いた。

「先ほどの連中は撒いた。こちらに接近してくる気配も無い。ひとまず安心だ。このまま通りに出て南に向かい、ベルガモを抜ける。抜けるまでは雑談は禁止だ。エメは適当な頃に知らせてくれ」

こちらが口を挟む間もなく、アヤジは歩き出す。ジェリコは展開の変化の速さに慣れず、つい呆けてしまっていた。

「……」

突然、後ろから肩を叩かれた。振り向くとエメがアヤジの方を顎でしゃくった。早く行けということか。アヤジはすでに十歩ほど先にいる。

ジェリコは早歩きでアヤジの後を追った。アヤジは時折後ろを振り返りながら歩いている。

「遅れるなよ」

ジェリコはその言葉に頷くと、再びアヤジの背中を追う形をとった。

大通りに出た一行は、止まることなく歩みを続けた。流れる人の波をするすると抜け、ベルガモの町を渡っていく。時折エメが口笛を吹いていたが、とくにアヤジは振り向いたり返事をしたりしなかった。一体エメはなにをしているのか。

そして歩き始めて一時間くらい経つと、街の出口が見えてきた。門の向こうは緑の背の低い草が広がるなだらか大地で、その中に道が一本続いている。あれを突き進んでいくと南の港町、モンツアへとたどり着くのだ。

関所の周りには人がたくさん溜まっており、馬車を引き連れている商人が荷物を検査されたり、貴族が門番と何やら話し込んでいたりしている。

そんないつも通りの景色を眺めながら、逃げるようにジェリコ達は門を通って行った。思わず振り返って門を見つめてしまう。

——ついに、ベルガモを出た。

ラ・メールを出てからは、本当にあつという間だった。気がつけば数年前に通った以来目にしていなかった門が目の前にある。ジェリコのベルガモでの生活もあつという間だった。あつという間の、満たされた日々だった。

「感傷に浸るなと言ったはずだ」

そんな走馬灯のように流れる淡い懐かしさを無碍に引き裂いたのは言うまでもない。ジェリコは瞬時に現実に戻されると、目を閉じ、そしてベルガモに背を向けた。そしてアヤジを上目遣いに睨みつける。文句の一つでも言ってやりたいが、堪えるしかない。

「気持ちとは分らないでもないが、現実をよく見る。死ねば、帰るとすらできなくなるぞ」

もう少し間接的な言い方はできないのだろうか。アヤジはいつも単刀直入すぎる。国民性の違いだろうか。

アヤジは草原の向こうを眺めながら言葉を続ける。

「ここからしばらくは見通しが利くから自由に歩いていいぞ。黙る必要も無い。むしろ尋ねることが山ほどあるはずだろうからな」

その通りだった。先ほど見たエメとの謎のやり取りや連中に関する事。あとアヤジの異様な身体能力。その他にもこれからどこへ行って何をするのかを聞く必要がある。

「共に旅をする以上、共有できる情報は共有した方がいいからな」

そういうとアヤジは足を踏み出した。釣られてジェリコも歩き出す。そしてアヤジの隣まで歩くと、アヤジを見上げて尋ねた。

「なら質問。二人とも、なんだかおかしな力を持っているようだけど、それは一体何なの？」

瞬間、アヤジから鋭い目で見下された。早速地雷を踏んでしまったか。

アヤジは一度ジェリコを見下した後、すぐに視線を前方に戻した。

「それは核心を突く質問だ。いいだろう。隠す必要もあるまい」

アヤジはチラリと横目でエメを見る。エメは無表情にアヤジを見ていた。

そしてアヤジは再び遠くを見つめる。うつすらと目を細め、どこか気だるそうな雰囲気だった。

「俺とエメは海を隔てた東の島国、ホイナという国から来た。そこで田畑を耕して暮らしていたのだが、普通の家系ではなくてな。俺

達の家系はいわゆる呪われた家系だった。おい、そんな目で見るな」
知らぬうちに疑いの眼差しを浴びせていたのだろう。ジェリコは
思わずごめん、と謝った。

アヤジは話を続ける。

「俺が住んでいた地域では、ガミーヌという獣神を土地神として祀
っているんだが、大昔の先祖が土地神にちよっかいを出したらしい
その結果、末代まで呪われる羽目になったのさ。なぜ先祖が神にち
よっかいを出したのかは知らない。興味も無いしな」

俄かに信じられない話だが、本当なのだろう。アヤジは『嘘』を
一言も言っていない。

「で、呪いの概要はこうだ。ガミーヌの使いという化物が俺達の家
族すべてに憑いて、その化物に取り殺されるというものだ」

しかし、アヤジは生きている。

「化物はすぐに俺達を捕って食うわけじゃない。じつくりと精神を
蝕みながらゆつくりと殺す。化物の精神力で人間の精神を排除して
いくそうだ。聞いた話によると五日で死ねるらしい。当然、死にた
くない先祖達はこの化物をどうにかしようとした。だが、ついに除
霊する方法を見つけられなかったらしい。代わりに、化物からの一
方的な精神攻撃を中和、同調し、共存する方法を編み出した」

アヤジはそれがこれだ、といって胸元を開いた。そこには無骨な
丸い石の首飾りがあった。よく見ると小指の爪ほどの大きさの青い
石と、緑色の石が埋め込まれている。

「この首飾りは化物から送られてくる一方的な精神波を人間が耐え
られるように変換する機能と、化物と俺の精神の一部を同化させる
機能を持っている。おかげで死神と共に生きることによって、人間
離れた力を使えるようになった」

まったくもって信じられる話ではないが、嘘はついていない。そ
れに自分の身に起こったこともある。アヤジの言うことは本当だろ
う。

「もちろんエメもガミーヌの使いが憑いている。ただ」

アヤジはそこで言葉を切ると、無念そうな表情を浮かべる。

「エメの場合は首飾りを身に付けるのが遅かったせいで、後遺症が残ってしまった。エメは、精神波の影響で言葉を話せなくなった」

思わずジェリコはエメを見つめた。エメは感情を悟らせない相変わらずの無表情でジェリコを見つめ返した。

「エメは言葉を理解できるが話すことはできない。哀しいことだ」

彼女が無口なのは話せないからだだったのか。そういうことならエメがいつも無表情なのも理解できる。長い間言葉を喋らない生活を送れば無表情になるのも当然だ。

アヤジはさらに説明を続ける。

「俺とエメはこの呪われた血を清めるために諸国を旅した。いろんな人間に会ったさ。血生臭い事態にもなった。だが呪いを解く方法は見つからない。先祖とまったく一緒の成果しか上げれない。もうだめかと思っただんなときさ。あらゆる願いを叶える術があるという話を聞いたのは」

ジェリコは思わず身震いした。術の話となるとどうも体が強張ってしまう。

「すぐに調べ始めたよ。色々な人間に会いに行った。民衆だけじゃなく、錬金術師や魔術師、はたまた政治家とかな」

一体どうやってそんな人たちと会合することができたのか検討も付かないが、なにか横の繋がりがあるのかもしれない。

「その結果がこれだ。後は酒場で話したことに繋がる。多少脱線したが、俺とエメのことは分かっただろう。こんな首輪がないとまともな生活ができないなんて俺は嫌だ。普通に暮らしたい。俺とエメが秘法を求める理由はそれだけだ」

首飾りを睨みながらアヤジは言い切ると、不機嫌そうな顔で遠くを見つめる。

ふとエメを見ると、同意するように深く頷いていた。そりゃそうだろう。自分の言葉を失ったのだ。さぞ辛い日々を過ごしたに違いない。

そういえば、そのガミーヌの使いから受けた恩恵である特殊能力とはどういったものなのだろう。ジェリコは興味を持った。

「ちよつと興味があるんだけど、そのガ——」

ヒュウウウツ！

突然、エメの鋭い口笛が草原に響いた。警戒しているような、力強い音だった。

「チ、追っ手か」

アヤジがすぐさま反応して振り返る。発信源のエメは今まで歩いてきたあぜ道を睨み続けている。今更だが、エメの口笛は警笛の役目を担っているようだ。口笛の音で意味合いが違ふようだが、ジェリコは分らない。

「隠れそんな場所はないか。仕方ない、とりあえず横にそれるぞ」
そういうとアヤジはあぜ道はずれ、草原へと足を踏み入れる。

しばらく走っていると小高い丘を発見し、とりあえずその陰に隠れることにした。ちなみにあぜ道からはそう遠くない。一、二分歩けばあぜ道へ戻れる距離だ。

アヤジは丘の上から顔だけを出し、あぜ道に睨みを利かせている。ついジェリコも丘の上に上り、あぜ道を見ようとした。

「馬鹿者、お前はエメから離れるな。エメ頼む」

アヤジは丘から顔を出そうとしたジェリコを小さく怒鳴る。アヤジの剣幕に負けてジェリコはしぶしぶ丘から降りた。

そこまで警戒しなくてもいいと思うのはやはりこういう事態に慣れていないからだろうか。ジェリコも目は良い方だ。目視の役に立てると思ったのだが。

「……」

腕を組んでため息をついていると、突然後ろに気配を察した。振り向くとエメが立っていた。エメはジェリコと目が合うと、無言で肩に手を置いてきた。動くな、ということだろうか。

「……！」

直後、エメは眉を吊り上げ視線をアヤジの方、あぜ道の方へ向け

ると、ヒュイ、と鳥の鳴き声のような口笛を吹いた。なんというか、エメには失礼だが実に不気味な動きである。

「あの二人か」

アヤジが街道の方を向いたまま呟いた。どうやら目標を発見したらしい。

それにしてもなぜエメはこんなにも離れた距離から敵の気配を察知することができるのか。もしかするとこれがエメの「能力」なのかもしれない。

「こちらに気づいていな——ち、いるのか」

アヤジの舌打ちを聞いた瞬間、全身に鳥肌が立った。自分の命を狙うものが、こちらに向かってくる……。どくりと、心臓が一際高鳴った。

「迷うことなくこちらに向かってくるな。どうやら最初からばれていたらしい」

距離的にはこちらが隠れてから向こうが現れたはずだが、それでも迷うことなく来るということは、まさかエメと同様の力を持っているのか。

「エメ、ジェリコの傍に居ろ。俺一人で片付ける」

「な、一人で行くなんて無茶だろ」

一人で行こうとするアヤジに手を伸ばそうとすると、エメに押さえられる。エメは厳しい表情でジェリコを見つめており、いつもの無言の威圧感でジェリコを制する。

「なあに。なにも殺し合いをしに行くわけじゃない。話し合いをしにいくだけだ」

アヤジはそういうと小高い丘を降りていく。姿が消え、草原を歩く音だけが耳に入る。

もし万が一向こうが攻撃を仕掛けてきたらどうするのだろうか。あまりに無策といわざるを得ない。

しかしエメは無言でアヤジが歩いていった方を見つめているばかり。アヤジを信じきっているのだろうか。

ほどなくしてアヤジの足音が止まった。同時にいつの間にか近づいてきた複数の足音も止まる。ジェリコの心臓は緊張でバカみたいに激しく躍動していた。

「一応、用件を聞こう」

「あのね、ここまで来てそんなこといちいち聞くわけ？」

あのね……？それにこの声、聞いたことがあるような。

「それもそうだ。ではお引取り願おう。殺し合いは好きじゃない」

「生憎こちらは殺し合いが好きなのよ。覚悟してよね」

不穏な気配が立ち始め始める。いつの間にかエメの手が離れていった。

「そうか。ならば君達は殺される覚悟があるのかな？」

エメは丘の上に上り始めていた。アヤジと合流するつもりか。

「あら、お仲間も出てきたわね。どうやらやる気満々のようじゃない」

「チ、来るなと言ったのに」

アヤジの舌打ちが聞こえる。

「でもこれで気兼ねなく戦えるわね。二対一じゃ公平じゃないものね」

「逃げるのなら今のうちだ。後悔するんじゃないぞ、お嬢さん」

「あ、あの子は！」

いよいよ戦いが始まるという時、気づいたらジェリコは丘の上に顔を出していた。我ながら自分の欲望に忠実すぎるというかなんというか。おまけに見覚えのある顔を見て声を出す始末。自殺行為としか言いようが無い。

「馬鹿者！隠れろ！」

アヤジの怒号が草原に響く。

「やはりそこにいたわね、ジェリコ・パプーロ！」

あの少女の声がジェリコの耳に刺さる。

「ジェリコですって！？」

そして最後に驚愕の声が辺りを制した。愕然とした声に思わず全

員がそちらに首を向ける。

少女の隣には一人の旅人らしき女性が立っている。つばの短い帽子を被り、くすんだ外套と服を身に纏っている。特徴的なのはその驚きに満ちた顔だ。金髪で左目だけを隠すような髪形をしている。何も知らない人間ならば特に意識しない点だが、今のジェリコにとってそれは決定的だった。

「フォレンティーナ！」

丘の上からその名を叫ぶ。今度はジェリコの声に全員の視線が集まった。

「まさかあいつアルの知り合い？」

少女が驚きのあまり目を見開く。

「エメ、様子を見よう」

アヤジとエメはじつと事の成り行きを見ている。

「ジェリコ、あなた一体……！？いや、それよりフェリシア、あなたが探していた人物ってジェリコだったの？」

フォレンティーナはフェリシアという少女を驚きの顔で見つめる。フェリシアは苦虫を噛みつぶしたような顔で掃き捨てるように答える。

「そうよ。私の研究にはあいつの血が必要なのよ。アル、顔見知りだからって容赦しないでよ」

「断るわ」

フォレンティーナは迷うことなく言い放った。予想外だったのか、フェリシアは虚を突かれたように、

「ちょっと、どうしてよ？」

そう呟いた。

フェリシアの言葉にフォレンティーナは冷静に返す。

「あなたとの契約はもう切れていたはず。私はベルガモまでの案内役だったのだから。これ以上あなたの命に従う義務はない」

「なら今ここで新たに契約するわ。そしてこの二人組みを殺し、ジェリコの血を手に入れるために手伝ってよ」

「その契約、断るわ。私はジェリコを殺せないもの」

「ぐぐ……」

冷静なフォレンティーナの言葉に、フェリシアはたじたと感じた感じである。フォレンティーナを憎憎しげに睨んだ後、その禍々しい目はアヤジとエメ、そしてジェリコに向けられた。

「さて、どうする？」

言ったのはアヤジだ。腕を組み、面白いものでも見るような瞳でフェリシアを見下している。

フェリシアはしばらく下を向いていたが、その内じろりとアヤジを睨むと、

「今回は、見逃してやるわ……」

三対一、ジェリコを含めれば四対一か。さすがに不利と判断したのでらう、フェリシアは戦いを拒否した。

「よかるう。ところで君はこれからどうするつもりだ？このまま帰るのか？」

「ええ帰るわよ。これ以上ここにいてもしょうがないし」

「だとすると、君は命を狙われる可能性があるぞ」

「なんですって」

フェリシアはアヤジの言葉に食らい付く。

「どういう意味よ」

「簡単なことだ。君もジェリコの血を狙うということは、その筋に覚えがあるものだらう。ということは君以外の同業者がどういう行動をとって情報を集めているか分かるな？つまりはそういうことだ。連中は常に情報を収集しており、情報源は目標に最も近づいた人物だ。今の君がまさにそれだ。そして連中は用済みになったものを生かすほど優しくはない」

つまり、連中に捕まり、ジェリコに関する情報をさんざ吐かされた後、ごみを捨てるように殺される可能性があるということだ。

フェリシアは何かを思い出したようにはっとすると、気まずそうに俯く。

「そうだったわ。魔術師どもはどいつもこいつも質の悪い奴等ばかりだったわね」

「十字教会の調査団もいるぞ。どちらに捕まってもろくな目に遭わんだろう」

十字教会とは世界各国にある教会のことだ。アヤジは調査団と言っていたが、ジェリコはそれについて何も知らない。またも聞きえない単語が出てきた。

フェリシアは、うう、と頭を抱え悩んでいるようだ。どうすればいいのか。逃げれば連中に捕まり、戦うこともできない。八方塞がりではないか、と。

そんなフェリシアに助け舟を出したのはアヤジだった。

「随分悩んでいるようだ、君には選択肢がある」

アヤジの言葉に、フェリシアは顔を上げる。その目には希望を貪るうとする貪欲な光が宿っていた。アヤジはその目を見つめると、至って真面目な顔で話を続ける。

「君には二つの道がある。一つは我々から逃げることに。そしてもう一つは我々と共に行くこと。この二つだ」

「ちょ、ちよつと待ってよ！」

ジェリコはいい加減我慢できず、四人のところまで走って行った。合流するなりフェリシアに実に凶悪な目で睨まれるが、この際無視だ。

「この子と一緒にいくって本気？」

ジェリコはアヤジに尋ねる。

「そうだが？」

アヤジは即答する。ジェリコはアヤジの反応に苛立った。

「僕を殺そうとした人間と一緒に旅するって、おかしくない!？」

「彼女はもうお前を殺すことはできない。自分の命は大切だからな」「いや、確かに僕を殺そうとしないだろうけど、その、最終的に術を發動したときに、願いを叶えることができるのは――」

「秘法の力は未だ未知数だ」

アヤジはジェリコの言葉を遮る。

「故に俺はお前の血を求めず、別の可能性を追求しようとしている。それと一緒に。願望を叶えてくれるのは秘法を発動した者だけでない。この世全ての人間かもしれない。何より彼女が生き延びるには我々と一緒に行動する他あるまい。一人より二人、二人より三人。仲間が多い方が心強い」

確かに、その通りだ。アヤジとエメの目を盗んでジェリコを殺そうとするのは難しいだろう。そして連中の追っ手から生き延びるためにもアヤジとエメがいた方が心強い。そうなると益々ジェリコを殺す必要がなくなる。アヤジの言うように秘術が万人に作用される可能性もあるのだ。

「いいわ。あんたたちと一緒に行く」

「え？」

フェリシアはあっさりと決断した。そして不機嫌そうにアヤジを見上げると、

「あんたの言うとおり、あたしは死にたくないから。それにあたしは秘法なんかあまり興味は無いわ。秘法はあたしにとって副産物よ」

フェリシアは視線をジェリコに変え、

「あたしが興味あるのはあんたよ。あんたの体そのものに興味がある。魔力を無尽蔵に生み出すその体に」

「魔力を生み出す、体？」

ジェリコがオウム返しに言うと、
「待て話はそこまでだ。そんなこといつでもできるだろう。次に君はどうする」

アヤジはジェリコとフェリシアを黙らせた。そして話題を逸らせるようにフォレンティーナに焦点を当てる。

「もともと寄る辺の無い身。しばらくあなたたちに同行させてもらおうかしら」

「よかるう。話は決まった。ではこれからこの五人で旅をする。俺

の名はアヤジ。こちらは妹のエメだ。故あって秘法を目指している。君は？」

アヤジは再びフォレンティーナを見やる。

「私はフォレンティーナ・アルジエント。何でも屋をしているわ。最近の仕事はフェリシアの護衛。よろしく」

そう言々とフォレンティーナは微笑んだ。青い瞳と金髪がきらりと輝いた。

「……フェリシア・アンドレーよ。とりあえずよろしく」

フェリシアは腕を組み、不機嫌そうに言い放った。

「えーと、僕は——」

『知ってる』

一斉に言われ、思わずたじろいだジェリコであった。

#15・旅立ち part 2

ひよんなことから道連れが増えた一行は、ベルガモからモンツァへと続くハルバー街道を歩く。

道すがら天気もよく風も穏やかで、草原に横になれば気持ちよく眠れそうなほどのどかだ。

しかし、牧歌的な風景に反ようにジェリコ達は血生臭い団体なのが皮肉ではある。

前を歩くアヤジと最後尾を歩くエメはいつものように無言。フェリシアはつまらなさそうにあくびをし、時折ジェリコの方を睨んだりアヤジの背中を憎憎しげに見つめている。

そして久しぶりに穏やかな気持ちになっているジェリコはフォレンティーナと話をしていて。ジェリコが孤児院を飛び出して以来である。五年ぶりほどの再会なのだ。心が浮き立たない方がむしろおかしいだろう。

フォレンティーナの話によると、ジェリコが孤児院を飛び出した後、程なくしてフォレンティーナも孤児院を出たらしい。そして彼女を皮切りに、他の仲間達も続々と孤児院を去ったそう。

その後独り身になったフォレンティーナは、職や宿を見つけることもせずその日暮らしを始めた。先も言ったが、何でも屋だ。その仕事内容はジェリコの脳では計り知れないが、色々なことをしてきたのだと思う。何せフェリシアなんて恐ろしい人物に雇われていたのだ。きっと手を朱に染める仕事もあったに違いない。ベルガモでのんきに暮らしていたジェリコであれば、今のフォレンティーナを見たら腰を抜かして驚いただろうが、幸いそういう裏事情にはある程度免疫が付いていたためにさして驚きはしなかった。

孤児院に居たときから彼女にはどこか影があるような人間だったのだ。その影響でこういう生活をしているのならそうなのだろう、と、ジェリコは納得していた。人のことを言える義理でもないし。

「ところでモンツアへ着いたらどうするの？」

暇をもてあましているフェリシアがアヤジに尋ねた。アヤジはいつものように背を向けたまま、抑揚のない声で答える。

「ジェリコはある人物のところへ連れて行き、能力が本物かどうかを確認する。本物ならばその後ロンドンデバリーへ行く」

アヤジの言葉にジェリコは驚愕した。

「まさか、僕はこの件に関係無い人間なのっ!？」

ここまで引つ張ってきてそれは無いだろう!いや、むしろそうであつてほしいのだが、ここまで人の生活をかき乱した責任をどうするつもりなのだ……。

ジェリコの悲鳴じみた声にアヤジは振り返ると、静かに首を振った。

「十中八九お前は本物だろう。お前の出生、周辺の環境を散々調べて裏づけは取れている。しかし、念のためだ」

アヤジは一度言葉区切ると、こちらに振り向いた。

「安心しろ。万が一も無いだろうが、お前が関係なかったら晴れて自由の身だ。今までどおり酒場で絵でも描けばいい」

「なに!」

アヤジの人を小馬鹿にしたような態度に激昂したジェリコはアヤジに迫ろうとした。

——が、それは叶わなかった。

「……」

音も無くジェリコの隣にやって来たエメが、ジェリコの鼻先に手をかざしていた。反射的にジェリコはエメを睨みつけるが、エメの顔を見て一気に熱が冷めた。なぜか哀しそうな顔をしているのである。無表情な彼女に人間的な顔をされると、調子が狂ってしまう。

沈黙したジェリコにアヤジは再び声をかける。

「俺の言葉が聞こえなかったのか? 万が一も無いと言っただろう。心配は要らない、お前は本物だよ」

そう言つてアヤジは前を向く。いけ好かない男だ。なんでこんな男

に命を守らなければならないのか。ジェリコは頭が痛くなった。
「それにしてもジェリコがそんな大げさな儀式に必要なんで、思いもよらなかったわ」

至つてのんきなことを言うフォレンティナ。

「できれば思いもよらないままにして欲しいよ」

ジェリコはぶっきらぼうに答えると、フン、と鼻を鳴らす。

「ただどうして再会できたのは、その不幸な運命のおかげなんでしょうね。奇妙なものね」

「奇妙すぎて僕は困ってるよ」

「んんっ！あー！もうっ！」

前を歩くフェリシアは突然立ち止まり、こちらを振り向くと咆哮のような声を上げた。あまりに唐突だったので心臓が止まるかと思つたジェリコである。あのアヤジでさえ、目を開いてフェリシアを見つめている。まったく、こんなくだらないことで細くなつた寿命を脅かさないでもらいたい。

フェリシアは激昂しており射殺するような視線をジェリコにこれでもかと浴びせていた。ふーふーと肩で荒い呼吸をし、噴火寸前の火山のようでもある。

ジェリコはフェリシアのそのいきりたつた姿を見て戸惑いを隠せない。

「ど、どうしたの？」

「あのね、どうしたの、じゃないわよバカー！」

ジェリコは至つて自然な感想を述べたのだが、彼女には気に入らなかつたらしい。ジェリコにはフェリシアが怒鳴る理由がよく分からない。

「二人ともちんたらくだらない話をしてんじゃないわよ！とくにあなた！」

びしっ、と力いっぱい細い人差し指をジェリコに向けるフェリシア。
ア。

「あんた自分が今どんな状況なのか分かつてる？命を狙われてんの

よ、命を。いつ誰にどのようなにして首を取られるか分からないつてのに悠長に世間話しをしてんじゃないわよ！その緊張感の無さに虫唾が走るわ！」

そこまで一気に喋るとフェリシアは多少すっきりしたのか、呼吸がだいぶ落ち着いてきた。

「なるほど。それは一理ある」

そんな言葉が最前列の方から聞こえてきた。思わずジェリコは顔をしかめてしまう。

「俺も前から思っていたのだが、確かに彼女が言うように、お前は自分の立場をよく分かっていないようだ。さて、どうしたものか……。そうだ、分かり易いようにお前の存在が今どれくらいの価値を持っているか、教えてやろう」

アヤジの人を人としてみない口調に毎度のことながらジェリコは苛立ちを覚えた。しかし今自分の感情を下手に爆発させると收拾が付かない事態に陥りそうなので、唾液と一緒に無理やり飲み込んだ。「そんなに言うなら、教えてよ」

ジェリコはくすぶっている怒りを静めながら、そう答えた。アヤジは待っていたぞといわんばかりの顔で返答をする。

「よかるう。取引する相手にもよるだろうが、お前を売りに出せば最低でも金貨七百枚はするだろう」

「な、七百!?」

あまりに途方も無い金額を提示されたため、ジェリコは卒倒しそうになった。

金貨七百枚なんて、頭がおかしいのではないのか。国が動くような額ではないか。

「実際には、お前の存在価値はあまりにも未知数すぎて値段なんぞ付けられないが、もしつけるとすればそのくらいに相当するはずだ」

「ふーん七百か。あたしは八百七十くらいと見てただけだな」

フェリシアが顎をさすりながら恐ろしいことを言う。

「七百も八百も大局的に見れば大して変わらんだろう。俺が言いた

いのは、それだけ馬鹿みたいな金が軽くなるほどの存在だと言いたいのだ。分かったか」

ジェリコは深く頷いた。自分が一体どのような立場に居るのか、改めて理解した。それだけの価値を見出す自分が一瞬誇らしげに感じたが、それはあまりにも寂しいものだ。求められているのはジェリコという意思を持った人間ではなく、ただの体なのだから。

「話は済んだな。では行くぞ」

アヤジは俯いたジェリコを満足げに見ると、再び街道を歩き出した。アヤジが歩き出すにつれて、周りも動き出す。

「どうしたのジェリコ、行くわよ」

「あ、うん……」

フォレンティーナに促されてようやく一步を踏み出す。

その足取りは重く、のしりのしりと足を地面から引き剥がしていくような歩き辛さがあつた。

先ほどのアヤジの言葉が予想以上に堪えるものだったのだ。その言葉を考えれば考えるほど、ジェリコが存在が空しくなる。肉体の価値ばかりが先行し、精神が追いついていないような感じ。そのせいか、妙に体がギクシャクしてしまう。いつもならこんな時に絵を描いて心を落ち着かせるのだが、残念ながらそんな暇はこれっぽちも無い。

ジェリコは空を見上げる。雲ひとつ無いからっぽの空が、世界を包んでいる。その光景が無性に腹立たしく、思わず目を閉じた。

「……」

ジェリコが呆けていると後ろから肩をたたかれた。振り返らずとも分かる。エメだろう。早く行けという意味表示だ。

「……」

ジェリコが前を歩く三人に歩調を合わせようと足を踏み出そうとしたが、それは叶わなかった。ジェリコはエメに肩を掴まれたままで歩くことができないのだ。

「ちよっと、エメ。どうしたんだよ」

ジェリコは理由を聞こうと後ろを向く。そしてエメの顔を見て眉をひそめた。

「……」

エメはいつもの無表情ではなく、目を細め、黒真珠のような瞳を左右に動かして明らかに警戒している様子だった。ただならぬ気配にジェリコの体が強張る。

「まさか——」

「……」

敵、という言葉のエメの人差し指で押さえられる。エメの細い指が唇に触れてどきりとしたが、今はそんなことはどうでもいい。今までに無い状況である。

前を歩く三人の姿がどんどん遠くなっていく。ただの一度も振り返ることも無く、街道を歩いて行く。

おかしい。まず歩く速度と小さくなる姿の比率がおかしい。空間が歪んでいるかのように、あっという間に三人の姿が消えた。

ジェリコの目でも分かるような異常事態。仲間は言葉の喋れないエメという極めて危険な状況である。意思疎通ができないものと二人きりなんて、まずいことこの上ない。

「……！」

ぐわしっ！

何を思ったか、突然エメに抱きしめられた。わけのわからない展開にジェリコは頭が付いていけない。

しゅっ。

そして次の瞬間、ジェリコの胸元を何かが掠めていった。横一に割れた服を見てジェリコは目を見開いた。

「なんだこれ！」

「……！」

ジェリコが叫ぶと同時に、エメはジェリコを抱いたまま街道を走り出した。

——同時に、

ひ
ゆ
ひ
ゆ
ひ
ゆ
ひ
ゆ
！

無数の何かかが後方から飛んで来た。音と先ほどの攻撃から察するに、それはナイフのように鋭利なものだろう。エメが走る速度が少しだけ上がった。

ひ
ゆ
ひ
ゆ
ひ
ゆ
ひ
ゆ
！

攻撃は止むことが無い。ジェリコはエメを抱いたまま、うねうねと蛇行するように走る。走り辛いつたらありやしないが、一人で走つたら一瞬のうちにずたずたになるだろうことは明らかだった。エメがまだ見ぬ敵の攻撃を的確にかわすことによつて生き長らえているのだから。

なぜエメは敵の奇襲を読み、かわすことができるのかまったく理解できないが、とにかく今はエメに体を任せる他に手が無い。ジェリコは自分のあまりの無力さと、現実の急展開さに頭が痛くなった。

ひゅ、ひゅ……。

しばらくがむしゃらに走り続けていると敵の攻撃が止んだ。

止んだと同時にどういっわけかエメも足を止める。

「な、止まったらまずいんじゃない……」

物申そうとしたジェリコを、エメは両手でジェリコの両目を押さえつけることによって止めた。先ほどから一体何なのだ。誰かエメの行動を説明してくれ！

⌈
⋮
⌋

目を隠され、エメに一層強く抱きしめられたかと思うと、背後に異様な気配を感じた。

全身の毛という毛が総立ち、突然真冬の山中に裸で投げ出されたような、突き刺さるような凄まじい殺気が全身を襲った。

「い、いね……」

目隠しされ辺りの景色は暗闇である。いや、それよりも今はこの嫌な寒気は何なのだ。エメはどうした。このありえない気配の中何とも無いのか。

ジェリコはがたがた震えながらそのままエメに身を任せる。今の

ジェリコでは走っていたときよりも役に立たない。尋常ではないのだ。この気配。今まで自分が感じたことの無い殺気。理性ではなく本能的に危機感を感じている。とにかくエメという存在から離れたくなかった。離れたらジェリコはそのまま殺気に取り殺されるのではないかという恐怖があるからだ。

「ふぐ、おごあああつ」

藪から棒に後方から男の悲鳴が上がった。苦悶に満ちた、断末魔と呼ぶにふさわしい声。驚きで思わずジェリコは体を震わせる。

「……」

悲鳴が街道に響き渡った後、次第に殺気は収まっていった。地面に吸い取られるように、しゅうしゅうと音が聞こえてくるかのよう、濃密な負の空気だった。

気配が無くなると、ジェリコはようやく開放された。久しぶりの日差しに目が眩み、思わず顔をしかめる。

辺りの景色を確認すると、以前と変わらぬ平凡な街道が広がっている。どうやら空間の歪みは収まったようだ。

「……」

エメは無言でジェリコの前に立つと、先ほど攻撃を掠めた個所を丹念に調べた。

とくに大きな傷が無いところを確認した後、今度は断末魔が聞こえた方へと歩いていく。

エメが向かう先をよく見ると、遠くの方に黒っぽい人が横たわっているのが見えた。興味が湧いたジェリコもエメの後ろを一緒に歩いていく。

——そして横たわった男を見てジェリコは後悔した。

男はフェリシアのように全身黒ずくめだった。顔に皺が入り始めている辺り、それなりに年を重ねているようである。察するに、空間の歪みはこの男が原因だったのだらう。どこの誰かは知らないが、この惨状を見る限り、もう襲ってくることは無いだらう。

何よりすごいのが顔だ。元の原型が無いのである。恐怖に顔が歪

んでいるなんてものではない。赤黒くなった顔の筋肉がすべて引きつり、白目をむき、涙や鼻水、涎まで流し、拳句の果てには失禁しているのだ。

「何があっただろう……」

ジェリコは身震いしながら先ほどの殺気を思い出した。あれに当てられていたらジェリコも発狂してこうなっていたかもしれない。

そしてエメはというと、男の化物じみた形相などお構いなく、首の辺りの脈を取っていた。正直、ピクリとも動かないところを見る限り、生きているようには見えないが……。

「死んでる？」

念のため尋ねてみると、エメはこちらを振り向きこくりと頷いた。エメの端正な顔と男の悲惨な顔が妙な対比になり、この滑稽さを絵に描いたら面白そうだ、と場違いながらもジェリコは思った。

エメは男の検死を終えると立ち上がり、いつまでも死体を見続けるジェリコに街道を歩き始めるよう促す。

「エメが、やったの？」

ジェリコはぽつりと決定的なことをエメに訊いた。刺客が死に、自分たちが生きているということは答えは一つだ。にも関わらず、こんなことを尋ねるということはジェリコはまだ戦い慣れていないのだろう。

死体を見るのは初めてではない。しかしこんな変死体を見るのは初めてだ。数分間とはいえ、ありえない状況にも陥った。脳の一部が麻痺しているのかもしれない。

「……」

ジェリコはエメの黒い瞳を見つめた。エメはまったく表情を変えず、視線を交える。何も見ていないような、すべてを見透かしているかのように透明な視線。

「ごめん。なんでもない。助けてくれてありがとう」

ジェリコはそう言うと、アヤジ達が歩いていった方向へ足を向けた。これ以上追求するのはなんだか違う気がする。少なくともジェ

リコがとやかく言う問題ではない気がする。

ジェリコは弱い。徹底的に守られなければならないほど。

背後でエメが動く気配がする。いつものようにジェリコの後ろを歩き始めたのだろう。エメがいなければ、ジェリコはすでに死んでいるのだ。エメに文句を垂れるのはあまりにもお門違いである。

ふと前方を見ると、見慣れた人間の顔が見えた。

帽子を被っている美しい女性。三つ編みを揺らし、しかめっ面で腕を組んでいる少女。そして黒い幽鬼のような気配を放つ男。

ジェリコはこれからエメだけでなく、彼らにも助けられるのだろう。何度と無く。常に。

——強くなりたい。

今までに無い強い思いが、ジェリコの全身に纏わり付いていた。

16 ・旅立ち part 3

「ふむ、どうやら魔術師から攻撃を受けたようだ」

先ほど起こったことを説明すると、アヤジは顎をさすりながら呟いた。

「空間を歪ませる魔術師か。エメ、仕掛けられる前に気づかなかったのか？」

「……」

エメは首を横に振る。

「怪しい人間がいるのは知っていたが、まさか遠距離からこれほどの術を受けるとは思わなかったというわけか」

「……」

エメは頷く。

「分かった。とりあえず無事で何よりだ。これからは全員固まって歩こう。エメ、次からは索敵範囲に怪しい動きを捉えたらすぐに知らせろ」

「……」

エメが再び頷くのを見届けると、話は済んだとばかりにアヤジは歩き出そうとする。

「ちよっと待ってよ。魔術師って一体何者なの？説明位してよ」

いい加減疑問で頭が破裂しそうなジェリコはアヤジに問いかけた。アヤジはめんどくさそうにジェリコの方を向くと、

「歩きながらも構わんだろう？」

と、アヤジは再び歩き出した。続いてフォレンティーナ、フェリシア、ジェリコと続く。

「死ねばよかったのに」

ちらりと不気味な言葉を放ったのは他でもないフェリシアである。あまりに物騒なことをさりとて言うので、さすがのジェリコも少し頭にくる。

ジェリコはフェリシアを睨むと、

「フェリシア、あなた少し言葉を選んだら？流石に今のは酷いわよ」
フォレンティーナが一言。そのままフェリシアに並ぶ。

「なによアル。あたしがこの男の体が欲しいの知ってるでしょ？」
女の子に体が欲しいなんて言われると変な気持ちになりそうだが、
言ってくるのは自分の命を奪おうとした女である。さすがに変な気
にはなれそうになかった。

「確かにそうだけど、今は一緒に旅をしている仲間でしょ？そうい
うことは、心に仕舞っておくべきよ」

「あのね、うるさいわよアル。あたしに指図しないでくれる？」
フォレンティーナは相変わらず世話焼きのようだった。孤児院で
仲間と共に暴れまわっていた頃も、フォレンティーナは一步離れた
場所にいるような人物だった。おかげで何度助けられたことか。ジ
エリコもよくフォレンティーナに窘められた。

そんな懐かしい記憶がちらりと覗き、思わず微笑んだジェリコ。
それを目ざとく盗み見たフェリシアは、

「何にやついてんのよ、あんだ。薄気味悪いわね」

いちいち突つかかってくるフェリシアに、ジェリコもいい加減苛
立ってきた。

しかし、ここでフェリシアといがみ合うと精神的に負けていると
いうか、益々ジェリコは仕様が無い人物になってしまいう気がするの
でこらえる。

「ごめん。でも事実僕らは今仲間なわけ。あまり細かいことに突
つかからない方がいいんじゃない？体力の無駄遣いだよ」

「うぐっ……」

フェリシアは虚を突かれたように一瞬怯む。正答が帰ってくると
は思っていなかったらしい。

「あんたに諭されるなんて、あたしも焼きがまわったもんだわ」

鼻を鳴らしながらそっぽを向くと、そのままフェリシアは黙り込
んだ。フォレンティーナとジェリコは顔を見合わせると、二人して

肩をすくめるのだった。

「さて、魔術師について教えるとのことだが」

黙りこんでいたアヤジが大儀そうに口を開いた。そうそう、魔術師のことを尋ねていたのをフェリシアに横槍を入れられたのだった。「魔術師とは、文字通り魔術を行使する者のことだ。魔神を崇拜してその恩恵を得ようとか、実際に召喚して使役するとか色々ある。十字教会の兄弟とでも思えばいいさ」

「十字教会の兄弟？」

ジェリコはオウム返しする。

「そうだ。十字教会も表では綺麗な顔をしているが、裏じゃ怪しい集団が跋扈しているらしいぞ。騎士団の中には、怪しげな術を使うものもいると聞く」

ジェリコは教会お抱えの孤児院で幼い頃を過ごしてきたが、そこまで信心深くはなかった。

親代わりのセブロが修道女のくせに豪快というか、あまり教会の教えに忠実な人間ではなかったからだろう。神は見守るだけで助けてはくれない。人を救えるのは人だけだ、いつも言っていた。

ふと、以前話の中に出た、教会の調査団という単語が思い浮かんだ。ついでにこれも尋ねてみることにする。

「教会の調査団って何？」

ジェリコが尋ねると、アヤジは不機嫌な声で答えた。

「正しくは十字教会特例機関聖遺物研究係。通称調査団。今回の秘法の件とか、奴らが金の種にしている唯一神に関係ありそうなものを集めている連中だ。ちなみに特例機関はいくつかあって、俺が知っている限りでは聖遺物研究係、国家間安全保障係、経済監査係、異端監査執行係が存在する。どの機関も国家間を秘密裏に暗躍している。機関によっては魔術師や錬金術師、つまり俺達と争っている。奴らは常に隊で行動をしているから気をつけなければならない。囲まれたら一巻の終わりだからな」

教会の裏の面を垣間見たジェリコは、思わず顔をしかめた。どい

つもこいつも、外面だけは良い。虫唾が走るようだった。

そういえばセプロも言っていた。今の教会は腐っていると。孤児院を運営しているのは、守銭奴の教会から金を搾り出し、貧しい人たちに少しでもパンを恵んであげるためだからだと。

アヤジは話を続ける。

「十字教会と魔術師に本質的な違いは無い。違いがあるとすれば、組織の大きさとか社会的な認知の差とか、崇拜する存在の違いだろう。どちらも最終的な到達点は、世界の頂点に立つことだとか、己の欲望を満たすための集団だ。そう意味では錬金術師も該当するかな」

「ちよつと待つてよ！なんであたしが魔術師とか十字教会のキチガイどもと一緒にされないといけないの！？」

またまた横槍を入れたのは他でもない、フェリシアである。思わず全員の足が止まる。

振り向いたアヤジはフェリシアの怒号に驚いていた。だが驚いた原因は声ではなく、その内容らしい。

「やはり君は錬金術師だったか。魔術師めいた服装の割には、あの魔術師独特の匂いが感じられなかったから断言できなかったが。なるほど、護衛をつけていた理由はそれだったか」

「何よ文句あるの？誇り高きヴルトン・アンドレーの血を侮辱する奴は誰であろうと許さないわ」

いきり立つ猫のような殺気を放つフェリシアは、懷からナイフを取り出す。アヤジは無言で手を出し制すると、

「よせ。無駄な争いほどこの世でくだらないものはない。三元素の長老と呼ばれた者の血を引くのなら、もっと冷静になるべきではないか？」

「ぐっ……」

声を詰まらせたフェリシアはしばらくアヤジを睨んでいたが、結局あきらめたようにナイフをしまった。ナイフをどこに隠しているのか少し気になったジェリコである。

「しかしヴルトーンの血を引くものだとはな。当然構成真理は解けるのだろうか。」

「当たり前よ。あんなもの解けて当然よ」

「それは頼もしい。君を仲間にできて俺は幸運だったな」

「あのね、おだてたって何も出さないわよ」

いつものように腕を組んでいるフェリシアの頬が微妙に赤いのは気のせいだろうか。

「ところであんたは何者なのよ？さっきから十字教会とか錬金術、魔術にも詳しくそんな喋り方だけど」

フェリシアは鋭い目でアヤジを見つめる。その目は先ほどのように血走っておらず、アヤジの一挙一動を冷静に観察していた。

突然凄みの在る雰囲気を出したフェリシアをぼんやり見つめていたアヤジは、「とりあえず止まるのはまずい。歩こう」と全員を促した。

一人最前列を歩き出したアヤジは、いつものように背中では話し始めた。

「俺とエメは魔術師でもなければ錬金術師でもない。ましてや教会の犬でもない」

「なら何なのよ」

フェリシアの高圧的な言い方にも動じること無く、頑強な背中では語る。

「その小僧は知っているだろうが、俺とエメはホイナという東の国から来た。詳しいことは省くが、俺とエメは呪われた血筋でな。

生まれながらに化物が憑いている。この化物は憑いている人間を殺そうとするのだが、なんとか共存することができている」

「魔神のようなもの？」

「そうだな。ホイナでは霊鬼と呼んでいたが、この大陸で言う悪魔とか魔神と一緒にだろう」

「魔神と共存なんて並みの魔術師でもできないはずだけど、そんな奴と一緒に悪影響とか副作用は無いの？」

「副作用は無いが、恩恵はあるな。図らずも得てしまった呪われた力だが。そういう意味では魔術師に近い存在なのかも知れんな」

「それは何？」

フェリシアが尋ねると、アヤジは唐突に立ち止まった。何？と、思わず訝るフェリシア。

「見たいか」

振り向き様にやりとアヤジが笑う。そういえばアヤジのこんな顔を見たのは初めてだ。何やら不吉な予感がする。

「み、見せてみなさいよ」

予想外の不敵な笑みにたじろぎながらも、フェリシアは言い返す。
「ならば見せてやろう」

言うが早いか、アヤジは目を閉じた。

——次の瞬間、

「な、何よこいつ！」

フェリシアは叫びながら飛び退り、懷に手を伸ばす。反射的にナイフを出して身構えようとしているのか。傍らのフォレンティーナはジェリコをかばうような形でいつの間にか身構えていた。

ジェリコはというと、アヤジの背後に音も無く浮かび上がった異形に驚きと恐怖で固まっていた。体は凍りついたように動かないが、頭は異常に冴えているという実に奇妙な状態だった。

「これが、俺に憑いているヌイという化物だ」

アヤジはそういうと、再びにやりと口元を歪ませた。

アヤジの背後には半透明の物体が浮かんでいた。

身の丈は大の大人三人分くらい。六つ足の狼とでも言うのだろうか。全身は青く輝く魚の鱗のようなものに覆われ、岩のようにいかつい顔に対照的な赤い瞳が三つほど爛々とぎらついている。薄く開いた巨大な口からは灰色の牙が何本ものぞき、ジェリコなんぞ容易く食べられてしまいそうである。

「なんて存在感なの……。本物の魔神なんて初めて見たわ」

フェリシアが驚きとも感動ともつかない声を上げた。ジェリコと

しても右に同じである。何なのだこの化物は。はっきり言って恐ろしいのだが、どことなく神聖な感じがするのはなぜだろう。

「俺はこのヌイの力を借りて、常人ではありえない身体能力を得た。――いいところに岩があったな」

アヤジはそういうと、草原の中に転がっているジェリコの身長くらの大きさの岩に近づく。

そしてこんこんと扉を叩くように岩をこづく。

「通常ならこの通りだが、ヌイの力を借りれば」

こん、ぴしい。

アヤジは先ほどと全く同じようにこづいたのだが、岩には亀裂が入っていた。ジェリコやフェリシアだけでなく、冷静なフォレンテイーナでさえ驚きの表情を見せていた。

「岩に、ひびが」

感嘆の声を上げたのはフェリシア。その声に応えるように、アヤジは右手を振りかぶる。同時にヌイの右前足も振り上げられた。

「そして大振りに殴れば」

アヤジが右の正拳を岩に繰り出す。

ぼっがしゃああああ！

豪快な音と共に、岩は砕け散った。

「こうなる。これで大体分かっただろう？さあ行くぞ。無駄な足止めを食うわけにはいかん」

アヤジはさも当然という風に岩を一瞥すると、ヌイを消して再び街道を歩き出した。

ジェリコとしては、こんなものを目の前で見せ付けられた後だとなかなか現実に戻ってこれないのだが、フェリシアやフォレンテイーナはジェリコとはあまりに踏んできた場数が違うのか、多少驚いていたがすぐに歩き始めた。

「み、みんな驚かないの？」

思わず呟いてしまったジェリコに、

「驚いたわ。でも魔神の力を借りてるんだからこれくらい当然じゃ

ない？能力で言えば、さっきの空間を歪曲させる魔術師の方が上だ
と思うけど」

フェリシアは冷たく言い放った。フォレンティーナはというと、
「これほどの力を持つてしても望みが叶えられないなんて、ジェリ
コの潜在能力は一体どんなものなのかしら」

などと相変わらず冷静に判断していた。改めて感じたが、色々な
意味でジェリコは場違いだと思う。住む世界が違いすぎるだろう。
この先大丈夫だろうかと一抹の不安が胸をよぎる。

「……」

そして後ろから肩をたたかれる。いい加減慣れてしまった。ジェ
リコは右手を挙げて返事をする、前を歩く三人の後を追った。

#17・旅立ち part 4

大空が黄金に輝き始めても、一行は相変わらず歩き続けていた。黒く伸びる五つの影が草原になびき、大きさがでこぼこなところが今の一行を象徴しているようだ。

ベルガモからはすでにかなり歩いている。先の魔術師以来、刺客からの攻撃も受けず順調な旅路である。ちょうど日が沈むくらいにはベルガモとモンツアの間にある宿に到着するだろう。

「風が吹いてきたわね」

唐突にフォレンティーナが言った。確かにそうで、一時間くらい前から風が吹き始めている。ただっ広い草原ならではの風ではあるが、時折前髪が逆立つほどの突風が吹くことがある。大陸からの季節風なのかもしれない。

「雲も出てきている。宿に着く前に降られると面倒だ。少し急ぐぞ」
続いてアヤジはそういうと歩く速さを少し上げた。後ろに続くジェリコたちも同様に歩く。

この時不穏な気配をジェリコは感じ取っていた。いつもの直感である。この無作法に吹き付ける風と美しい空を隠そうとする暗澹とした雲に、どこか身震いするような気がジェリコに纏わり付いていた。ただ、エメが何も反応しないので取り越し苦労の可能性もあるが。

一行は風が吹き荒ぶハルバー街道を歩く。できることなら日が沈む前に宿に着きたいな、とジェリコは思っていた。

「見えてきたぞ」

前方からアヤジの声が聞こえてきた。どうやら宿の灯が見えたらしい。幸いまだ雨は降っていない。このまま無事に到着できそうだと思う。ジェリコはほっとため息をついた。流石に今日は歩き疲れ

た。ベルガモからほとんど休まず歩き続けでいい加減しんどかった一行は、間違いなく宿の明かりを見て一日の終わりを感じ取っただろう。

——しかし、

ヒュフイーーツ！

そんな気持ちは鳶の鳴き声のような口笛によって切り裂かれた。突然の警笛によって反射的に身構える。

「まさか、宿にいるというのか？」

アヤジがエメの方を振り返りながら言った。エメは険しい顔で頷く。

「数はどれくらいだ？」

アヤジの問いにエメは左手のひらを右手の人差し指と中指で叩いた。

「流石に数が多いな。どうするか」

「何があつたのですか？」

尋ねたのはフォレンティーナ。アヤジは難しい顔で答える。

「間の悪いことに、宿に調査団がいるようだ」

一同に不穏な空気が立ち込める。先ほど調査団については説明を受けていたので、事の重大さはジェリコにも分かった。

「僕たちが宿に来ることが分かつていたのかな」

「いや、それはないだろう」

アヤジはジェリコの言葉を否定する。

「調査団はわざわざ待ち伏せなんてしない。奴らは教会の者だとい、堂々と正面から当たってくるからな。今回は偶然鉢合わせただけだろう」

「で、何人いるのよ？」

言葉は乱暴だが、目は冷静なフェリシアが言った。

「エメが言うには十七人だ」

「十七人って、随分多いのね。十字教会と争ったことが無いから分からないけど、そんなもんなの？」

「こんなものだな。俺とエメは一度調査団と戦ったことがあるが、そのときも二十人くらいだった。聞くところによると、調査団は通常騎士団長二人以上とその配下によって構成されているらしい」

「やつかいね。ジェリコのことを直接知っているとは思えないけど、もし向こうがジェリコの、見た目を知っていたら確実に一悶着あるわね」

言いつつフェリシアは腕を組む。

「ああ。そうなればこちらはかなり不利だ。それに俺とエメがやりあったことのある調査団だと尚まずい。場合によっては調査団の中で俺とエメは手配されているかもしれないし、できるだけ接触は避けたいところだ」

「ち。今日は疲れたんだからベッドで休ませてよね」

フェリシアは憎まれ口を宿に向かって投げつけた。これに関してはジェリコも同感である。

それにしてもジェリコのお荷物感が半端ではない。相変わらず自分の役立たず加減には腹が立つ。おまけにどうしようもないのがさらに拍車をかける。しかし怒りのはけ口は無いので結局ため息をついて落ち着かせた。

アヤジもフェリシアのように腕を組んでしばらく考え込んでいたが、結論に至ったのか重い口をゆっくりと開く。

「今夜は野宿をするしかないだろう。道を外れて少し歩けば森がある。そこで火を焚こう」

フェリシアはわざとらしいほどの大きいため息をつく、うんざりした声で言った。

「やっぱそうよね……。まあ教会に因縁つけられるよりかましよね」そして再びため息をつく。本当に残念そうだった。そして何を思ったか、くりつとした猫目をぎろりと鋭く細めると、宿の方めがけて「ばかやろー！」と吼えたのだった。もちろん周りを警戒してぎりぎりの大声で、である。フェリシアらしいストレスの発散方法だった。

「三人も野宿に依存は無いな？まああるといつても強制させるが」
ジェリコ、フォレンティーナ、エメの三人もアヤジの言葉に頷く。
それしか道はないのだから強制云々は余計な一言である。アヤジの
ことだ、分かっているのに言っているのだろう。そういうところが
ジェリコは嫌いだった。

そのまま一行は街道を右に外れ、ひたすら草原を突き進んでいく。
数分歩くと前方に深い緑が視界に入った。それほど大きい森ではな
い。局地的な森である。

森に近づいてみると、木々の奥は思っているより暗かった。日が
落ちると真っ暗になるかもしれない。

そして一行は森に侵入する。草を掻き分けながら中腹辺りまで歩
くと、丁度日が落ちてしまった。

「暗いわね」

フォレンティーナがぼそりと言った。ジェリコの予想通り、森の
中は蒼い闇に包まれている。草の匂いも伴って全身が森に食われた
ようである。

「あそこが割りと開けているな」

アヤジが指差す先にはぎりぎり五人が座れそうな空間があった。
その空き地に立って周囲をよく見ると、地面に生えている草がへ
たれていた。ここは森に入ってきた旅人の溜まり場なのかもしれな
い。

「火を焚くか。薪を採ってくるからここで待っている」

そう言ってアヤジは森の奥へと姿を消した。一人だが心配しなく
ても無事に帰ってくるだろう。何せあの背中には巨大な化物を背負
っているのだから。ちよつとやさつとの事態ではアヤジは動じない
とジェリコは思っていた。

ジェリコは口から溜まりに溜まった疲れを吐き出しながら腰を下
ろす。固い地面とはいえ、立っているときより何倍も楽である。精
神はともかく、体は予想以上にくたびれていた。

ジェリコが一息ついていると、隣のフォレンティーナも腰を下ろ

した。次いでエメも座り込む。

あの口喧しいフェリシアはというと、

「……何してるの？」

思わずジェリコは呟いてしまった。

フェリシアは向こうの方で何やら草むしりをしていた。小ぶりなお尻をこちらに向けてごそごそと草をいじっている。

フェリシアはジェリコの声に気づくとこちらに顔を向けた。

「見れば分かるでしょ？薬草を探してんのよ」

フェリシアはそう答え、「あんたも手伝ってよね」と一言付け加える。見ても薬草を探しているとは分からないだろうと胸の中で呟きつつ、ジェリコは手伝うことにする。

フェリシアの傍らに行くと、すでに緑の束がもつそりと山積みされていた。まさかこれ全部食べられるのだろうか。

「あ、それは調合用のアベラベという毒草よ。食べたら体が麻痺するわよ」

「えー！」

葉をひらひらさせたり匂いを嗅いだりしていたジェリコは、何の変哲も無い葉を思わずまじまじと見つめてしまった。よりもよって毒草を弄んでいたとは……。そういうことは最初に言ってもらいたいものである。

ジェリコの驚いた様子を一瞥すると、フェリシアは山積みの毒草を麻の袋に乱暴に詰め込む。そして一つの草をむしりとしてジェリコに見せた。

「これはルジオという薬草よ。葉には体の血行を良くしてくれる作用があるわ。野草の中じゃ栄養価も高いし、野宿にはぴったりなのよ。根っこは駄目だけど茎は食べれるわ。シャキシヤキして結構美味しいわよ」

ジェリコは黙ってフェリシアの解説を聞く。野草のことなど露も知らないジェリコにとって興味深い話である。話を聞く限り、フェリシアは野草に関して随分詳しいようだ。よく分からないが錬金術

にはそういった知識も要るのかもしれない。

「あんたはこのルジオを探して摘んできて。どこにでも生息する植物じゃないし、摘める時に摘んどきたいのよ。どうせこれから野宿が増えそうだから丁度いいでしょ」

フェリシアはそう言うつとルジオをジェリコに渡す。

「それを見ながら摘んできなさい。匂いも独特だから分かりやすいでしょ」

ルジオを鼻に近づけてみると、確かに、鼻の奥がすつとするような香りがする。

「あたしはこつち側を探すからあんたは向こう」

フェリシアとは反対側を探すよう命じられる。ジェリコは頷くと早速ルジオの葉を探し始めた。

空き地周辺をまんべんなく調べてみると、ルジオらしき植物は意外とたくさん生えていた。木の根付近によく繁殖しており、木から栄養をもらって育つのかも知れない。葉に鼻を近づけて匂いを確かめると、やはりすつとする香りがした。ジェリコは一つ二つと、ルジオを摘むと片方の手に貯めていく。

それにしても草いじりなんて随分久しぶりだが、自然と戯れるのは楽しいものである。孤児院にいたころは登山とか散歩とかに仲間と共に出かけていたが、ベルガモで暮らし始めるとすっかり酒場一色になってしまった。だからだろうか、自然に触れるのはどこか懐かしい感じがした。

そして酒場という言葉が脳裏によぎった瞬間、ラ・メールの住人達が、ベルガモの友人達の顔が浮かんできた。

ジェリコは思わずベルガモの方角を振り返ってしまう。黒い孔のような暗がり歩いて森を抜ければ、まだベルガモに引き返せる距離なのがいじらしい。覚悟を決めたはずの心がぐらりと揺らいだ。人の心なんて、弱いものである。

しかし、ここで逃げては何もかも失ってしまうだろう。あらゆる人の心を、自分自身をも裏切ることになる。それは自分で自分を殺

すのと同じことだ。

「……そんな馬鹿なこと、できるわけじゃないか」

己に言い聞かせるようにジェリコは呟く。愛しいものを思い出し
てはならないのに、そう思えば思うほど思い出してしまふ。この矛
盾がとてつもなく辛かった。

「あんた、なんで泣いてんの？」

びくりとして振り返ると、フェリシアが腕を組んで仁王立ちして
いた。

「な、泣いてなんかいないさ」

ジェリコは焦って目を乱暴に拭くと、その手は濡れており確かに
涙を流していた。知らない間に泣いていたのか。

フェリシアは眉毛をハの字にしながらジェリコを見つめていると、
ため息をついた。

「あのね、草をむしりながら泣くなんてみつともないったらありや
しないわよ。で、ルジオは見つかった？」

フェリシアの問いにジェリコは左手を見せる。ジェリコが摘み取
ったルジオを確認すると、フェリシアはふむと頷く。

「じゃ、あんたはもう休んでいいわ。ほら、シャキツとしなさいよ」
情けないわね、と言いながらフェリシアはジェリコの肩を軽く叩
いた。フェリシアなりに励ましてくれているのかもしれない。

——なんて思っていると、

「そんなに隙を見せていると後ろから刺すわよ」

ぞくりとする言葉を吐くのである。背筋に冷たいものがつつと
流れた。

しかしおかげで幾分気持ちやすきりしたというか、気が引き締
められた。

ジェリコは立ち上がってフェリシアを見据えると、その猫のよう
に生意気な瞳を見つめる。

「僕は死ぬわけにはいかないんだ。みんなとの約束があるから」

フェリシアは腕を組み、思いの他澄んだ瞳でジェリコを見つめ返

す。

「ならメソメソすんじゃないわよ。格好つけるのもいいけどね、あんたは気持ちがついてきてないの。中途半端なのよ」

痛いところを突かれる。ジェリコは思わず言葉に詰まってしまった。

黙りこんだジェリコを見かねたフェリシアは、はあ、とため息をつく。

「自分が本当に何をしたいのか、何をすべきなのか、もう一度考えなさい。あたしに一言物申すなんて千年早いわよ」

フェリシアはそう言うジェリコに背を向け、一人森の奥へと歩いていく。木々の枝を見上げているところからすると、木の実を探している様である。

ジェリコはフェリシアに何を言うでもなく、その言葉を噛みしめた。何がしたくて、何をすべきなのか。……なぜか、答えられない。世界を絵で助ける。だが、そんなこと本当にできるのだろうか。俯いて考えながら空き地に戻ると、そのまま座り込む。

「口は汚いけど、割と素直でしょ？あの子」

ジェリコの隣にフォレンティーナがやってきた。先ほどの言い合いを聞いていたのだろう。

「でも、ストレートすぎるよ。アヤジといい、フェリシアといい。疲れる旅になりそうだ」

言いつつジェリコは寝転がった。横になると一気に体が楽になる。「私達が小さい頃も、疲れるようなことばかりだったじゃない」

フォレンティーナが懐かしむように言った。

「そうだけど、楽しさの方が上回っていたから疲れはあまり感じなかった」

「それはどうして？」

「そりゃあ信頼できる仲間と一つのことをやるっていうのは、凄くやりがいがあつて楽しいからさ」

「なら、今回の旅もそうなるようにしたらいいじゃない。自分から

寄り添っていかないと。努力するのは得意でしょ？ベルガモで何があったのか知らないけど、変わったわね、ジェリコ」

「そうかな……」

ジェリコはそう呟いて目を閉じた。自分から寄り添う、か。確かに、最近かどうか分からないがベルガモで生活を始めてから何かとジェリコは自分の意思を貫こうとしていた。そもそも孤児院を飛び出した理由も理由だ。世界的な絵描きになるといつて飛び出たくらい、元々自分はわがままなのだ。それ以来フォレンティーナとは会っていないし、変わったと言われるのも当然だろう。

だが、人の意思は変動していくものだとも思う。それは変わり行く時代、歴史をみれば当然だ。

しかし、貫き続けなければならないものもあるとも思う。それが何なのかジェリコには分からない。セプロに教わった寛大であれ、という教えなのか、紳士の背中が語った誇り高き意志なのか。それとも自分自身でそれを見つけること、その行動が自体が重要なのか。

——分からない。

結論が出ないまま、逃げるようにジェリコの意思は闇に沈んでいた。

#18・深淵という名の活路

ぱち、ぱちという火の爆ぜる音でジェリコはまどろみから目を覚ました。ぼんやりと開いた視界の向こうには、焚き火を囲んだ仲間の姿が見える。各々口を閉ざし、赤くのたうつ炎の照り返しを受けてその顔を不気味に光らせていた。ただ一人、エメの姿が見えないが、大方周囲の偵察にでも行っているのだろう。

「ようやく目覚めたか」

瞼をこすりながら起き上がると、焚き火を隔てた側に座っているアヤジが口を開いた。

「ごめん、寝てた」

「構わん。体は休められるときに休ませろ」

いつものようにぶつきらばうにアヤジは言っていると、火に燃料をくべる。

「ジェリコ、魚があるから食べたら？」

ジェリコの隣に腰を据えているフォレンティーナは、木の枝で串刺しにした魚を一匹差し出してきた。魚は焦げ目が付いて香ばしい匂いがする。表面の白い小さな粒は塩か。ジェリコはフォレンティーナからありがたく受け取ると、そのままかぶりついた。塩がよく効いていて旨い。

「それにしても魚？どこから捕ってきたの？」

ジェリコは至極当然な疑問を口にした。まさか街から買ってきたものでもないだろうし、近くに川があったのだろうか。

「薪を集める途中、川を見つけたのだ。ついでだから魚を人数分捕って来た」

アヤジはそう言つと炎の中に薪を一つくべる。なるほど。ジェリコは合点がいった。こんな暗闇の中、魚を捕るなんて芸当、常人では不可能だろうがこの男には化物が憑いているのだ。大方その異能力を用いて捕獲したに違いない。

「ほら、ルジオと一緒に食べなさい。役立たずな上に栄養失調にでもなったら鬱陶しすぎて発狂しちゃうわ」

フェリシアがルジオの葉が詰まった袋を乱暴に投げてきた。袋の口から鼻を駆け抜け脳に突撃してくるような爽やかな香りがする。ジェリコは葉を二、三枚取り出すと魚に乗せ、かぶりつく。微妙に残っていた魚の臭みはルジオの香りで相殺され、より食べやすくなった。

がさり。

突然背後の草むらが鳴り、ドキリとしてジェリコは振り向いた。

「……」

「なんだ、エメか。驚かさないでよ」

ジェリコは胸をほつと撫で下ろす。野犬だったらどうしようと思っていたところだ。思ったところで手遅れだったろうが。

エメはというと、ジェリコを一瞬見つめた後、そのまま空いていた空間に腰を下ろした。

「どうだった？」

アヤジの問いに、エメは首を振った。

「そうか。何もいなかったか。しかし油断はできない。最近の魔術師は術の精度が上がってきているようだからな」

先の魔術師のことだろうか。アヤジは本気で警戒しているよう様子である。

そしてフェリシアは魔術師という言葉聞き、小さくため息をついた。

「あたしにも魔力があればなあ。鬼に金棒なのに」

フェリシアの言葉に、アヤジが炎を見つめながら呟く。

「錬金術と魔術との二足の草鞋を履くという意味か？ならば止した方がいい」

「どういう意味？」

例によって例の如くフェリシアはアヤジに噛み付いた。

アヤジは目だけをフェリシアに向ける。

「その二つを大成しようとしたものは、大抵酷い死に様を見せている。ただでさえ裏の錬金術に手を出しているのだから、これ以上身を危険に曝す必要も無いのではないか」

「あのね、あんたにあたしの何が分かるのよ。あんたに心配される筋合いなんて元素核ほども無いわ」

フェリシアに威嚇されるとアヤジは怖い怖いと心でもないことを言い、肩をすくめた。そしてちらりとジェリコを見る。

「ごもつとも。どうやらこの小僧と旅を始めて調子が狂ったらしい。思いのほか神経を使うものなのだ。子守とは」

「悪かったね。役立たずで」

頭に來たジェリコはアヤジを睨みつけた。

「まあまあ。いがみ合っていたら無駄に体力を使いますよ」

いつの間にか仲裁役になっていたフォレンティーナがあたふたしながら三つ巴の中に入る。話に入れないエメはどうしているのだろうと目をやると、目を閉じて静かに焚き火に当たっていた。静止した人形のように、微動だにしない。しかし眠っているとは思えないおそらく体を休ませているのだろう。エメは四六時中辺りに警戒しているのだ、きっとかなり神経を使う作業に違いない。

「あたしはこの世の真理を必ず突き止めるのよ。賢者の石を必ず見つけ出してみせる」

「行き着く先は魔術師と一緒に。まあ俺がとやかく物言いする話ではないな」

なんだか二人はジェリコの理解が及ばない会話をしているが、これからジェリコもそういう物騒な言葉に関わっていくのだろう。だんだんとジェリコの住んでいた穏やかな世界が侵食されていくように、変な鳥肌が立った。

ふと、フェリシアは獲物を狙う獣のような目でジェリコを見つめた。にやりと口元を吊り上げて犬歯が見えるところが余計に獣のようである。

「目の前に絶好の素体がいるっていうのに手が出せないなんて、も

うじれつたいったら無いわ」

……これは冗談抜きに後ろから刺されるかもしれない。気をつけなければ。

しかし、フェリシアは随分とジェリコの体を過大評価しているが、その根拠は一体何なのだろうか。

「僕の体のどこにそんな素質があるの？　そういえば以前魔力を無限に生み出せるって言うていたけど、どういうこと？」

ジェリコの問いにフェリシアは興味を持ったようで、「知りたい？」と怪しい笑みを浮かべた。炎に照らされて不気味な影が浮かんでいるその微笑みの真意は知りたくないが、自分の体のことは知っておくべきだろうと思いジェリコは頷いた。

「いい機会だからきっちり教えてやるわ。そうね、まず魔力というものについて説明するべきね」

フェリシアは話すのが楽しそうだ。

「魔力ってのは、この星がこの星であろうとする力そのもののこと。魔力の源泉はこの地球で、この星に存在するあらゆるものに魔力は宿る。魔力というのは「その存在の形成を維持しようとする力」という風に、構成真理や多くの魔術書に定義されているわ。魔力は基本的にその存在を構成するために必要以上の量を保持しようとしたり、生成しようとはしない。以前あたしはあんたに対して魔力を無限に生成できるって言ったけど、厳密に言えばこの世に存在するものは勝手に魔力を自分で生成しているのよ。ただあんたの場合はその量とか密度とかが色々狂ってんの。これについては後で説明してあげるわ」

フェリシアはここまで一気に喋ると、皮袋に入っている水を一口飲んだ。一息つくと再び話し始める。

「次に魔術師について教えてやるわ。基本的に魔力は存在の構成を維持するための力なんだけど、何を思ったか大昔のある人間はその力を別の方向に使おうとした。この世を構成する力そのものなんだから、理論上、魔力を使えば自分の望むあらゆるものを生み出すこ

とができるのではないか、とね。これが世界最古の魔術理論。この思想を発想した人間の名はマーリン。マーリン・エムブロッシウス。この世界の真理について調べていた研究者で、世界初の魔術師よ。ちなみに魔力の特性に初めて気づいたのもこのマーリン」

おとぎ話でその名は聞いたことがある。大体が魔法使いとか、何やら特殊な能力を持った人間として語られるが、まさかそのマーリンなのだろうか。

フェリシアは続ける。

「マーリンが魔術を編み出すことができたのには、理由があった。それはマーリン自身に宿る魔力容量が異様に多かったということ。常人の魔力容量が一だとすると、マーリンは百万くらいの許容量があつたらしいわ」

「それはなぜ？」

ジェリコは尋ねた。

「マーリンは神代に生きていた神々の中でもとりわけ能力が高い神の子孫で、おまけに先祖である神の能力が覚醒していたのよ。いわゆる先祖返りってやつね。途方も無いくらいの」

「そんなことがあるの？」

ジェリコは半信半疑で尋ねると、

「あのね、あるから今こうなってるでしょ。あんたも自覚しなさいよ」

フェリシアになんだか怒られてしまった。

「で、マーリンは自分の力に惹かれた人間達に術を教えていった。魔術師の大発生みたいなものね。その大発生した魔術師の中には、やはりマーリンみたいな特徴を持った人間がいたらしくて、そういった奴らもマーリンのように偉大な魔術師として君臨してたらしいわ。有名どころで言えば、時の魔術師と云われたピュリノス・インディゲーターとか、魔術の力で王にまでのし上がった魔王アトモス・フェル・ヴァスコンティとか。マーリンの弟子は大体有名よ。しかし時代が進むに連れて科学が発達してきて、魔術の必要性とか思想

の危険性が問われたりして、結局世界的に魔術師が迫害されていった。世に言う悪魔狩り、魔女狩りってやつよ。そこで生き残った魔術師達は結託することで技術や歴史を保存することにした。これが魔術師結社。立場的には十字教会の対になってるわ。まあ魔術師を抹殺しようとしたのが十字教会なんだから当然よね」

正直言っている事がよく分らないが、とりあえずジェリコは頷いていた。何となくだが、フェリシアが凄いことを言っているのは分かる。悪魔狩りや魔女狩りというものは、以前読んだ本に書いてあった気がするが、よく覚えてはいない。

「ところで、それと僕とどんな関係があるの？」

「あのね、少しは察しなさいよ……」

ジェリコは思っていたことを尋ねただけなのだが、フェリシアは気に入らなかつたらしい。本当にうんざりした様子でため息をついている。いまい彼女の言わんとすることがジェリコは分らない。「つまりお前はマーリンその他の今は亡き偉大な魔術師達と一緒にだつてことだ。神代の化物共の先祖返りだと、彼女は言いたいのだらう」

予想外なことに、答えは別のところから現れた。そしてその答えに驚く。

「僕が、マーリンと一緒にだつて？」

「厳密に言えば、この世に存在する生物の先祖は、原点を辿れば何らかの神々の子孫だらう。しかしここで重要なのは、お前は遠い先祖である神の能力が覚醒する可能性があるということだ。少なくともその片鱗はすでに出ている」

なんとということだ。自分は伝説の魔術師マーリンと一緒にいいのか。途方も無さ過ぎて実感が沸かないが、非常にまずいというかひょっとして自分とはんでもない立場にいるのではないだろうか。

フェリシアはアヤジの説明に同意する。

「そういうこと。その証拠に、あんたは個体の形成に必要な分以上の魔力を生み出している。神の先祖返りをした人間は、その先祖返

りしようとしている神の当時の能力が覚醒しようとしてるわ。そのためには膨大な魔力が必要になるわよね。だからあんたは魔力の無限機関——魔術を行使できる量の魔力を生産しているのよ。それから、神の力からあぶれたものでもいうのかしら、神通力の片鱗として、大体何らかの異能力を持っているわ。あんたも何か自覚してるんじゃないの？小さい頃から妙な力があるとか、変な技術を持っているとか」

ジェリコは考えたが、とくに思い当たる節は無かった。結局首を横に振った。

「アルは？こいつと小さい頃から一緒だったんでしょ？何か心当たりある？」

突然話を振られたフォレンティーナは、顎に手を当てて首をかしげる。

「例えばどんなことが異能力なの？そう、マーリンはどんな能力者だったの？」

「マーリンが持っていた異能力は圧倒的な思考能力。一から千、千からさらにその先の発想ができたそうよ。まあそれくらいの知能が無いと魔力の存在に気づいたりしないわよね。時の魔術師ピュリノスは若かりし頃から体感する時間がおかしかったらしいわ。デジャブが妙に多かったり、あとどれくらいで日が暮れるか正確に分かったり。異能力の例なんてきりが無いわ。とにかく「常人には無い確固たる特別な何か」が異能力だとあたしは分析してるわ」

「——あ」

思わずジェリコは頓狂な声を上げてしまった。そういえばジェリコにもあった。小さい頃から悩まされ続け、同時にそれのおかげでここまで生きてこられたその原因。あまりに身近にあり過ぎて気づかなかった。

「何よ。なんかあったの？」

「あったよ。僕は、嘘が判る」

そう。ジェリコにはジェリコの意思の他、「無意識の判断」とい

うも一つの意味が存在する。その意味は根拠も無いのに相手の虚偽を必ず否定し、真実のみを肯定する唯一無二の秤なのである。

「嘘が、判る？」

フェリシアは驚いていた。そりやそうだろう。普通の人間ならば、絶対に判らないことが平然と判ると言ったのだ。怪しんで当然である。

傍らのフォレンティーナもそうそう、と思い出したようにジェリコに同意した。

「そういえばジェリコは人の嘘が判る能力があつたわね。忘れていたわ」

「アルまでそんなこと言ってるけど、本当なの？」

「本当さ。僕の中には僕以外の意思があつて、その意思はあらゆる嘘を否定する。僕はその判断に従うこともできるし、拒否することもできるんだ。まあその判断は絶対に間違えないから従うようにしているけど」

「胡散臭いわね。確かに異能力は発現しているはずだけど、人がつく嘘が根拠もなしに判る？信じられないわ」

疑心の目で見つめるフェリシアはいつもの短気な姿とは違い、どこか冷気のようなものを放っていた。

「じゃあ何か嘘についてみてよ」

挑戦的にジェリコが言うと、フェリシアは「そうね」と頷いた。

「それが一番手っ取り早いわ。——あたしは眠たくない」

「嘘」

「あたしは男だ」

「当たり前だろ、嘘」

「あたしはあんたを殺そうとしている」

「……なんでそんな質問をするかな。本当だし」

「いちいちうるさいわね。今実験しているのよ。——あたしはあんたのことが好きだ」

「嘘」

「あたしは天才ではない」

「本当」

フェリシアは低く唸りながら腕を組むと「判ったわ。確かに、あんたは人の嘘を見抜く力があるようね」と思ったよりあっさりとジエリコの能力を認めた。

「でもつまらない能力ね。派手さがないというか。拍子抜けしちゃうたわ」

「僕だって好きで手に入れたわけじゃないんだ。この能力のせいでどれほど苦しんだことか」

改めて自分の異能力を自覚し、それによって生まれた心の生傷が疼いた。心無い言葉。鮮やかな仮面の下には、吐き気をもよおす人間の暗闇が存在しているのだ。

「苦しむ?……ああ、なるほど。嘘が見抜けるということは、その言葉の裏を返せば嫌でも相手の本音がわかるということだもんね。あんたが言おうとしていることは何となく分かるわ」

そう言ってフェリシアはふん、と鼻で笑った。そしてぎろりとジエリコを睨みつけた。

「そんなことでうじうじしてんじゃないわよ。ほんと甘ちゃんよね。過去を引きずる男って嫌だわ」

「うるさいっ!」

ジエリコは我慢できずついに怒りを爆発させた。突然の咆哮に驚いた一同は一斉にジエリコを見つめる。ジエリコはそんな視線をものともせず、叫び続けた。

「フェリシアに僕の何がわかるんだよ。言いたい放題言っつて、ちょっとは人の気持ちを考えてものを言っただろうなの!?!」

ジエリコの必死の抵抗に、フェリシアは先ほどと変わらない冷徹な眼でジエリコを見つめる。そしていつもよりも低めの声でゆつくりと話し始める。

「あのね、人の気持ちなんてね、完全に判りっこないのよ。あんたが特別なの。あんたの常識を常人に押し付けられないでよ。それにね」

フェリシアは一度言葉を切った。

「確かにあんたは辛い過去があったのかもしれない。それは今も続いているかもしれない。けどあんた以外の人間にもあんたのその悲しみと同じくらいの悲しみを引きずっているかもしれないと思ったことは無いの？辛いのは自分だけじゃないって考えたこと無いの？世界にはね、あんたよりも辛い状況に立たされている人間が馬鹿みたいにいるのよ。そういうことを考えたことある？」

「ぐっ……」

ジェリコは言葉を返せない。フェリシアの言うことは尤もである。今フェリシアが言ったことは、世界を見てきたものだけが言うことを許される言葉だった。ジェリコよりもあきらかに経験を積んでいるという証拠。ジェリコは自分の視界の狭さに改めてうんざりした。自分は何のためにこの不運な旅に出ているのか。もちろん自分の命を明日に繋げるためだが、世界を見るためでもなかったか。世界を見て、多くの人間を見て、そして悲しみに暮れている人たちを絵で救いたいのではなかったのか。

沈黙したジェリコに対してフェリシアは何も言わず、腕を組んで目を閉じた。

しばらく炎が自分勝手に爆ぜる音と、唐突な風が一同を覗き見しながら過ぎていく。森の雰囲気と相まって重苦しい時が流れていたのだが、「そう気に病むことはない」とアヤジの一言が森の空気を振るわせた。

「お前はまだ若い上に今まで普通の生活をしてきたのだ。急にこちら側に引きずり込まれたら世界の違いに戸惑うのも当然だろう」

ジェリコに同情しているようで、実はただ現状を冷静な感想として述べているだけだった。そしてアヤジの黒い瞳はフェリシアに向けられる。

「君もからかい過ぎだ。同年代くらいなんだから仲良くしてあげたらどうだ」

「何であたしがこいつと仲良くしなくちゃいけないのよ。あのね、

勘違いしてもらったら困るけど、あたしはこいつの命を狙ってるの。天地がひっくり返っても楽しい会話なんてできないわ」

「そうか」

アヤジはそれきり黙りこくってしまった。フェリシアもこの空気に嫌気が差したようで、ふん、と不満たらたらの様子で場を一瞥するとやっていられないとばかりに寝転がった。

ジェリコといえば、ただただおぼろげな炎の揺らめきを見つめ、おぼつかなく、足場が緩くなった自分の精神を繋ぎとめることで精一杯だった。

情けない話だが、ベルガモにいた頃はこんな時、いつもダニエラが慰めてくれた。もしくは、無心で絵を描いていた。

ただただ心の赴くままに、思い浮かぶ筆遣い、色を用い、心が風に満たされるまで描き続けていた。そうすることで、ジェリコは自分を保ってきたのだった。

モンツアにいた頃はそんな悩みに苛まされることなど一度も無かった。ベルガモに移って社会を知って、そして今、不本意な瞬間、言葉ではあるが世界の厳しさを痛感した。先ほどのフェリシアの言葉はこれまでに無いほど頭に來たが、自分の愚かなところを鋭く指摘してくれたという意味では非常にありがたい言葉でもあった。

「何をしているの？」

「え？」

突然、声をかけられてジェリコは我に返った。声のした方を見るとフォレンティーナが興味深そうにジェリコの足元を見つめている。釣られて目をやると、そこには奇妙な形の絵のようなものが描かれていた。絵の端にはジェリコの指が添えられてあり、つい今しがたまで自分で描いていたと気づかされる。

「無意識に絵を描いていたみたいだ」

「そういえば孤児院を飛び出た理由は画家になるためだったわね。絵は上手になったの？」

「モンツアにいた頃よりかはね。だけど、まだまだ勉強不足さ。い

つか世界を漫遊して自分自身の絵を作り上げたいと思っていたんだけど……この状況じゃあ、ね」

ジェリコは非日常な連中を一度見渡した後、肩をすくめた。

「だけど、この旅でしか得られないものもあると思うわ」

フォレンティーナは瞼を伏せた。そして穏やかな声で話し続ける。「それに気づくか、見過ごすかはジェリコ次第だね。解つてると思うけど、時は誰のためでもなく、過ぎ行く青い記憶の残滓のように、振り返って見返すことはできるけど、そのおぼろげな襟をつかんで引き戻すことは絶対にできないわ」

フォレンティーナは色々な分野で造詣が深いせいか、稀にこういった意味深な言葉を綴ることがある。フォレンティーナの詩的な言葉の影響で、一時期ジェリコは詩を書いたこともあった。

「だからいつも世界を意識して、今何ができるかを考えたらいいと思うわ。その積み重ねが、ジェリコが望むその姿へと導いていくのじゃないかしら」

「うん、わかったよ。難しそうだけど」

ジェリコがそう答えると、フォレンティーナは唯一の右目を開き、そつと微笑んだ。

ジェリコは、フォレンティーナに説かれて少し活路が見えた気がした。

自分がとんでもない性質の人間なのはわかった。ならばそれを活かして、自分の夢へと続く架け橋とすればいいのではないか。自分には類稀な力があるらしいのだから、それを利用しない手はない。ならば、それを自分のものにするためには何をしなければならぬのか。

——魔術を、学ばなければならない。

予想だにせぬ場所に辿り着いた結論に、思わずジェリコは一人目を丸くしてしまった。

しかし、よくよく考えてみると自分は魔術が引き起こすような奇跡を心の奥底で求めていたのかもしれない。孤児院で初めて絵

画に魅入られたときの、あの言葉に尽くせぬ感動はまさに魔性の美しさだったではないか。頭を思い切り殴られ意識が吹き飛ぶその瞬間の時間が無限に引き伸ばされ、時を忘れるような感覚。天地を忘れ、自分すら見失い、真つ白な揺り籠の中に叩き落されたような感覚。ただただその美しい世界観（かつての世界にはあつたのかもしれないが）しか見えなくなるような感覚。そのような感覚を引き起こす絵画の力――すなわちそれを生み出す画家というのは、様々な奇跡を扱う魔術師と同義ではないだろうか。

そういう意味では、自分が魔術というものに目覚めようとするのは当然なのかもしれない。ましてや常人には無い訳の分からない身体能力を持っているのだ。魔性の存在に惹かれるのは、奇妙な因果だが、運命としか言いようが無いではないか。

――魔術を、学びたい。

絶え間なく盛る夕日のような炎を見つめながら、ジェリコはそんなことを考え始めていた。

#19・深淵という名の活路 part 2

朝日が薄つすらと顔を出す頃、ジェリコは目を覚ました。

真つ暗だった森にはぼんやりと光が差し込み、鳥のさえずりが遠くから聞こえる。

ジェリコ以外の者は当然のように目を覚ましており、各々が自由に体を調整しているようだった。

寝ぼけ眼でまだ頭が回転していないジェリコところに、フォレンティーナがパンを持ってやってきた。珍しく帽子を脱いでいる。

「おはよう。相変わらず朝は弱いだね」

フォレンティーナはジェリコの様子を見つめながら微笑んでいた。「昨日は疲れたから早起きできなかっただけさ。次からは気をつける」

パンを手渡され、言い訳を言いながらジェリコはパンをかじる。

「準備ができたら行くぞ」

遠くにいるアヤジがぶつきらばうに言った。寝起きに一番聞きたくない声である。

ジェリコはアヤジの言葉に返事をせず、その背中をじろりと見つめながら無言でパンをかきこんだ。

その後準備が終えた一同は再びモンツァへと歩き出す。森を抜け街道に出ると遠くに宿が見えた。昨日は暗くてよく見えなかったが、宿には馬が何頭かおり、中には鎧に十字の刺繍が施されているものがいた。十字の刺繍は間違いなく教会の印である。どうやら本当に調査団が居座っているようだ。

「あの宿には調査団がいるが、何食わぬ顔で通り抜けば大丈夫だろう。エメが言うには宿から人が出てきている気配は無いし問題ないはずだ」

ジェリコも同感である。人が起きるにはまだ早い時間だし、警戒しすぎて遠回りしたらその分時間と体力が奪われる。モンツァまで

は後半日くらい歩かなければならない。無駄な体力は消費したくなかった。

一同は、ジェリコを中心に置くような並びで街道を歩いた。万が一ジェリコの姿を知られていればそれだけで騒ぎになってしまうからだ。もう人が居る場所では姿を隠した方がいいというアヤジの方針である。

「さあ、宿の前を通るぞ。通り抜けるまで喋るな」

緊迫したアヤジの声。一同は思わず身を固めた。前方には街道の脇に建っている宿がもう見える。木で作られた頑丈な建物だ。朝日の照り返しを受ける窓を見てみると、二階の一室だけカーテンが閉まっていない部屋があった。花瓶が置いてあるのが見える。さあ、宿の前についに来たぞ。右手にある馬小屋からいななきが聞こえる。馬もどうやら早起きらしい。どこからか水が流れる音も耳に入った。ここからでは川の姿は見えない。裏手にでもあるのだろうか。宿の入り口には小さな花壇があり、そよ風に揺られてみんな仲良く頭を振っている。

——そして、そんな平凡な光景とは真反対の、何ともいえぬ緊張感が肌で感じられた。突き刺すような視線とでも言うのだろうか。人の姿は全く無いのに、複数の人間に凝視されているような感じがする。

「（ちょっとあんた、遅れてるわよ）」

突然フェリシアに脇を突かれた。なるほど前を見るとアヤジは二歩ほど先に進んでいる。ジェリコはフェリシアに「ごめん」と謝ると足を速める。そしてアヤジの背に辿り着く頃には宿を通り過ぎていた。

ジェリコは通り過ぎた宿を後ろ目でもう一度見た。何の変哲も無い、いつも通りの朝を迎えた一つの建物が見える。結局何事も起こらず無事に通り過ぎたようだ。

しかしあの気配は何だったのだろうか。ただの緊張感だったのか。それとも本当に誰かに監視されていたのだろうか。

前を歩くアヤジが足を止めると、宿の方を振り返った。

「ここまで来ればいいだろう」

どこか安心していているような声色なのは気のせいかな。

「無事に通り過ぎてよかったわ。それよりあいづら呪われてんじゃないの？何なのよあの嫌な感じ」

フェリシアは遠くに見える宿を威嚇するように見つめている。彼女も何かを感じ取っていたらしい。

「調査団は四六時中曰くつきの物と関わっているからな。何かと縁があるのだろう。絶対に関わりたくない縁だが」

アヤジはそう言いながらため息をついた。

――瞬間、

つごがあああああ！

突如穏やかな朝を轟音と熱風が引き裂いた。衝撃がこちらまでやってきて、髪がばさりと逆立つ。あまりに唐突な出来事に、アヤジやエメも同様に隠しきれていない。

「な、どうして!？」

第一声はフェリシア。爆心地の宿を驚愕の面持ちで見つめている。宿の方を良く見ると、宿自体は爆発していないようだ。宿のすぐ側が爆発したようである。

思わず宿の方に釘付けになっている一同に、アヤジが叫んだ。

「逃げるぞ！今街道には俺達しかいない。このまま宿から出てきた連中に見つかるかと犯人にされてしまう」

確かにその通りだ。何者かになぜ爆撃されたのか気になるが、犯人にされたらそれどころではない。

「走れ！全力でだ！」

言うのが早いか、アヤジは走り出していた。あのアヤジがここまで焦っているということは、冗談抜きでまずいということである。ジエリコは軽く戦慄した。

そしてその恐怖を払拭するように、がむしゃらでアヤジの背中を追う。乾いた地面を蹴り、風を突き抜けながら走り抜ける。朝日は

だいぶ空に上がっていた。

——それにしても無事に宿を通り抜けたらこの展開である。正直やっつけられない。この先本当に身が持つのだろうか……。

* * *

街道を半時ほど走り続けると、さすがに辺りに広がる風景は自然だけになった。空に昇った太陽も調子付いてきたのか、優しい日差しを下界に向かって降ろしている。

アヤジはようやく歩き始めると、街道の脇に立っている木陰に入った。

「少し、休むか」

大きな幹に身を預け、アヤジはほっと息をつく。

「ハア、ハア。疲れた。足がもう動かないわ」

フェリシアは心身ともにくたびれたようで、草の上に大の字に寝転がった。だらしないとは思うが、ジェリコもくたくたなので文句は言えない。ジェリコはフェリシアの隣に座ると、足を伸ばした。膝が小気味の良い音を立てて脱力する。

一呼吸置いてエメとフォレンティーナが現れた。フォレンティーナは顎をさすりながら何かを考えているようである。

「それにしても、あの爆発はなんだったのかしら」

フォレンティーナの問いに腕を組んでいたアヤジが答える。

「あの爆発から考えられる可能性はいくつかある。一つは俺達の存在を調査団に知らせ、爆撃の犯人を俺達にし、世間に知らしめるため。二つ目は、実はあの爆撃は俺達とまったく関係が無く、あの宿に何か恨みのある人物が居て、そいつを抹殺しようとしたとか。例えば魔術師が調査団を抹殺しようとするとか。いずれにせよあの場に最後までいなかった故に断定はできないな。ただ」

アヤジは一度言葉を切る。

「調査団と俺達、この二つの要素は鍵になっていると考えていた方

がいいだろう。俺は魔術師とか錬金術師とかの第三勢力が、調査団と俺達を引き合わせようとしたのではないかと考えている」

「確かに、可能性としてはそれが一番ありそうで尚且つめんどろすね。魔術師や錬金術師は十字教会と違い、単体で動くこともあれば複数で行動することもありますから」

「うむ。奴らの動きは捉えきれないからな」

ジェリコはアヤジとエメの会話を聞きながら、雲が流れている空をぼんやりと見つめていた。

いろいろな人間が自分の命を狙っている。その見えない刃の矛先を背中に感じていた。

なぜ自分はこんな不幸な星の下に生まれたのか。今更悔やんでもどうしようもないのだが、やはり考えてしまう。

「……」

ふと、視界の前を黒い影が通り過ぎた。そして黒い影はジェリコの隣にゆつくりと腰を下ろした。周囲の監視ということと、いつも辺りに神経を張り詰めている彼女はジェリコたちよりも疲れているだろう。

生まれながらにして呪われた血筋で、その影響で言葉の喋れないエメ。いつも固く口を閉ざしている彼女の本当の気持ちを知っているものは、果たしているのだろうか。

『世界にはね、あんたよりも辛い状況に立たされている人間が馬鹿みたいにいるのよ。そういうことを考えたことある？』

フェリシアの言葉が蘇った。世界は広い。その意味を端的に表した彼女の言葉は、予想以上にジェリコの心を縛り付けていた。

『だからいつも世界を意識して、今何ができるかを考えたらいと思うわ。その積み重ねが、ジェリコが望むその姿へと導いていくんじゃないかしら』

フォレンティーナは世界を感じると言った。だがジェリコはその言葉の真意を未だ飲み込めていない。

彼女は何か言いたかったのか。世界を感じるということは、この

星に住む自分以外の生き物を感じろということなのか。それとも世界という巨大なものの真実、真理を意識しろということなのか。

そしてジェリコは魔術をこの手に掴みたいと願っている。魔術という科学と対を成す裏の学問。その妖しげな魅力に囚われてしまった。ジェリコが生まれながらにして持っているという魔力の無限生成機関を最大限に引き出す道とは、いうまでも無く鉄の臭いと暗黒に染められた魔術の道である。しかしジェリコが魔術を望む理由は非常に単純だ。私利私欲のためではなく、魔術による奇蹟で大切な人たちを幸せにしたい、それだけである。

ふと、ジェリコは隣に寝そべっているフェリシアを見た。

フェリシアは目を閉じていた。しかし眠っている様子は無い。

ぱっと見は金髪を三つ編みにした少女が草原で眠っているという牧歌的で実に微笑ましい光景なのだが、見た目とは裏腹に性格は強烈だから世の中油断できないものである。これもフォレンティーナの云う世界を意識しろということなのだろうか。

そういえばフェリシアは錬金術師だというが、彼女にも過去に何かあつて錬金術の道に入ったのだろうか。

ジェリコがそんなことを考えながらフェリシアを見つめているとその気配でも察したのか、フェリシアは猫のような両目をぱちつと開いた。そしてジェリコの視線を認めるや否やいつものように睨みつけてくる。

「あのね、じろじろ見ないでくれる？」

「フェリシアはなぜ錬金術の道に入ったの？」

唐突なジェリコの問いにフェリシアはますます目を細める。

「なんでそんなこと聞くわけ？関係無いでしょ」

「関係が無いと答えないの？」

ジェリコの言葉にフェリシアはめんどくさそうに起き上がると、不機嫌な顔でジェリコを見つめた。

「あたしの家は先祖代々学者の家系なの。で、時代が流れるにつれて研究対象が錬金術になって、以来錬金術による真理や世界の探究

をするようになった。あたしはその流れで、まあある意味なし崩し的に錬金術師になったの。だからなぜ錬金術師になったかなんて質問は愚問よ」

「そうなんだ。でも錬金術って大変な世界なんじゃない？辛くないの？」

「あたしを馬鹿にしてんの？大変な世界だからやりがいがあるんでしょ？つまらない世界で生きるなんてごめんだわ」

フェリシアはそう言い放つと再び寝転がる。つまらないことを聞くなと言いたげだ。

さらにフェリシアは視線だけをジェリコに向けて話し続ける。

「あんた世界を絵で救いたいなんてほざいていたわね」

「うん」

「たかだか錬金術の世界できついと思う位じゃ、間違はなくあんたは自分の夢に溺れて死ぬ人生を送るでしょうね。自分の理想をボケ老人みたいに繰り返すだけで、口だけの人間で終わるでしょう」随分と酷い言われ様だが、不思議とジェリコに怒りが芽生えなかった。

それはつまり彼女の言うとおりだからだろう。そして自分自身、そのことに納得しているのだ。自分の夢がいかに誇大で向こう見ずなものなのか、フェリシア達と出会ってから急激に認識し始めたのだ。裏の世界で生きる人間は、常人よりも世界の本質に近いところで生活をしているが故に、ジェリコの考えていることがいかに大それたことなのかよく分かるのだろう。

ジェリコはフェリシアから目を放し、抜け殻のような視線を空に向けた。フェリシアも目を閉じる。そして独り言のように呟く。

「まあせいぜい『揺り籠』の効果に期待することね。もしかするとあんたの夢はあっさり叶うかもよ」

「揺り籠？」

「そう。大魔術師ピュリノスが編み出したとされる以外は、あたしもよく知らない。ただ、ものすごい力が発動するということは知っ

てる。何が起きるかは何すら聞いたこと無いわ」

アヤジもこの魔術についてはよく分からないと言っていたし、まったくもって未知数ということか。

自分がその魔術を発動させる鍵らしいが、一体何をすればいいのか。膨大な魔力が必要ということとでジェリコの血が求められているくらいしか情報がないため見当がつかない。ましてや魔術の魔の字も知らないジェリコである。この大魔術に関してはしっかりと見極めをつけないければならないだろう。これから目指すモンツアで色々と判明することがありそうだし、何かしら変化が起きることだろう。それが自分にとって善いことなのか悪いこと分らないが、今のジェリコにできることといえば、どのような現実であろうとそれをつかりと受け止めるしかない。

「おまえたち、そろそろ行くぞ。休みすぎるのも気が抜けてよくない」

アヤジが街道へ歩きながら言った。こちらまで丁度気持ちを新たにしたところだ。

——まずはモンツアへ。そこから何かが始まる気がする。ジェリコは明確には表現できない不思議な勘を受け止めていた。

#20・休息

街を駆け巡る潮風には、遠い記憶をくすぐる懐かしい匂いがした。一行は昼頃モンツアに無事到着した。随分久しぶりだが、町並みは変わっていないかった。湿気た石畳に、海から流れてきた風に、気ままに空を舞う海鳥達。ベルガモのような喧騒は無く、穏やかな人並みが広がっている。この街で幼い子供達が失踪しているなど思いもよらない。だが、どす黒い動きというのは自分の死角にひっそりと佇む影のように、概して人目につかないものだからある意味仕方が無いのかもしれない。

町を歩いていると、だんだんと魚の香ばしい匂いがしてきた。その香りに釣られて視線を泳がすと、情報の発信源を発見した。通りの傍らに横並びになっている露店群の一つに、小麦色に焼けた肌の男が魚や貝を焼いている姿が見える。丁度昼時だからか、客が小さな列を作っていた。

ジェリコと同じ店を見ていたフェリシアは、綺麗に焼き色の付いた魚を愛おしそうに眺めると、猫なで声のような妙な声で言った。「ねえ、お昼にしましょうよ。朝にパンをかじっただけだからお腹空いたわ」

フェリシアの声にアヤジは「そうだな」と言いながら足を止める。「目的地までもう少し歩かなければならないし、少しばかり休憩しよう。ジェリコ、お前どこか美味しい店を知らないのか？」

「え？ああ、うん、そうだね——」

珍しく名前でジェリコを呼んだアヤジに少々驚きつつも、ジェリコは考えた。

ジェリコが住んでいた辺りならおすすめの店は分かるのだが、今いる北モンツアに関しては少々疎い。ふとフォレンティーナを見ると、おそらくジェリコと一緒にのだろう、すっきりした顎に手を当

てるいつものポーズで困った顔をしていた。

——結局、地元民なのに名店が分からない気まずさと不甲斐無さに苛まされつつ、ジェリコはアヤジに言った。

「ごめん。分からない」

「そうか。ならあの店にしよう」

即答したアヤジの視線の先には、赤レンガで建てられた二階建ての酒場があった。入り口の傍にある年季の入った木の看板には「ケ・ミュフン」と書かれている。

「店が決まったんなら早く行きましょ。腹が減りすぎて胃と背骨が融解しそうだわ」

わけのわからない喻えを言いながら、フェリシアはアヤジを抜いて先頭に立つ。そしてそのまま一直線にケ・ミュフンへと歩いていく。残されたジェリコ達は彼女の姿に若干呆れつつ、フェリシアの後を追った。

「ふーん。綺麗な店ね」

店に入るなりフェリシアは感想を述べた。彼女が言うとおり、店内は洒落た空間である。暖かい色のランプに照らされている、壁際にあるタペストリーや油彩の大きな絵画が店の雰囲気象徴しているようだ。長い年月を経た味のあるテーブルや椅子も、老獪な貴族のような落ち着いた気配を発している。周囲の先客たちも騒ぐことなく、この大人の空気を楽しんでいるようだった。

「いらつしやーい」

店内を物色しているとジェリコの同業者とも言える女性が笑顔を浮かべながら現れた。短い栗色の巻き毛が可愛らしい、綺麗な人だ。「五名様ですね。こちらへどうぞ」

一堂は店内奥の壁際に案内され、席に腰を下ろす。両隣がアヤジとエメで正面がフェリシアという落ち着かない席順だが、動くのは面倒なのでジェリコは我慢することにする。

「ふう」

椅子に座るなりジェリコは思わず息をついた。なんだかんだで、歩き疲れている。しかしモンツアに着いたのだから長距離を歩くのは一先ず今日で終わりだろう。そう思うと少し気が楽になった。

「さーて、何を食べよっかな」

上機嫌なフェリシアはメニューを誰よりも早く手に取り、パラパラとページをめくる。そして並べられた料理名を舐めるように目で追っていく。

——突然、白く細い指で一つの料理が指名された。

「これなんか美味しそうね。半熟卵と緑のサラダ特製ドレッシング付き。あ、これも美味しそう、ヤギのホワイトソース煮だって」

「何でもいいが、頼みすぎるなよ」

今まで見たことも無い少女のような笑顔を浮かべ、メニューを読んでいるフェリシアにアヤジは一言忠告した。するとフェリシアは、「大丈夫。全部食べるから」

「……一体いくつ頼むつもりなんだ」

顔をしかめたアヤジの言葉を知ってか知らずか、フェリシアは凄まじい勢いで片っ端からメニューを読み漁っていく。フェリシアは錬金術師だからたくさん本を読むはずだ。それによって会得した速読力が今ここに全力で活かされている、そんな気がしたジェリコである。

「アヤジさん。これから向かうところはモンツアのどの辺りなの？」

フェリシアを微笑みながら見つめていたフォレンティーナはふとアヤジに尋ねた。フォレンティーナとは対照的に白い目でフェリシアを見つめているアヤジは、両手の上に顎を乗せて答える。

「アトモ山の麓だ。あそこには知る人ぞ知るその道の研究者が居てな。彼の元へ向かう」

「でもアトモ山って観光名所でしょ。そんなところにいるの？」

今度はジェリコが尋ねる。裏の世界の研究者が、人が大勢来るような場所に住んでいるというのは以外だった。

「アトモ山は貴重な鉱石が採れるのよ。まあ常人には無用の長物だ

から普通は知らないだろうけど」

口だけでフェリシアが話しに加わってきた。そしてページをめくりながら話を続ける。

「そいつ、間違いなく錬金術を嚙んでるわね。アトモ山はマツシーフ大陸にある八大霊山の一つで、錬金術に使う材料が豊富にあるからあたし達にとって住みやすいのよ。町からもそう遠くないしね」

「そうなんだ。知らなかったなあ」

小さい頃は何度か遠足で遊びに行ったことがあるが、まさかそんな特性を持った山だったとは。近辺に住む家族連れとか登山者がたくさんいるような記憶はあるが、錬金術師なんぞ一度も見たことが無い。

「ところであんたたち何食べるか決めたの？あたしはもう決まったわよ」

メニューを独占されたら決められるもの決められないだろう……という言葉をフェリシア以外全員思ったに違いない。

「注文頼みたいんだけど」

フェリシアは近くを通った店員を呼ぶと、メニューを見ず早口に注文を告げる。一つ、二つ、三つ、四つ……え？

「ちよつと、いくつ頼むつもりなの？」

思わずジェリコが言つと、フェリシアは「何よ文句ある？」と、御馴染みの目つきでジェリコを威嚇した。

「飯代くらい自分で払うわよ。だから文句無いでしょ」

「まあ……うん」

つい宥められてしまったジェリコである。それにしても頼みすぎだろう。こんな小さな体に収まるのだろうか。

「——あたしは以上。次、どうぞ」

ようやくメニューが渡ってきたジェリコ達にフェリシアは店員を差し向けた。だから、まだ決まってないっての！思わず叫びたくなつたジェリコである。

「ミニール貝のシチューとカム魚の塩焼きをくれ」

「え、もう決めたの？」

驚きのあまり頓狂な声を上げたジェリコである。

「私は春野菜のサンドイッチと豆のスープをお願いするわ」

「う、フォレンティーナまで……」

まさか食べるものを決めていないのは自分だけとは……。正直ありえないと思った。

「フェリシアがメニューを見ているときに俺も見えていたからな。ちなみにエメもだ」

「私も見てたわ」

当然だといわんばかりの顔で言うアヤジ、エメ。そしてフォレンティーナ。

なんという観察力……。この面子と自分はやはり住む世界が違いすぎる。何とも形容し難い強烈な境界のようなものを感じたジェリコだった。

「……で、あんたは？」

そして全員の視線をジェリコは浴びる。なんだろうこの疎外感。ジェリコはアタフタしながらメニューをめくり始めた。

「えーと——」

しかし異様な緊張感のせいか、あまり文字が頭の中に入ってこない。無言の視線を肌で感じる。

「あの、じゃあこの、日替わりランチをください」

結局、メニューを吟味することなく半ばやくそ気味でジェリコは注文した。料理を注文するのにこれほどの焦燥感を感じたのは生まれてはじめてである。思わずため息をついた。

「かしこまりました。少々お待ちを」

注文を紙に書き留めた店員はそそくさと立ち去った。

「何をそんなに疲れているんだ」

心無いアヤジの声。ジェリコは返事をしなくなかった。

「これだから甘ちゃんも困るわ。自分の食べたいものくらいすぐに言えない様じゃモテないわよ」

「そういえばジェリコは結構優柔不断なところがあったわね。そういうところは改善した方がいいわ」

なぜ、ここまで攻撃されるのか。ジェリコは泣きたくなった。ご飯を食べるだけでこんなに疲れるなんて、あんまりではないだろうか。

「……」

俯き、膝の上に置かれた震える両拳を見つめていると、すつ、と隣から浅黒く細い手が差し伸べられた。そして手の震えを止めるように、そつとジェリコの手と重なる。

「……」

驚いてジェリコはエメの方を向く。エメはいつもの無表情だが、ジェリコと目が合うとこくりと優しく頷いた。

……ありがとう、エメ。ジェリコは心の底からそう思った。

#21・伯爵

——ジェリコは、信じられなかった。

テーブルには色とりどりの料理が並べられている。いや、いた。空になった料理皿は綺麗に積み重ねられ、この店にあまりに場違いなその光景に周りの客が驚愕の顔で見つめていた。

そして料理の大群をたった一人で制した小さな少女は、満足そうにブドウ酒を煽っていた。まるで玉座に腰を下ろし、勝利の美酒を味わう霸王のようである。

「んっんー、久々にまともなご飯を食べたわ。満腹満腹」

霸王は周囲の景色など目に入っていないのか酒に酔っているのか分からないが、気分良さに鼻歌を歌っている。他の客は寛大なのか、それとも可憐な少女が無邪気に鼻歌を歌う姿が微笑ましいのか幸い文句を言うてくることは無い。

霸王は食事の手を止めているジェリコに気がつくくと、

「ぼうつとして何してんの？食べないのならあたしが食べるわよ」

フェリシアはにじしつ、と悪戯っ子な猫のように笑った。ジェリコは慌てて視線を逸らすと、フォークとナイフの活動を再開させた。自分の分まで食べられたらたまらない。

アヤジやエメはジェリコとフェリシアの様子など見向きもせず、無言で料理を口に運んでいる。ちなみにフォレンティーナすでに食べ終わっており、窓辺に立っていた。木枠のガラス窓から見える青い海原を眺めているのだろう。日差しに照らされた横顔は、金髪がきらめいて綺麗だった。

「ねえジェリコ、その煮物美味しいんじゃない？」

「美味しいよ。先に言っとくけどあげないよ」

「ケチ」

ジェリコの返事にフェリシアは眉間に皺を寄せる。ジェリコは山になった料理皿に目をやり、「これだけ食べて、よくそんなことが

言えるね」と呟いた。するとフェリシアは、

「食というものは生きとし生けるものすべてに共通する生命の補給行為なのよ。補給できるときにできるだけ補給しておくものよ」

などとよく分からない理論を述べる。ジェリコは無言で首をかしげながら、ジャガイモを口に運ぶ。

「和氣藹々なところ悪いが、聞け」

ふと、不穏な声が小さく空気を震わせた。もちろん、声の主はアヤジである。

「この店の外に、調査団がいる」

単刀直入なその言葉で、一気に体が強張るのがわかった。ついでにフォークを取りこぼしそうになったほどである。目の前のフェリシアも先ほどのぼんやりとしていた眼ではなく、光が宿ったというか、いつもの鋭い目つきに戻っている。

「エメが言うには宿屋にいた連中と同じ気配だそうだ。もしかすると追われているかもしれない」

……最悪である。旅を始めて早速巨大な勢力に目をつけられた。よりにもよって相手は教会である。世界に根を張り、影で世界を牛耳っているといっても過言ではないあの教会である。ジェリコは戦慄した。

急に黙り込んだジェリコたちが気になったのか、窓辺からフォレンティーナが戻ってきた。

「教会の人間らしき団体が外に居るわ。数は一七人。馬上の騎士が二人居て、それに付き従うような形で残りが群れているわ。おそらく宿にいた連中でしょう」

なんとフォレンティーナはすでに気づいていたのか。相変わらず冷静というか、勘が鋭いというか、頭一つ抜けている。

「奴らは何をしていた？」

「未知行く人に説教をしていたり話したりしていたわ。こちらに気づいている様子は無かったけど、何かを探すようにちらちら周りを見ている者が居たわ」

「それにしてもここまで付いて来られると臭うな。もしかすると俺達とは無関係の人間を追っているのかもしれない」

「君達、面白そうな話をしているね」

「！」

突如、外野から男の声が聞こえてきて、全員振り向いた。コントラバスのように低い声で、どちらかというとジェリコはそっちの方に驚いていた。

「十字教会を随分と警戒しているようだが、どうしたんだい？」

男の年の頃は三十歳前後。無駄な肉の無い瘦躯を血が褪せてしまったような暗い赤色の衣服に身を包んでいる。正直酷い色だが、服自体の質は良さそうである。これが今流行のベロア生地というものののだろうか。金色と茶色が混ざったような髪を後ろに撫で付け、丸い縁の眼鏡から除く碧眼は聖母マリアのように静かで穏やかである。両手には白い手袋をはめ、黒光りしているステッキに優雅に体を預けている。奇抜な服装ながら、そのどこか堂々とした振る舞いから貴族のようにも見える。

「何者だ」

アヤジは黒い瞳のみを男に向け、今まで見たこともないほど敵意をむき出しながら言った。ジェリコはアヤジの迫力にその思わず鳥肌が立ってしまった。

「私か？私はただのしがない伯爵さ。一人旅をしている。君達も国から国へと行く旅人かね？それとも――」

男は一度言葉を切り、満面の笑みを浮かべて言った

「――裏の世界の旅人かね？」

瞬間、アヤジは右手を鷹の鉤爪のような形にして、男の首へと向けた。よく見るとうつすら半透明の影が見え、それがヌイの足だということが分かった。そしてその足は男の首を握っていた。エメはというと、いつもは伏せ眼がちな目を今は威嚇するように見開き、男を見つめていた。フェリシアは無言でじっと男を見つめ、懷に手を忍ばせている。おまけにすぐ行動できるよう中腰で立っていた。

フォレンティーナはいたって優雅に構えて入るが、髪の毛からのごく右目はぶれることなく男を見つめていた。そしてジェリコはいうと、ただただきょとんとして椅子に座っている。

「喉を潰されなくなったら、俺の質問に答えろ」

「静かな店でこんな過激なことをするのは得策では無いと思うぞ？」

男は首を掴まれているにも拘らず、先ほどの姿勢から微動だにせずアヤジに笑みを向けていた。アヤジはちらっと周囲を見回した後、右手のヌイを消した。殺気だっていたエメたちも、警戒はしつつも構えを解いた。

ジェリコはというと、アタフタしながら周囲を見回していた。幸い他の客はこちらに気づいていないようだった。

「ふむ。さて黒髪の青年。私に質問があると言ったな？」

男は近くにあった椅子をステッキで引つ掛けると、引き寄せてゆつたりと腰を下ろす。そしてにやにやと絶えず笑みを浮かべてアヤジを見つめている。

「名を名乗れ」

「ユーリー・アバエフ。以後お見知りおきを」

「なぜ俺達に話しかけてきた？」

「ほんの遊び心さ」

「貴様、魔術師だな？」

「そうだが、何か？」

「！」

悪びれる風も無く答えるユーリーに、一同は驚いた。普通、魔術師ならばそのことを隠すはずなのにこの男は平気で答えた。しかも、嘘をついていない。

「何を驚いているのか私には分からんな。このご時勢、魔術師など珍しくとも何ともないだろう」

「確かに珍しくとも何とも無い。俺にとってはな。しかし世間一般からすれば魔術師ほど奇な存在はないだろう」

「一理ある。私もよく変人呼ばわりされるからな」

「はははっ、と爽やかに笑うユーリー。怪しい。この掴みどころの無さは不気味すぎる。」

「私は君達に興味を持った。話しかけた理由はそれだけさ。何か問題があるかね？」

「それに関しては無い。ユーリーと言ったか。俺達の前に二度と現れるな」

アヤジの強い言葉にユーリーは大げさに肩をすくめると、

「それは残念。しかし一っただけ君達に伝えておこう。外にいる騎士団は君たちを追っている。いや、正確にはその少年を、が正しい」ユーリーの不気味な笑みを受けたジェリコは背筋が総毛だった。

この男は、怖い。

「宿を爆撃したのは、貴様だな？」

「いかにも」

アヤジの唐突な問いにも、ユーリーは戸惑うことなく頷いた。ちなみに今の返事も嘘ではない。

「なぜ」

「魔術師と教会は相容れぬ存在だ。男と女のように、生と死のように、どこか繋がっているようで相反している存在同士だ。身も蓋も無い言い方をすれば、敵同士というやつだ。敵を滅ぼすのに理由はあるのかね？」

「無駄な争いをするべきではない。ところでなぜジェリコのことを知っている。魔術師結社の差し金か」

「かつて私は結社に属していたが今は自由の身だ。結社の目的など興味は無い。私は魔術師らしくただただ自分の欲望のまま赴くまでだ。しかし情報は入ってくる。嫌でもな。ジェリコ君のことを知ったのもその情報が原因だ」

「つまり、興味を持ったと言うことだな」

「その通り。たった一人の少年の人生がどのような形で落ち着くのか、そこに興味が湧いたのだ」

「端的に訊こう。貴様は、俺達の敵か？」

「敵でも味方でもない。私は傍観者。ただ、見るだけさ。君達に近づいたのもどうせ見るなら近くの方が迫力があると思ったからなのだよ。演劇と一緒にさ。遠くから全体をみるのも悪くないが、演者の服の衣擦れや皺まではつきりと見えるくらい近くの方で見ると、それはそれで趣がある。迫力が段違いにあるからね。今回私はお話の全体ではなく、役者の一挙一動に興味が湧いたから、今こうして楽しくお話しをしているのさ」

ユーリーの話から察すると、前からジェリコたちを監視していたと言うことになる。エメすら気づかないうちに。いや、エメは気づいていたのかもしれないが、敵対勢力と判断しなかったのかもしれない。

それにしても、ジェリコを見せも物のように言うこの男に少しばかり憤りを感じていた。

「それで貴様の目的は何なんだ？傍観者が俺達に何を求める」

「身近で演劇を見ていたいただけさ。それ以上は望まん」

「つまり、一緒に来るということか」

まさかこんな得体の知れない人間と旅をしなければならないのか。ジェリコは正直言っただ嫌だった。

しかし、

「あたしは構わないけど。あたし達がこういう団体で今ここにいることを知られた以上、あんたを見逃すことはできない」

「俺も同感だ。エメ、こいつの気配をしっかりと覚えておけ」

「……」

「それほど警戒しなくともいいのだから。少なくとも敵ではないのだから」

ユーリーは再び肩をすくめながらため息をつく、下がってきた眼鏡を整えた。そしてジェリコたちを一度見回した後、口を開く。

「君らはこれからどこかへ行くのだろう？しかし騎士団が邪魔でこの店を出辛い。そんな折私に会った。そんなところかね？」

「そうだ」

「なら私に任せたまえ。私の術ならば、恐れるに足らん」

「ジェリコ、こいつのいうことを信用できるのか？」

アヤジに突然尋ねられる。今のところユーリーは何一つ嘘をついていない。敵でもなければ味方でもない。確実に信用はできないが、かといって全部が全部信用できないわけではない。難しいところだ。ジェリコが難しい顔をしていると、アヤジはジェリコの考えを察したのか、視線をユーリーに戻した。

「現段階では判断できかねるか。ユーリーとやら。その術はどんな術だ？」

「姿を消す術さ。魔力で体を包み、光の屈折を調節して目を騙すのさ。周りからは透明人間に見えるはずだ。しかし術者である私や被術者である君らには見える」

「そんな都合のいいこと、本当にできるの？」

「できる。魔術に限界は無い」

そう強く断言するユーリーはどこか頼もしく見える。怪しさは変わらないが。

「試しに私の姿を消してみせよう。……行くぞ」

ユーリーは立ち上がり、早口で何かを口ずさむと、ステツキで床をカツン、と叩いた。その瞬間、なんの冗談だろうか、神隠しのように突然ユーリーの姿が消えた。あまりに唐突に消えたせいで、元から居なかったような錯覚さえしてくる。

「どうだね？」

からかうような声は窓際から聞こえた。はつとして振り向くと、ユーリーが先ほどのフォレンティーナのような体勢で窓の外を見ていた。いつの間にか移動していたらしい。

「すごい……！」

知らずジェリコは呟いていた。まるで手品のようである。この高揚感、絵画を初めて見たときと少し似ていた。

「確かに、その術なら大丈夫そうだな。全員分の施術は可能なのか？」

「もちろん。容易いことだ」

アヤジは、何かを決断したのか一人頷くと店の奥にあるカウンターへ行った。どうやら支払いをしているようである。そして店員と何か話しているかと思うと、こちらを振り向いてきた。フェリシアと目線が合うと、手招きをする。

「ああ、支払いね」

フェリシアは合点がいくとそそくさとカウンターへ行った。

窓際から戻ってきたユーリーは相変わらず笑みを浮かべている。そしてジェリコの傍で足を止めた。

異様な気配にジェリコは緊張して固まってしまふ。

そんなことなど気にもせぬように低く、そして軽快な声でユーリーは言う。

「さてどうするか。騎士団が散らばり始めたぞ。頭目二人は向こうの方へ向かって行ったな」

「……」

「そんな目で見ないでくれないか、お嬢さん」

先ほどからエメはユーリーを見つめたままである。ぱつと見はいつもの無表情な顔なのだが、どこか敵意というか、刺さるような気配を放っている。きつとユーリーという男をまだ計りきれていないのだろう。それで警戒の念を解くことができないのだ。ジェリコやフォレンティーナも似たようなもので、ユーリーへの警戒はしている。

しばらくすると、カウンターからアヤジとフェリシアが帰ってきた。

「では行こう。ユーリー、店を出た瞬間に術をかける。先導は俺がする。ユーリーは俺の隣にいろ。いいな」

「承知した」

同時にジェリコ達も頷いた。しかし万が一ユーリーが裏切る可能性もある。その場合は全速力で逃げる羽目になりそうだ。考えれば考えるほど不利な形勢である。

調査団がどこかへ去るまでこの店で時間を潰しておけばいいのだが、残念ながら調査団は散会して街を搜索しているようだ。となるといずれこの店に入ってくる可能性もある。そうなるとめんどろなことの出来ない。

そして一同はアヤジとユーリーを先頭において店を出る。真昼の日差しが瞼に差し込み、思わず目が眩んだ。

「行くぞ。はぐれるな」

喧騒の中、アヤジの声が聞こえた。いつの間にか施術は終わったらしい。本当に店を出た瞬間術をかけたのか。

前を見るとアヤジとユーリーが道を歩いていくのが見えた。ジェリコはその背中を見失わないよう追いかける。人々の間を、草を掻き分けるようにして歩いた。

昼時だからか、街は先ほどよりも人が増えていた。主に小さい子供たちが多く、友人と遊んでいるようだった。何人が固まって町を駆け抜ける姿を見ると、昔の自分が思いだされる。

街を行く人たちは優雅に歩く前方のユーリーを見ることはあっても、透明化しているジェリコ達を見ることは無かった。術は完璧に成功していたらしい。

もちろん人々の間には十字の外套を羽織った人間も居る。昔は正義の象徴に見えたその紋章は、今では死神を象徴する恐怖の対象になっていた。向こうからは見えなはずなのに思わず首をすぼめて歩くジェリコである。

そうしてしばらくの間街を歩き続けた。海からは遠ざかり、代わりに山の頂が視界に入り始める。アトモ山だ。

先ほどまではひしめくように人が居たのだが、今いる通りにはぼつぼつとしかない。だいたい町外れにやって来たようである。

「エメ、調査団はいるか」

アヤジが振り向いて小さな声でいった。エメは静かに首を振る。アヤジはそれを見てユーリーに言った。

「よし。ここまででいいだろう」

「では元に戻すぞ」

カッン、とステッキが地面を叩く音と同時に、目眩のように一瞬だけ視界が歪曲した。自分では分らないが、おそらく元に戻ったのだらう。傍から見れば突然姿を現すわけだが、幸いこちらを怪しんでいるような人間はいなかった。

「それにしてもあんた、よくそんなに自由に魔術が使えるわね。どんな悪魔と契約してんの？それとも無限機関でもあるのかしら」

「詳しいことは秘密だが、そのどちらでも無い。あえて言うなら後者に属するだらう」

「どちらでもない……。ということは道具を使って補強してるわけ？あれだけの術を一瞬で複数に掛けられるということは、かなり強力な道具なんでしょうね」

真剣な顔で話すフェリシアの何が楽しいのか、ユーリーは低い声のトーンを少し上げて笑うと、眼鏡のずれを直した。

「なかなか鋭いお嬢さんだ。研究熱心とでもいうのかな。昔の私を見ているようだ」

「からかわないでほしいわね。どんな道具を使ってるの？参考にしたいんだけど」

「若い身空で知識欲におぼれると密林に潜む巨猿ようになってしまふぞ。それはさておきアヤジとやら。こんなところで足を止めていいのか？教会は留まることは知らないぞ」

アヤジはそうだな、と呟くと、アトモ山の方角に目を向ける。緑豊かなアトモ山は雲を被ることも無く悠然と佇んでいる。

あの山に『揺り籠』という名の大魔術を知る賢者がいるとのことだが、果たしてどんな人物なのだらうか。なかなか興味がある。

そしてユーリーという魔術の達人の存在。頭の上からつま先まで怪しい謎の人物。敵ではないらしいが、どこまで信用していいのやら。できればついでに魔術を教えてもらいたいものだが。後で尋ねてみるか。

一行は奇妙な仲間を一人加えてモンツアの街に行く。賢者の待つ

アトモ山へと。

#22・賢者

アトモ山に入った一行は最初登山道を歩いていた。そして山の中腹辺りに来ると、道はずれ低い草の茂る藪の中へと飛び込んだ。そのまま草を掻き分け鳥のさえずりを聞きながら歩き続けると、小さな川が目に入った。清流のようで、時折魚の姿が見えた。

そうして今度はその川に沿って上流へと向かった。えっちらおっちらと歩き続けると、次第に足元が踏み鳴らされた轍へと変わっていった。どうやらこの近辺に根を下ろしている人間がいるようである。おそらくアトモ山の賢者だろう。

轍の上を歩いて十分ほどだろうか。視界に平屋の小屋が見えてきた。

「着いたぞ。あそこだ」

先頭を歩くアヤジが言った。どうやら無事に到着したようである。小屋の前までやってくると、随分と年季の入ったものであることがわかる。傷だらけで、ところどころ穴が開いている。しかし木材の組み方は複雑でちよつとやそつとじゃ崩れそうになさそうだ。

「それにしても、臭うなあ」

ジェリコは思わず顔をしかめた。何か가가腐ったような、血がかしくなったような異臭が先ほどから鼻を刺激している。煙突からは煙は出ていないが、きつと何かおかしなものを調合しているに違いない。

「この程度の臭いで文句垂れるんじゃないわよ。酷いものなら数秒嗅いだけで倒れるくらいのガスだってあるつてのに」

ジェリコの言葉にイラついたのか、フェリシアが噛み付いてきた。確かに、錬金術師であるフェリシアにとって調合の際に生じる異臭は慣れているのだろう。しかし数秒嗅いだけで倒れるものまであるとは恐ろしい。そうまでして研究を続ける錬金術師というものはやはり奇異な存在だとジェリコは思った。

「挨拶してくる。ちょっと待ってろ」

アヤジはそう言つと、遠慮会釈も無くドアを開いて中へ入つていった。無作法だと思つが、賢者とはそれくらい当然の仲なのかもしれない。

「あら？ ユーリーさんがいないわ」

「え？」

フォレンティーナの言葉に釣られて周囲を見回すと、確かに姿が見えなかった。一体どこへ消えたのか。

「あ、いたわよ」

発見したのはフェリシア。彼女の細い指が示す先には確かにユーリーの姿はあつた。

しかし、なぜ木に登っているのか。しかも太陽の方向に両手を広げている。よくもまあ不安定なあの場所で堂々と立っていられるものだと感心するが、実に奇妙である。

ユーリーの行動に興味を惹かれたのか、フェリシアは木に近づいて下から声をかけた。

「ちよつとあんた。そんなところで何やってんのよ」

「――」

「おい、聞いてんの？」

「――んんっ！」

突然ユーリーは全身を一瞬痙攣させた。電気が走つたように、ほんの僅かな時間。

そしてユーリーはゆっくりと振り向いた。

「いや、久々に実に美しい景色だったもので。感動した」

ユーリーは満面の笑みで意味不明なことを言つた。はつきりいつてそんな美しい景色ではない。どこにでもあるような山の景色である。木の上から登つて見下ろせば多少心惹かれるものがあるのかもしれないが、感動するほどではない。

木から下りてきたユーリーは上機嫌で鼻歌なんぞを歌っている。正直ジェリコ達はユーリーの不気味な行動に付いていけず、思わ

ず無言になっていた。

しかし、そんな沈黙を破るものが現れた。フェリシアである。

「あんだ、頭大丈夫？」

単刀直入なその言葉に、ユーリーは笑いながら答える。

「無論、正常だ。脳に必要な糖も十分に足りている。傷も無く、痛みも無い。いわゆる健康だ」

「いや、そういう意味じゃないんだけど……」

あのフェリシアをここまで戸惑わせるユーリーはやはり不思議な人物である。ジェリコは妙に感心してしまった。

「光合成でもしてたのかしら」

「そうかもね」

フォレンティーナの言葉にジェリコは同意していると、ユーリーは「言い得て妙だな」などと言う。ますます謎だ。

そんなやり取りをしていると小屋からアヤジが現れた。その後ろにはジェリコくらいの身長 of 老人が杖を持ってこちらへやってくる。彼が賢者なのだろうか。

老人はアヤジの隣に並ぶと、くぼんだ瞼の奥にちらりと覗く瞳でジェリコ達を見回す。

老人はひとしきりジェリコ達を見た後、髭をさすりながらフェリシアを見つめていた。

フェリシアは「何だこの爺」とでも言いたげな瞳で老人を睨みつけている。初対面の相手くらいいきちんに対応して欲しいものである。二人の視線がぶつかりあっていると、痺れを切らしたのか老人が口を開いた。

「お主、グルトーンの血を引いておるな。きな臭いがするのう」

老人の言葉にフェリシアは片眉を跳ね上げた。

「あたしを侮辱する気？ 殺すわよ」

懷に手を忍ばせたフェリシアを見て、老人はすっと枯れた手を出して彼女を制した。

「まあ待て。彼奴を貶すつもりはない。ただつい懐かしくてのう。」

それはさておき」

次に老人は眉間に皺を寄せつつジェリコの方を向いた。

「お主がアルカンジェロの倅か。ふむ、確かに面影はある。にしてもこんな小童が秘現を背負う存在とはな」

老人はそう言っただけ息を一つついた。

アルカンジェロとは父の名である。だがジェリコは名前しか知らないし、どんな仕事をしていたのかも知らない。どうせろくな職に就いていないのではないかと思う。老人の口ぶりからすると、父と老人は見知った顔らしい。ということは父は錬金術師だったのか。

——因果なものだ。さして父親に興味が無いジェリコは、その程度しか感じなかった。

「うなじを見せろ。鍵穴があれば、おぬしは本物よ」

ジェリコは何が何だか分からないが、アヤジにも促されて仕方なく背中をむいた。そして服の襟を広げた。

「ふうむ」

老人にうなじを覗かれるという傍から見れば奇妙この上ない状況だが仕方が無い。恥ずかしいが、ジェリコにはどうすることもできない。

「ヘミングウェイ、どの増幅器が必要だ？」

「この紋は第三の鍵じゃな。トリコの増幅器を持って来い」

「トリコだな。取って来よう」

アヤジはそういつて小屋の中へ消えていった。

それにしても理解のできない会話をするのはやめて欲しい。せめて一体自分が今何をされているのか、これからどうなるのか説明をして欲しい。

そんなジェリコの気持ちを知ってか知らずか、ヘミングウェイと呼ばれた老人はジェリコの背中に話しかける。

「アルカンジェロの倅よ。お前は残念ながら選ばれた。お前は望んでか知らぬが、この世に生を受けたときには齒車は合致していたのじゃ」

「だからどうということなの？せめて説明してよ」

「ふむ、よかるう。アヤジが鍵を持ってくるまでしばらくかかるしな。その間お主のことについて教授してやろう」

「私達はいてもいいのかしら？」

言ったのはフォレンティーナ。自分たちが聞いていいことなのかどうか計りかねているのだろう。

老人は「構わん」と即答すると、一度咳払いした。

「そういえば自己紹介が遅れたな。わしの名はヘミングウェイ。昔は錬金術師として書物を書いたり世界を旅したりしておったが、今は見ての通り枯れ果てた老人じゃ。ここ最近は隠居しておったが、アヤジに頼まれて久々に釜に火を入れた次第じゃ」

「まさかあなた、星紋智学で有名なヘミングウェイ？」

切り出したのはフェリシア。錬金術師同士、話が分かるのだろう。

「いかにも。星紋智学はわしが生み出した学。今はもうお主の先祖が組み立てた構成真理に喰われてしまったがのう」

「じゃああなたほんとにあのヘミングウェイなの？一体今何歳なのよ」

信じられないといった面持ちのフェリシアに、ヘミングウェイは落ち着いた声で答える。

「さあな。百を越えてからは数えておらんわ。……さて、アルカンジェロの倅よ、話の続きじゃ」

「僕の名は、ジェリコだ」

「ふむ。ではジェリコよ。お主のうなじにはレメゲトンと呼ばれる鍵穴がある」

「レメゲトン？」

うなじをさすりながら鸚鵡返したジェリコにヘミングウェイは浅く頷いた。

「大昔、七十二の悪魔を使役し王の座に君臨した魔王がおつてな。名前は未だ不明じゃが、わしらは七十二悪の王と呼んでおる。レメゲトンとはその魔王が生み出した、情報の圧縮・封印を施す魔術の

ことじゃ。ちなみに現在術式は第七まで発見されておる」

「つまりジェリコの首のあざには何らかの情報がみっちり仕込まれてるってこと？」

フェリシアが難しい顔をして言った。ヘミングウェイは頷く。

「その通り。レメゲトンはこの世のどんなものにも施すことができる。情報を魔力で圧縮、暗号化し、被術物と同化させるのじゃ。

そして圧縮封印した情報は、鍵穴を開くことによって確認する」

「ジェリコと同化しているのなら、ジェリコはレメゲトンの情報を知ることができるのでは？」

次に尋ねたのはフォレンティーナ。確かにそうである。ジェリコと同調しているのなら、レメゲトンというものを認識してもおかしくはない。

しかしヘミングウェイは首を横に振った。

「それは無理じゃ。例えば術を受けたものでも、鍵穴を開放せぬ限り中身を知ることとはできん」

「何でそんなものが僕の背中にあるの？ 一体何が封じられているんだ？」

ジェリコは気になっていたことを口にした。なぜ自分はこんなわけの分らないものを背負っているのか。

「それは運命だからじゃ。ただの偶然。屋根から垂れてきた小さな雫に頭を打たれるようなものじゃ」

ヘミングウェイは予想通りの返答をした。俯きながらジェリコは鼻でため息をつく。

「そしてレメゲトンの中身に関してじゃが、今日までレメゲトンを施すことができる存在は七十二悪の王ただ一人。まあ七十二もの悪魔を使役できる力を持った者が作った術じゃ。そう簡単に扱えるわけも無い」

ヘミングウェイは一度言葉切って続けた。

「故にレメゲトンに封じ込められた情報とは、七十二悪の王が封じ込めた情報ということじゃ。これがどういう意味か分かるか？」

ヘミングウェイの問いに、ジェリコは答えることができなかった。墓、答える術を持っていなかった。ヘミングウェイはふむ、と仕方が無いといった面持ちで唸る。

「つまり、レメゲトンという超難解な魔術を行使してまで封じ込めた情報なのじゃ。その内容は極めて貴重かつ重要。現在の魔術、錬金術に大きな革命をもたらすに違いない、まだ見ぬ宝石の原石なのじゃ。故に多くの魔術師その他の人間は、レメゲトンに対して貪欲なのじゃ」

「私もレメゲトンという言葉は知っていたけど、そんな内容だったとはね」

真剣に話を聞いていたフェリシアは、感心したように呟いた。

「けど妙ね。その七十二悪の王は何でジェリコに術を施すことができたわけ？ 遙か未来の人間にも術は施せるわけ？」

フェリシアの疑問は尤もだ。当然のことながら七十二悪の王はもう生きては居ないだろう。しかし彼の術が現にジェリコの首にあるのだ。一体どうということなのか。

「おそらく悪魔の能力を応用したものであろうが、レメゲトンに制限は無い。術の対象を想像した人物にすることも可能じゃ。確かお主は第三の鍵穴じゃったな。つまり第三のレメゲトンということ。

その被術者は『イセ暦一四五二年、草原を瞳に宿し青い地平線の大地から生まれし者』であつたはず。すなわちお主の事じゃ。お主がこの世に生れ落ちたその瞬間、レメゲトンが発動したのじゃ」

「そう……」

何となく分からないが、何となく納得してしまったジェリコである。正に運命。どうしようもないことなのだといひ加減ジェリコは感じ始めていた。自分で言うのもなんだが、悟りかけている気がする。

ヘミングウェイは再び口を開く。

「続いて今回の秘現——所謂揺り籠のことじゃが、これとお主がなぜ繋がっているかということを説明してやろう」

自分の運命を悟りかけているジェリコにとって聞いても聞かなくとも変わらない気がするが、ジェリコは無意識のうちに首を縦に振っていた。

「揺り籠とはピュリノス・インディゲーターという魔術師が編み出した大魔術のことじゃが、この術には第三のレメゲトンが密接に係しておるらしい」

「どういうこと？ 僕が聞いた話じゃ魔力の無限機関が関わってるって聞いたんだけど」

「もちろん、術の起動には膨大な魔力量が必要じゃから無限機関は必須。それはあくまで最低限の必要条件じゃ」

「じゃあ他にも理由があるっていうこと？」

「いかにも。わしも詳細まで知らんが、文献によるとピュリノスは『過去未来現代を自由に行き来できる』という馬鹿げた事をすることが可能じゃったらしい。そして揺り籠に関する様々な書物を読んでいくと、たびたび『第三の情報装置』とか『三番目の器』という言葉が出てくるのじゃ。そして色々と研究した結果、それはどうやら第三のレメゲトンではないかというところに落ち着いた。後は今の通りよ。あらゆる願いを叶えられる揺り籠を発動するために必要な材料を探している魔術師達がお主を見過ごすわけあるまい。教会も同様。これが今回お主に降りかかった災厄の概要じゃ」

つまり貪欲な彼らは、己の欲望を満たすそのためにジェリコを手に入れようとしているのである。なんだ。今まで言われてきたこととなんら変わり無いじゃないか。ジェリコは拍子抜けすると共に残念な気持ちになった。

『誰かが幸せになるには誰かが不幸にならなきゃならない』そんな言葉を誰かが言っていた気がする。

ジェリコは皆が幸せになれたらいいなと願っている。

——けど、それは本当なのか？ 本当は自分が幸せになりたいのではないのか。

また頭の中がぐるぐる迷走し始めた。考えることは苦手ではない

が、堂々巡りは嫌いである。幼い頃の古傷が再び開きそうで、ジェリコは考えることをやめた。

同時にフェリシアが一つの疑問を口にする。

「あのね、ところで鍵穴に差し込む鍵はあるわけ？悪魔の力を借りた超難解魔術を開く鍵を、あんたは持っているの？」

「わしにとつて、この世のあらゆる鍵に対しては絶対の権限を持つておる。レメゲトンもその例外ではない」

「どういうことよ」

訝るフェリシアに対して、老人はにやりと笑った。

「概念魔術という言葉を知っておるか？」

「概念魔術ですって！？」

またわけの分からない単語が出たとジェリコが思っていると、突然フェリシアが驚愕の叫びを上げた。その様子を見てヘミングウェイはほう、と少し驚いた様子だった。

「大昔の禁呪法に属する言葉を知っておるとは、さすがはヴルトーンの血筋というべきかな」

「どういうこと？」

ジェリコは話についていけない。普通の魔術とどう違うのか。

額に一粒の汗を浮かべながらフェリシアはジェリコの方を見る。

「例えばあんたは人の嘘やほんとは分かるでしょ？けどそれは自分の意思とは無関係に起こっている。概念魔術ってのは、そういう神通力に匹敵する能力を魔術化したもののことを言うのよ」

「簡単に言えば神代の魔術。忘れられ、人の歴史の奥深くに閉じ込められた知識。詳しく話すにはあまりに時間が足らぬから省くが、わしは『開く』概念魔術を扱える」

「開く、概念魔術……」

「そう。魔力次第であらゆる対象を『開く』ことができる。レメゲトンを開くには途方も無い魔力が必要じゃが、わしが長年の研究で作り上げた増幅器を用いれば可能じゃ」

いまいち内容がつかめないが、とにかくレメゲトンを開くことが

できるらしい。

「トリコの増幅器を持ってきたぞ」

小屋の奥から黒い影がぬつと現れた。アヤジだ。その手には黒く輝く石がはめ込まれた指輪のようなものが二つある。

ヘミングウェイはその二つの指輪を受け取ると、両手の親指にはめ込んだ。

「ちょうど話も区切りがついた。では、レメゲトンを開くことにしよう。小屋に入れ」

ヘミングウェイに促され、ジェリコ達は小屋の中へと入っていった。

#23・落ちる錠前

「一つだけ聞かせて欲しい」

小屋に入るなりジェリコは言った。ヘミングウェイがゆっくりと振り向く。

「レメゲトンを開くとどんなことが僕に起こるの？」

そう。レメゲトンという圧縮された情報を開くと自分はどうなるのか。ただ膨大な量の情報が頭の中に流れるのか。そうだとしたらその情報量に自分の脳は付いていけるのか。

いや、それ以前にどんな情報を封じられているのか。『情報』という曖昧な定義のモノを開放するということは、危険な行為なのではないか。

文章のように無数の文字、言葉も一種の情報であり、この世に存在するもの——人、動物、植物、虫、物等もある意味『情報』だろう。

そんなあやふやなものを勝手に開放されて何か起こったら一体どうするつもりなのか。よく分からないが、最悪命に関わる気がする。ジェリコの問いに口を引き結んだままのヘミングウェイは、しばらくジェリコと視線を合わせた後、再び前を向いた。

そして、不吉な答えが返ってきた。

「——それは、分からね」

「え？」

ヘミングウェイの答えにジェリコは頓狂な声を上げた。同時に心臓がどくりと波打つ。

「レメゲトンに何が封じ込められているのか誰にも分からね。故に開いて見ぬ限り何が起きるか分からね」

「そんな……」

「昔、分厚い本に施された第二のレメゲトンを開いてみたが、そのときはとくに何も起きなかった。開かずの表紙がひとりでに開いた

くらいじゃな。まあ安心せい。母体が死ねば腹の中の子も死ぬように、被術者が死ねばレメゲトンも死ぬはずじゃ。おぬしが命を失うことはまずないじやろう」

「本当かな……」

意気消沈するジェリコを尻目に、ヘミングウェイはさらりと言う。「わしの勘はハズレを知らん。宝箱を開くような気でおればよかるうて」

ヘミングウェイは嘘を言っていない。多少心配だが、信じるしかない。自分とは生きている時間も世界も天と地の差があるのだ。自分の経験でものごとを判断せず、老齢の賢者の判断に身を任せよう。正直逃げ出したいが。

小屋の奥には魔方阵らしきものが刺繍された真つ赤な絨毯があり、その上にポツリと佇む背の無い大きな椅子にジェリコは座らされた。ヘミングウェイは「目を閉じる。術が終わるまで何が起きてもその椅子から離れるな」と言うと、ジェリコは再び心臓を波打たせた。ヘミングウェイは死なないと言った。しかし、植物人間のようになったりはしないのだろうか。文字通り生ける屍。そんな死んだも同然の状態になるのではないかという恐怖を、ジェリコは先ほどから拭えないでいた。

「あんだ、怯えてるの？」

フェリシアが言った。言われてはつとすると、ジェリコは体が震えていることに気づいた。

シワシワになっていいる分厚い本をめくりながらヘミングウェイはちらりとジェリコをみやった。そして再び書物に目を戻すと、

「何も知らない常人が魔術を恐れるのは至極当然。むしろ恐れるべき、忌むべきモノだ」

ヘミングウェイは続ける。

「しかしお前は常人ではないのだ。気持ちの面では『少年ジェリコ』かもしれんが、お前の本質的存在価値は『魔術師ジェリコ』だ。生まれながらの魔術師は、何が起きようと死ぬまで魔術師だ。アルカ

ンジェロはただの人であつたが、お前は違う」

ヘミングウェイは魔術師ジェリコ、という言葉強く言った。そしてヘミングウェイの言葉に反発する気が起きない辺り、やはり自分はもう普通の人間ではないと認め始めているようだった。それが今までの自分を否定しているようで、少し厭な気分になった。

「わしは自身を持っていつておるのじゃ」

ヘミングウェイは予想外の言葉を放った。

「真の意味で自分がもつとも得意とする道を歩むことが人生を極める秘訣じゃ。お主が将来その手に何を持つのかわしの与り知らぬところじゃが、魔術師としての素質は非常に恵まれておるとだけ言つておこつ」

「魔術師になれつて言っているわけ？」

「そうではない。しかしお主は言つてみれば『魔術』に祝福された人間のようなものなのじゃ。もしお主が得意とするものがあるならば、その分野の根源的な意思に祝福された者といえは解りやすいじやろつ」

つまりジェリコで言えば絵の神様に祝福された人間と位置的に同じという意味だ。これまで数々の名画を生み出してきた巨匠は、間違いなくその道の才を与えられている。自分も巨匠と似ているという点に関しては誇らしいが、いかんせんその道が魔術というのが嬉しくない。まるで自分は絵の才能がまったくないと言われているような気がして、むしろ腹立だしい。しかもジェリコは今魔術を欲している。その双反する現実と意思がジェリコの中で戦争を繰り広げていた。

ヘミングウェイは話を続ける。

「故に恐れるな。おぬしほど魔力まみれの存在が魔術を恐れ否定してしまえば、どんな災厄がふりかかるか分からんぞ。魔術に殺されたくないければ、逃げるのではなくむしろ自分がそれを扱うつもりで臨むしかない。どんな分野でも言えることじゃが、『技術』は使うものであつて使われるものではない。それだけは忘れるな」

技という言葉は広い意味を持つが、本質的には知識や世界の法則に裏打ちされた数式のようなものだと思う。それには相性があり、人は自分が求める技との相性にしばしば悩まされる。技に遊ばれることほど恥ずべきことないだろう。

そして、技とは使うものである。使わなければ意味が無い。それはつまり自分と相性のいい技を使わないということはあまりにも勿体無いということだ。それは絵描き見習いであるジェリコには痛いほど分かる事実だった。

しかし、自分の命を脅かすものを求めるのはどうだろう。自分の願望を強く求め、それを手に入れるための力を求め、もし自分自身がその力に食われてしまえば元も子もないではないか。

そうなると今度は、その力を支配できる体を求めてしまう。強い体を。力を。つまりそれは、

「——強くなりたいたい」

今までずっと胸に秘めていた言葉を、初めて口にした。そしてヘミングウェイが答える。

「ならば耐えることじゃ。人は、耐えることによって強くなれる。心も、体もな」

くだらん話は終わりだ、と言うようにヘミングウェイは古文書をぱたんと閉じる。はっとして我に返るジェリコ。術の始まりを予感した。

ヘミングウェイは静かながらも厳格な声で言う。

「今からジェリコのレメゲトンを開く。何がおきるか分からん。ジェリコはもとい、周りの人間も死を覚悟しろ。よいな」

ヘミングウェイの真剣な顔に気圧されつつ全員が頷く。いや、ユーリーだけはどこ吹く風でへらへらしているが。

ヘミングウェイは静かに目を閉じた。そして不思議な言葉を一つ一つ確かめるようにゆっくりと紡ぎ始める。

——小さな五指には輝く海原、深海に根ざすは太陽の誇り——

しゅううう、と魔方陣から煙が立ち込め始める。ヘミングウェイは変わらずゆっくりとした速度で詠唱を続ける。儀式の始まりに、ジェリコの胸はどくりと鳴った。

——かの目に映るは白金の時、開闢されしは異国の故郷——

妙な韻を踏んだ言葉だ。詩のような、異国の經典の言葉のような。魔術の発動にはこうした妙な言葉の羅列が必要なのだろうか。自分はこんな難しそうな言葉を覚えられるだろうか、と妙なことを気にしているジェリコであった。

——風の理に雷を孕ませ、鉄の嘶きに赤子が微笑む——

「ぐっ！」

突然ジェリコの背筋に痛みが走った。神経に直接触れたような、痺れるような痛覚。その感覚は次第に全身へと広がっていく。ひりひりするような、氷の滝に打たれているような真っ白な痛みだ。このまま感覚の無い体になってしまったらどうしよう、とジェリコは心配になった。

そして魔方陣はうつすらと輝き始め、いよいよ異様な気配が満ち始めていた。

——そして言葉は歪に象る、幻想を満たす旋律として——

「あぐうあああ！」

麻痺していた体に突き刺すような痛み——いや、痛みというか異感覚？異物感？分らない。とにかく首に何かを無作為に突き刺されたような、痺れた足に貫くほど爪を立てられたような、そんな苦しみがジェリコを襲った。白光のような激痛と呼ぶべきその感覚に、

ジェリコは思わず頭を垂れる。

「何あれ、首が光ってる」

フェリシアの声。どうやら自分の首が光っているらしい。

「鍵が開こうとしているのだ。つまりあの光は中身から漏れ出して来た魔力の迸りだろう」

冷静なアヤジの声。そんな落ち着いた声に腹立つジェリコだが、嘔み付く余裕など今は全く無かった。とにかく体が苦しい。もはや痛みという枠を超えてこの場に居るのが辛い。逃げ出したい。この椅子から飛び降りたい。ベルガモに帰りたい。ダニエラに会いたい。絵を描きたい――！

「ジェリコ、大丈夫？あんなに悶えて……」

自分は身悶えているらしい。そんなことまったく分からない。もう体が火の玉になってしまったようだった。首から始まった絶望の感覚は全身に広がり、すべての感覚がその痛覚に統一されてからはどこが手で脚で指で頭なのかまったく分からない。ただ、この場を動いていないということは理解できていた。意識だけは嫌というほどはつきりしている。

「これは貴重だ。後でこの光景を記しておかなければなるまい」

実験動物を舐めるように観察しているようなユーリーの声。ああ、そうか、勝手にしてくれ。記すなりなんなり勝手にしていいから、ここから開放して欲しい……！

――ぬるり。

「はぐっ！」

感覚がほとんど失われた首筋に、突然生々しい痛みが息を吹き返した。ジェリコは思わず声を上げると、力いっぱい閉じていた目を見開いた。目の前には汗だくのヘミングウェイと明らかに異常な環境に変貌した周囲を確認できる。

赤い稲妻がばりばりと迸り、自分を中心にして煙が渦を巻いている。爆発する寸前の爆弾のような輝きが小屋を明滅させ、術の発動はもう目と鼻の先だと宣告している。

なにより自分の首が痛い。ぬるぬるして気持ち悪い。そもそもな
ぜぬるぬるしているのか。首にそんな要素はこれっぽっちも無いは
ずなのに。無数のナメクジが這い回っているような、粘膜質な穴か
ら何かが這い出てくるような、吐き気をもよおす気持ちの悪さだ。
そんな地獄に耐えながら、ジェリコは再びヘミングウェイを見る。
目を閉じ、両手を合わせ、全身全霊で念を込めている姿は正に魔術
師だ。自分の命を引き換えに術を唱えている印象を受ける。

「――時は来た！」

ヘミングウェイは目を開くと、右手を空へ、左手を地面に指し、
そして両手を組んでジェリコに向けると、最後の言葉を放った。

―― 跪け、我が名はアーネンブルゲ――

その瞬間、光が、生まれた。

そしてジェリコの全身を束縛していた苦しみは解かれ、せき止め
られていた血液が濁流となって身体に染み渡っていく。指先から感
覚が蘇り、朦朧としていた意識から霧が晴れていくのがわかる。

まばゆい光はジェリコの首へ次第に収束し、完全に光が消えると、
辺りは術を始める前の状態に戻った。

暖炉の火が爆ぜる音、薬品独特の鼻をつく臭い。先ほどの派
手な演出なんて嘘のような、異様な静けさが辺りを再び包み込んで
いた。

――ただ、周囲の人間の目だけは、驚愕の色を孕んでいるが。

「こいつは何だ、ヘミングウェイ」

まずアヤジ。

「黒い、女？」

次にフェリシア。

「ふむ……」

ユーリーは小さく唸る。

「この悪寒が立つ魔力の進り。まさかこやつは……！」

あのヘミングウェイが口ごもる。あきらかにおかしい状況に焦ったジェリコは、すぐさま後ろを振り返った。そして椅子を蹴り転がしながらその自分の首から生まれたであろう存在から離れる。

「こ……！」

言葉を失った。目の前には『黒い少女』が宙に浮かんでいた。

天井に首を吊らされているような体勢だが、明らかに自身の力で浮いているようだ。そして、黒い。吸い込まれそうな黒さだ。体の線は少女のそれだが、すべてが黒すぎてあまりにも異質だ。立体的な影というものがあれば、まさしくこの姿を指すに違いない。

その一点の光の無い黒い人型を見つめていると、突如く回りと回転して少女がジェリコの方を向いた。突然の事にジェリコは思わず後ずさる。

「……」

先ほどまでの疲労感はどこへやら。ジェリコは完全に身構えて臨戦態勢を取っていた。こいつは、明らかにおかしい。危険な存在である、ジェリコの頭の中は警鐘が鳴り響いていた。

「！」

少女は目を開いた。左目は翠色。右目は紺色。のっぺらとした黒い空間にいきなり浮かぶその両目に気圧され、ジェリコは再び一歩後ずさる。背中に冷たい汗が一筋流れた。

「……」

すう、と少女は魔方陣の中心に降りた。自分より背が低い。そんなつまらないことを脳裏の片隅に思ったジェリコだった。

少女はずっとジェリコの瞳を見つめている。瞬きすることなく、ずっと。

そして一歩ジェリコに近づいてきた。同時に一歩後ろに下がるジェリコ。

それが数回繰り返されると、あっという間に壁に到達した。もう下がない。黒い少女は目と鼻の先だ。

ジェリコはちらりと少女の後ろに控える仲間たちを見た。助けて

くれと目配せしたのだが、仲間たちは少女のあまりの異質さにたじろいでいるのか無言でジェリコと黒い少女を見つめているだけだった。

「！」

そして少女は細く黒い手をそつとジェリコの頬に添えた。驚いたことに、少女の手は温かかった。少女はあっけにと取られているジェリコを面白いものでも見るように見ると、驚いたことにその場に跪いた。そして、小さな口を開く。

「こうして会うのは初めてですね、主よ」

ジェリコの思考は、そこで完全に停止した。

#24・知識の会合

「主……？」

渴いた声で呟いたのはフェリシア。声にこそ出ないが、ジェリコも彼女の気持ちとまったく一緒だった。

黒い少女はジェリコを前にして片膝をつき頭を垂れている。まるで王を前にした騎士のように。

「あの、君は一体……」

ジェリコの問いに黒い少女は顔を上げた。色の違う大きな瞳がぎよろりとジェリコを見つめる。

「忘れたのですか？私はあなたの使い魔。第一の悪魔、リュドリヤです」

そんな突飛も無いことを言うリュドリヤという黒い少女を、呆けた顔でジェリコは見つめる。ジェリコの表情を見たリュドリヤは若干不満の念を込めた顔でゆっくりと立ち上がった。

「まさか本当に覚えていないのですか？やはりソロモンに器を破壊されたのがまずかったようですね」

ソロモン？破壊された？一体こいつは何を言っているのだ。

ジェリコはまったく話についていけない。しかしリュドリヤは顎に手を当ててどうしたものかと何やら一人で考えている。

——このままだと話に進展が無い。何か質問をしなければ。

「君は一体何者なの？人間じゃないよね？僕のことを主なんて呼んでいるけどどういうことなの？」

一気に質問をしたジェリコをリュドリヤは嫌がることなく即答する。

「私はあなたに創られた最初の使い魔です。こうして共に在るのはかれこれ何年になるのでしょうか。もちろん人間ではありません。俗にいう悪魔です」

「悪魔だと……」

言ったのはアヤジ。他の仲間も動揺の色を隠せていない。もちろんジェリコもだ。

神と相反する存在、悪魔。一般的には災厄をもたらす畏怖すべき存在。たまに手を貸してくれる酔狂なものもいるらしいが。

正直信じられたものではないが、リュドリヤのその風貌を見てみると納得せざるを得ない。この禍々しい『黒』は、間違いなく悪魔とか化け物とかそういったものの類の気配だ。この見るものに異様な恐怖を植えつける、沁みこんでくるような冷たい意識は明らかに人外のものだ。

「主よ。あなたは昔の姿を完全に忘れてしまっているようですね。さて、どうしたものか。こんなところで油を売っている暇は無いですね。とりあえず外に出ましょう」

一方的に話を進めると、リュドリヤはジェリコの手を取り玄関へ向かおうとする。思いのほか強い力に驚きつつも、ジェリコは踏みとどまる。

「い、いや、ちょっと待って。そんなことより、君は何をするために現れたの？君はレメゲトンという魔術で封じられていたようだけど、何かあったの？」

リュドリヤは振り返ると早口で答える。

「私と主は力を危険視されソロモンに封じられました。私と主は唯一ソロモンの絶対指示に逆らうことができる悪魔でしたから。主はソロモンに謀られたのです。そして主は人間に転生させられ続け、悪魔としての存在を永久に封印させられました。そして私はあの忌々しい術……レメゲトンに無理やり封じられました。まさか主の首の中に眠っていたなんて思いもありませんでした」

リュドリヤの話を聞いていてジェリコは愕然としていた。それはある単語によって引き起こされた感情。

「ジェリコが、悪魔……」

震える声でフォレンティナは呟いていた。ジェリコは身体が震えているのが分かった。歯が浮つき、がちがちと不協和音を鳴らし

続けている。頭の中はリュドリヤの姿と正反対に真っ白である。

「ぼ、ぼ、ぼ、僕が」

額から汗が流れる。

「あ、悪魔だつて？」

震える声で何とか呟いたジェリコなどお構いなく、何を当たり前のことを、という風な顔でリュドリヤは言う。

「そうです。支配侯エロドウエッテ。魔界の影に隠れ続けた、真の王です」

「は……」

話に、付いていけない。ジェリコは思わず頭を抱えた。

「貴様の目的を聞かせてもらおう」

唐突にアヤジは言った。リュドリヤを中心に話が進んでいることを危険だと考えたのか。

リュドリヤはアヤジの方を向くと、汚らしいものでも見るようにうつすらと目を細めた。

「私の目的は主と共に魔界に帰ること。それだけです」

「それは困る。ジェリコには俺達と共に来る必要があるからだ。ジェリコの使い魔といったな。ならばまず主人であるジェリコの意思を確認したらどうだ」

アヤジの鋭い指摘にリュドリヤは一瞬沈黙した。そして「確かに」という風に頷く。

「最もな意見です。幾世紀ぶりに目を覚ましたせいで、落ち着きを無くしていたようです。では主よ」

リュドリヤはジェリコを真っ直ぐに見た。瞬きをしない瞳に見つめられると、息が詰まる思いがする。

「いざ、ご命令を」

——沈黙が、訪れた。

全員の視線を一身に受け、ジェリコの額にはじわりと汗が浮かぶ。たまらず視線を泳がすが、真剣な表情の仲間たちから逃げられはしなかった。

命令なんてできない。ジェリコはそんな身分じゃないし、したこともない。ましてや相手が悪魔だなんてもう想像がつかない。

そもそも自分が悪魔だというのがおかしい。確かに今日までの生活を振り返って、妙な星の下に生まれたことは間違いない事実だと思う。だが信じられない。ありえない。ジェリコは生まれたときから人間だ。親の顔を覚えていないが、それでも人の子だという事実には間違いはないだろう。

しかし腹の立つことに、今回も例外なくいつもの『声』は頭の中から囁いていた。リュドリヤの言葉に『嘘』は何一つ無いと。この声のせいで、かすかな希望はいつも先手によって碎かれる。

「さあ、ご命令を」

催促してきたリュドリヤから目を逸らすと、その先にはフェリシアがいた。

上目遣いでジェリコを睨んでいるフェリシアはいつものように腕を組み、無言の威圧感を放っている。自分じゃなくてフェリシアならぴったりの役柄なのにと、臍を噛むジェリコである。それにしてもあの小さな錬金術師の頭の中は今何を考えているのだろうか。

そんなことを考えていると、ジェリコはふと冷静な気持ちになった。目つきは悪いが落ち着き払っているフェリシアに同調したのかもしれない。ジェリコは一つ一つ確認しながら考える。

一つ、ジェリコはこの悪魔がどんな存在でどんな力を持っているのか全く知らない。故に素性の知れない相手に特定の命令をしない方がいい。それは危険極まりない行為だ。

二つ、この悪魔はジェリコの命令に対して極めて忠実なようだが、少なくともジェリコを傷つけるようなことをしないだろうし、話しぶりや行動を見る限り暴れん坊では無い気がする。事前にしっかりと説明をすれば、それに基づいて当たり障りの無い行動を執ってくれる気がする。

つまりこの悪魔は危険ではないが危険な悪魔だ。ジェリコ次第で文字通り悪魔になってしまう存在。いや、悪魔なのだが。

ならば一先ず「何もせず、ただ付いて来い」と命令すればいい。
何かおかしい行動をしたら都度命令して今の生活に順応させていけばいいだろう。

そう思い至ったジェリコは跪いているリュドリヤに向かって言う。
「とりあえず、僕たちに付いて来て」

「はあ？何それ」

先に返事をしたのはフェリシア。拍子抜けした、とでもいうような明らかに馬鹿にしたような声色だった。

「分かりました」

しかしリュドリヤは文句一つ言わず答えると立ち上がった。

「私は使い魔。どこまでも主にお供します」

「ほんと、へんな使い魔ね。一体どんな力を持っているの？」

何かと面白くなさそうなフェリシアはふてくされた顔で言った。

「そうだな。封じられるほどの悪魔ならばそれなりに力を持っているはずだ。ジェリコのことを悪魔だといったことも気になる。支配侯エロドゥエッテと言っていたな。それについても説明してもらいたい」

「主よ。今の二人の問いに答えてもよろしいですか？私は自分の能力を見ず知らずの者に話すのには抵抗があるのですが」

フェリシアとアヤジの問いにリュドリヤはあきらかな嫌悪感を抱いたようだ。

しかしジェリコ自身、リュドリヤがどんな存在なのか知らなければ、考えたくも無いが――悪魔であった頃のジェリコのことにも気になる。ジェリコは少しだけ考えた後「僕もいろいろ知らないから、答えて」と言った。しかしリュドリヤはやはり乗り気ではないようで、ため息を一つついた後、あなたが言うならとでも言いたげな顔で「分かりました」と呟いた。意外と我が強い性格なのかもしれない。

「あ、それから」

ジェリコは言い忘れていたことを思い出した。リュドリヤの見た

目のことだ。

「その姿ってどうにかならない？ そうあからさまに人間離れた姿をされると、こう、話し辛いというか、ちょっと抵抗があるんだ」
するとリュドリヤは、一体ジェリコの言葉の何が面白かったのか小さくうふつ、と笑った。その静かな笑い方が、どこかダニエラと似ていてわけも無く胸が痛んだ。

「そういえば主は昔からこの姿が嫌いでしたね。暗い魔界の住人のくせに黒が嫌だと。忘れていました」

リュドリヤはそう言うと言指をぱちんと鳴らした。全身を眩しい光で包みこんだかと思うと、次の瞬間には――。

「うっ！？」

「ちちょ、ちょっとアンタ！ 何考えてんのよ！」

ジェリコは闇を全身から振り払ったリュドリヤを見た。というか見せられた。そして愕然とした。

その姿は、いわゆる裸であつた。リュドリヤは本当に、ただ単に黒い膜のみを消し去つたようである。

そしてその黒いベールを剥ぎ、露になつた裸体は、雪原のような真っ白な肌だつた。真っ直ぐに伸びた長い銀色の髪は暖炉の炎に鮮やかに映え、ゆらゆらと揺れている。

それにしても少女の裸など本来はすぐさま目を逸らすべきなのだが、なぜだか身体がまったく動かない。かなしびりだろうか。瞬きすら出来ない。華奢な身体に目が釘付けである。心臓は爆発しそうにどくどくと激しさを増し、額あたりが妙に熱っぽく、思考がどんどん鈍っていく。ただ、頭の片隅でこんな裸婦像を忠実に描いてみたいという欲望がチロチロと首をもたげていた。

「……あのね、いつまで見てんのよ変態があ！」

ばきい、という頬にぶつかってきた衝撃でジェリコののぼせた頭は覚めたが、意識が眠りそうになった。

その様子を目の当たりにしたリュドリヤは、烈火のごとく叫ぶ。

「貴様、主になにをする！」

うううん……。

虫の羽音のような音が聞こえたかと思うと、リュドリヤの右手が真っ赤に輝き始めていた。そして光の明滅に呼応するように髪が逆立っていく。リュドリヤの右手に明らかな危険を感じたジェリコは咄嗟に「やめろ！」と叫んだ。

ジェリコの一喝と同時にリュドリヤは右手の赤を解く。しかしフエリシアは睨んだままだ。

ジェリコは頬をさすりながらリュドリヤに向かって言う。

「彼女や、ここにいる皆は僕の仲間だ。傷つけちゃ駄目だ」

「主がそういうのなら」

ようやく殺気を解いたリュドリヤにジェリコはほっと胸を撫で下ろした。しかしリュドリヤの姿を見て撫で下ろした胸が再び盛り上がった。

「あと、何か服を着てよ。裸はやめて欲しい……」

「分かりました」

リュドリヤは再び指を鳴らす。するとフード付きの灰色をした口ブが現れ、リュドリヤの身体を包み込んだ。

リュドリヤが服を着てようやく一段楽した後、ヘミングウェイが「少し腰を下ろさんか」と疲労困憊の声で言った。大魔術を行った代償なのか、かなり辛そうな顔をしている。ヘミングウェイに促され、リュドリヤ以外は各々絨毯に腰を降ろしたり椅子に座ったりして一息ついた。

しかし一休みしている一同を差し置き、リュドリヤはジェリコの隣に佇み続けていた。無言で虚空を見据えるその姿は美しいが、銀髪や白い肌と相まって、石膏像のような空虚さを放っていた。

「それが、本当の姿なのか？」

美しい少女像のようなリュドリヤを見たアヤジが言った。リュドリヤは無表情に返す。

「いいえ。私の本来の姿はマレオパードと呼ばれる魔界の獣です」
魔界の獣、という言葉に固まる一同。リュドリヤはそんなことな

ど構わず続ける。

「ちなみになぜ人間の小さい子供共の姿かと言うと、この姿だと地上を歩くとき何かと都合がいいからです」

つまり、子ども扱いされた方が便利、だからだろうか。確かに、概して大人は子供に甘いものだ。多少の悪さも所詮は子供のいたずらという形で目を瞑ってくれることもある。

「魔界の獣ねえ。使い魔は動物を扱うことが多いと聞いたけど本当だったのね」

「あなたの言う言葉の真意には若干のすれ違いがありそうですが、大体そうです。複雑な思考をしない動物等の方が扱い易いですから。ただし、私は違います」

リュドリヤは最後の私は違いますを強調した。

「我が主が生み出した使い魔の中、私や特定の使い魔は魔界でも大きな力を持ったものです。中には勢力を持ったものも居ます。残念ながら今は封印されたから滅ばされたか分かりませんが」

「つまりあなたの主様はすごく偉いんだぞって言いたいわけ？」

「我が主はあらゆるものを使役することができる力を持っています。故にその能力を危険視したソロモンはエロドゥエツテという存在を殺したのです」

「そのソロモンとは一体何者じゃ？悪魔を使役できると言っておつたが、もしや七十二悪の王のことか？」

ヘミングウェイも話しに加わる。どうやらこの話に興味津々のようで目の奥が煌いている。

「ソロモンとはあなた達の言葉で言う賢者の石に認められた魔術師のことです。賢者の石を使って魔族を使役できる指輪を作り、人でありながら私たち魔族の王になろうとした愚か者のことです。あなたの言うとおり、確かに七十二の悪魔を従わせていました。おそらくあなたの言う七十二悪の王と一緒にでしょう」

「ちよつと待った。あんた、賢者の石って何か知っているの？」

フェリシアが真剣な瞳で言った。リュドリヤはこくりと頷く。

「賢者の石とは、この『世』が生まれ、無事に『世』として活動を始めた際、この世の創造主が『世』を生む際に余った力を凝縮させたモノのことです。どんな形をしているのか、どんな色をしているのか、今どこにあるのか誰にも分かりません。ソロモンがなぜ賢者の石を見つけられたのかは、たまたま運がよかったからだと言われている」

「何よそれ、じゃあ賢者の石って探したって見つからないっていうの？」

「そうです。賢者の石は探して見つかるようなものではありません。今この瞬間も、場所を移動し形状を変え、移動しているはずですよ。そもそも石なのかどうかすら不明です。ちなみに魔界では『創造主の影』と呼んでいて、神族どもが住む天上では『権力の素』と呼ばれています」

「つまり俺達の住む地上や、君の言う魔界や天上界でも共通して存在しているものだということだな。まあそれ以前に魔界や天上界というものが何なのか分からんが」

難しい顔をしたアヤジが呟く。

「そうです。この世のあらゆるものに通ずる存在です。——魔界や天上のことも説明した方がいいですか？」

——沈黙。

「……ちよつとあんた。返事したら」

「え？ ぼ、僕？」

頓狂な返事をしたジェリコをフェリシアは炎のような貌で見返す。

「あんた今までの話聞いてなかったの？ 信じられない」

フェリシアは呆れた、と心底うんざりした声で言いながら頭を抱えた。

正直ジェリコには付いていけない話だった。そもそもある程度『そっちの世界』に関する知識を持っていないと単語の意味すら理解できないと思う。つい最近そちらの世界に入ったジェリコにとって、まだまだ次元の違う話だった。

あたふたしているジェリコを見て、フェリシアはイラついた声で言う。

「あんた、もう少し物事に興味を持ちなさいよ。あたし等みたいな裏で生きる人間だけじゃなくて、平和ボケ脳のあんた自身にも関わってる話なのよ？そこんところ勘違いしてたら、本当に死ぬわよ？っていうか殺すわよ？この世界で無知は死を意味するって言うことをいい加減に教えてやろうか」

「主を殺させはしません。その前に、私があなたを殺します」

立ち上がり懷に手を忍ばせたフェリシアを見て、リュドリヤが無表情な声で言った。リュドリヤに気圧されたフェリシアはむすっとした顔で仕方なく座る。

「しかし」

言いつつリュドリヤはジェリコの方を見ると、少し困ったような顔で言う。

「彼女の言うとおり、主は少し無知すぎると思います。支配侯として魔界に居たときは、七大公たちと魔界の行く末を語るほど博識でしたのに」

そしてリュドリヤからまたわけの分からない言葉が出る。自分が無知なのは分かるが、追い討ちをかけるように意味不明な言葉を連発するのは自重して欲しい。

そんなジェリコの気持ちを知ってか知らずか、リュドリヤは相変わらず困った顔で話を続ける。

「魔力さえあれば、私の能力でかつての知識を呼び戻せるのですが」「どういうこと？」

鋭く噛み付いたフェリシアに、リュドリヤは一瞬目を輝かせて答えた。

「私が使い魔として生まれ変わる際に創造主に与えられた能力は、この世で起こりうる『可能性』を引き寄せ、それを『在る』ことにすることが出来るワルドの三本系という能力です」

「ワルドの、三本系……？」

フェリシアは心ここに在らずといった面持ちで鸚鵡返しした。

「そうです。魔力次第で、ありとあらゆる可能性を引き寄せます。

『エロドウエツテの記憶』を顕現するには七十グレ程の魔力が必要ですが、残念ながら今は集めることは不可能なようです」

「グレ、とな。古代の物量単位を用いるか。それに七十グレとはまた途方も無い量じゃな」

ヘミングウェイが面白い、という風に呟く。

「そうですね。私も七十グレもの魔力を消費するとただじゃすみません。補助具を使うか誰かに提供してもらう必要があります。昔は主に魔力をいただきながら術を行使していましたが」

「ヘミングウェイが持っている増幅器を使えばいいんじゃないか？」
アヤジが提案する。ヘミングウェイは顎をさすりながら考える動作をする。

「ふむ。試してみる価値はありそうじゃな。しかし七十グレもの魔力を生み出せるとは思えん。十三個すべて使ってもおそらく無理じゃ。増幅器が魔力を許容できずに砕けるのが関の山じゃろう」

「そうですね。その増幅器が一体どういうものなのか私は知りませんが、七十グレはただの人が生み出せる魔力量を遥かに越えた量です。人が作り上げたものでは無理でしょう」

「ちよつと待つて。その七十グレって一体どれ程の量なわけ？」

ジェリコもそのことが気になっていた。そしてフェリシアの問いはリュドリヤではなくヘミングウェイ答えた。

「まず古代の単位について簡単に説明しよう。グレとは魔力を数える際に用いる単位。グレ、アー、ビル、モリンの4つで成り立っている。一グレは約二百五十アー。一アーは約二十ビル。そして一ビルは十モリンという計算が可能じゃ。ちなみに人が人生で生む魔力量がせいぜい六ビルほど。すなわち七十グレとは大体六万人が人生で生み出す魔力量に匹敵する」

とんでもない事実だ。ジェリコとフェリシアは固まった。

「つまり六万人の人生を代償にすればエロドウエツテの記憶を取り

戻せるのだな」

無機質な声でアヤジは言った。そしてリュドリヤは頷くと瞼を伏せ、憂鬱そうな表情で呟く。

「理論上はそうです。まあ現実的には不可能でしょうね。我が主の記憶を取り戻すのはあきらめましょう」

アヤジは腕を組んで一つため息つくと、

「よし、それは分かった。随分話がそれたが、天界と魔界について教えてくれないか」

リュドリヤは再び頷くと話し始める。

「天界とは神族が住む世界。魔界は魔族が住む世界。その二つに挟まれているのが地上、すなわち人間界です。ちなみに元は天界と地上しか存在しなかったのですが、仕族が神族と魔族という風に派閥を作り、そして魔族が自分たちの居場所を造るため世界を裏返して作り上げたものが魔界です」

「仕族、とはなんじゃ？」

ヘミングウェイが鋭く指摘する。

「仕族とは、極端に言えば人を監視する役目を与えられた存在です。この辺りを説明するには歴史を振り返る必要がありますが、非常に長い説明になります」

リュドリヤの言葉に、アヤジは首を振った。

「いや、もついい。俺達はそんな話をするためにここへ来たわけじゃないからな」

「あのね、あたしは聞きたいんだけど」

フェリシアはまだまだ聞き足りない、という欲求不満たらたらしい様子でアヤジに噛み付いた。

「わしも興味がある。おそらく世界の真理に繋がる話じゃ。しかし

――

ヘミングウェイはそこまで言うとは一度言葉を切る。そして少し名残惜しそうに続ける。

「それは寄り道になる。お主らがここへ来た目的は、ジェリコが本

物のレメゲトンであるかどうか確かめるとのことじゃったはず」

「その通りだ。雑談はこれくらいにしておこう。ヘミングウェイ、俺達はこれから灰の祭場へ向かうつもりだがどうだろう」

「うむ。揺り籠起動の場所はあるまい。問題は起動方法じゃがそこまではわしにも分からん。後はお主ら次第じゃ。少なくともリユドリヤが鍵なのは確かじゃ。もしかするとワルドの三本系という魔術がそれかもしれんな。あらゆる可能性を現実にするということは、別の言葉で言い換えればあらゆる願いを叶えるということと同義であろう」

「だが、そのためにはとんでもない量の魔力が必要になるんじゃない？」

「そうじゃな。記憶を取り戻すだけでとんでもない魔力量が必要なのじゃ。どれほど必要になるのかもはや想像がつかんな。揺り籠とは、ワルドの三本系の術を何の制限も無く完全に使用するために大量の魔力を補填する術なのかもしれんな」

「無限の魔力を生み出す魔術、ねえ。そんなもんあるの？」

「それこそワルドの三本系で生み出すべき術じゃな。矛盾した話になるがのう」

「結論は出ないか。やはりもう少し揺り籠について研究する必要があるようだな」

「そうじゃな。儀式の場所、術の鍵は揃っておるのじゃ。後は確実な方法——術式を見つけるまで大人しくするのも一つの手かもしれない」

「そうだな」

アヤジとヘミングウェイ、そしてフェリシアはそこで沈黙した。それにしても、ジェリコは完全に蚊帳の外である。エメは喋れないから話に加わっていないが、じつと話に耳を傾けているようだ。フォレンティーナも黙って難しい顔をしている。ジェリコだけ、話にまともについていけない。まあユーリーはこっくりこっくり舟をこいでいるのでジェリコ以上に論外だが。

しかしなんとなく内容は分かる。とてつもなく壮大な話をしてい
る、という程度ではあるが。

静かに時が流れる中、ヘミングウェイはふと窓の方を見た。つら
れてジェリコも目を向けると、外はもう藍色に染まっていた。いつ
の間にか日が沈んでいたようだ。

ヘミングウェイは立ち上がると、一同を見渡して言う。

「とりあえずもう日が暮れておる。今日は泊まっていけ。今後の方
針を決めるのも、ロンデバリーへ行くのも明日以降にしておいた方
がいいじゃろう。そもそもわしはもう疲れた。あんな魔術を行うの
はしばらくごめんじゃな」

「いつも世話かけてすまないな。感謝する」

「ほいほい」と言いつつ腰をさすりながら立ち上がるヘミングウ
エイ。そして棚からフライパンのようなものを取り出す。

「飯にでもするか。わしはこう見えて料理が好きなのじゃ」

にかり、と思いのほか綺麗な歯を出して笑うヘミングウェイの滑
稽さにジェリコは苦笑したのだった。

#25・混ざる自分

夕食を食べ終えた後それぞれ解散となった。アヤジとヘミングウェイ、フェリシアは地下室へ。エメとフォレンティーナ、リュドリアは暖炉で寛ぎ、ユーリーは行方不明。旅に疲れたジェリコはさつさと寝ることにし、暖炉の前で横になって静かに目を閉じていた。そして先ほどの夕食の出来事を思い出す。

夕食は材料の関係でパンとシチューという簡単なものだった。料理が得意とヘミングウェイが言っていた割には下手くそだったのでほとんどジェリコが作ってしまった。ベルナンドの動きをいつも見ていたし、夜食を自分で作ることもあったのでジェリコは料理が出来るのである。

そして奇妙な面子で食事をしているときの話題はもっぱらリュドリアへの質問攻めであった。いつまで経っても心が穏やかにならないというか、和やかという言葉から程遠い話ばかりでジェリコは少しうんざりしていた。おまけに長い。昔話は嫌いではないがジェリコにとっていささが長すぎであった。

しかしその中でもジェリコの興味を注ぎ、理解できた話もいくつかあった。

まず仕族という存在。遥か昔、魔族と神族は仕族という一つの種族であった。仕族は天界という空の上のさらに上にある所に住み、世界を構築する『歯車』（とリュドリアは言っていた）である人間を監視・管理する役目を持っているらしい。また、創造主という絶対者から強い恩恵を受けており、仕族は時に人を助け、時には人を殺し、時には人の歴史を動かすようなことをしていたそうだ。

しかしあるとき仕族の中で人を管理する——ある意味人という自分たちと似た存在を弄ぶことに異を唱えたものが現れた。いわゆる墮天、魔族の発祥である。魔族はこの完璧に構成され、動かされている『この世』に疑問を抱き、なぜ『この世』があるのか、なぜ創

造主は『この世』を創ったのかを探る存在となった。

やがて墮天しなかった仕族が、実質同族である魔族を世界の均衡を破る存在であると危惧し始めた。そして今で言う神族と魔族が争いを始めたが、魔族と神族はまったく同能力であるため決着は付かなかった。

そこで魔族は人に目をつけた。『この世』を構築している人という存在は、あらゆる『可能性』を内包しているとうことであり、その能力は未知数であると気づいたのだ。同じように気づいた神族も魔族と同様に人に接触し始め、力と力のぶつかり合いから今度は人の数取り合戦が始まったそうだ。

魔族も人も神族も立場や住む世界こそ違っていても、同じ生命体であることには変わりはないということを利用し、創造主から与えられた種族の枠を超える可能性を考え種族間の血も混ざり始めたそう。つまりこの頃から『この世』は混乱、破綻し始めた。

いつかフェリシアが言っていた『先祖返り』とは、この辺りが原点なのだろう。リウドリヤ曰くジェリコは悪魔だそうから、ジェリコの祖先は魔族だといえる。

かくして創造主が作った規律が破綻し始めた『この世』は、あくまで創造主の命令を維持し続けようとする神族と、それに疑問を抱き時には破壊して創造主の目的を知ろうとする魔族と、仕族の混乱に巻き込まれどっつかずの存在に変えられてしまった人の三つの世界に変貌したのだった——と、言うのがジェリコの理解した話の一つ。

次いで話しに上がったのがエロドゥエツテというジェリコの原点ともいう存在に関するものだ。

エロドゥエツテが墮天した理由は、仕族して与えられた役割に嫌気が差したからだそうだ。

まず、仕族には一人一人かなり強力な『権力』が与えられている。それを用いることによって人を管理し、仕族同士での役割分担がされている。

しかしその権力は絶対的ではなく、権力同士がある程度の干渉をすることが出来る。複雑な人の世界を管理していくため、また仕族同士で協力できるようにするために絶対権力では無いらしい。

その中でエロドゥエツテは『使役』の役割を与えられていた。人物、事象、あらゆるものに命令を与えられる力。仕族の中でも重要な存在であつたそうだ。

エロドゥエツテは墮天した後、あくまで自分の能力を行使せず魔族という立場でありながら神族と魔族の中立を維持していたそうだな。なぜなら自分の能力はある意味運命を無理やり決定させるものであり、そのことに対してかなり心的疲労が募っていたから、とリュドリヤは語っていた。ジェリコはそんな話を聞いていながら、なぜ創造主は仕族に感情を持たせたのだろうと疑問に思ったが、創造主なんてものの気持ちなど分かるわけもないか、と考えるのをやめた。

墮天した当時エロドゥエツテは何人とも接触せずひっそりと暮らしており、長い間孤独に苛んでいたそうだ。そこでエロドゥエツテは自分の能力を遣って仲間を作った。その最初がリュドリヤ。ちなみに魔族というものが構築された後にエロドゥエツテは墮天していたので、魔族独自の生命体がいくつか存在していたらしい。その一つであるマレオパードという魔獣をエロドゥエツテは選んだ。理由は『いつでも傍に居てほしい』という悪魔らしからぬ理由であり、マレオパードは人の世でいう犬のような性格に当たる存在であったため選ばれた。そのことを聞いたジェリコは軽く衝撃を受けた。

エロドゥエツテが使い魔を創ると、その使い魔となる前の能力とは別に強力な『異能力』が与えられる。これはエロドゥエツテの『あらゆる事象、人、物に対する命令権』という存在価値を分けて使い魔を作るため起こる現象であるからだそうだ。『様々なことを起こさせる命令権』とは『さまざまな事を起こさせる為の現象を内包している』らしく、そこから派生した使い魔であるから故に、『異能力』を持った使い魔を生み出せるということらしい。ジェリコはよく分らないが、ちなみにその能力は生み出された際のエロドゥ

エツテの理由や感情によって決定される。リュドリヤは『いつでも傍に居てほしい』という理由から生まれたためか『何時如何なる時も主の傍に居る』という能力も持っている。だからリュドリヤはジエリコの首に居たのか、とジエリコは納得した。

リュドリヤのワルドの三本系は自身の能力を応用したものだそう。何時如何なる時も傍に居るということは、『何時如何なる時』を能力が内包しているため、あらゆる出来事を引き寄せられるらしい。とんちんかんな理論だと、ジエリコは思った。

そして最後にソロモンに関する話。

ソロモンとは、賢者の石に認められた比較的最近の魔術師だ。賢者の石を使つて、一度に七十二体もの魔族を使役する指輪を作り出し、魔界、地上、天界を支配しようとした魔術師。結局天界からの裁きによって抹殺されたそうだが、遺したものは人の世界に大きな影響を与えた。

優秀な魔術師であつたソロモンは自身の魔術や賢者の石に関する書物をたくさん残した。現在その多くは十字教会が保持しているそうだが、魔術師結社もいくつか書物を持っているらしい。

しかしリュドリヤはその辺りの話には詳しくなく、自分とソロモンの関係について話していた。

魔界で暮らしていたエロドゥエツテはある時地上へ呼び出された。いわゆる召喚の魔術。当時ソロモンは片っ端から呼び出した魔族を指輪の力で配下にしていた。しかし指輪とほぼ同意義の存在であるエロドゥエツテに対してはその効果が極めて薄かつたそう。しかしある程度の効果はあるようで、当時エロドゥエツテも暇をもてあましていたこともあり、面白半分でソロモンの下についていたらしい。

しかしソロモンは、いずれ自分の脅威になりうると感じたらしく、魔族を行使しエロドゥエツテを抹殺した。エロドゥエツテは魔族の中でも大人しい性格のため、不意を突かれたとリュドリヤは語る。そして同様にリュドリヤも封じられた。リュドリヤ自身の能力は非常に利用価値があるとソロモンは判断していたが、エロドゥエツテ

を封じると使い魔であるリュドリヤはともに機能しなくなるため、止むを得ず封印という形を取ったそうだ。ちなみにソロモンが封印の術を行使させた魔族の名前はレメゲトン。『封じる』という役割を持った仕族だそうだ。

そして悠久の時は流れてジェリコの時代。リュドリヤはヘミングウェイによって晴れて封印を解かれ、再び主の下で日の目を浴びることが出来たというわけである。

ジェリコが理解できたのはそこまでの話だった。そのあとヘミングウェイやフェリシアとかが、賢者の石とは何かとか創造主とは何かとかいろいろ話しをしていたと記憶しているが、このときのジェリコはもはや眠る寸前であり、ともに頭が働いていなかった。いろいろと議論を繰り広げていたが、結局結論はでなかったような記憶がある。

ジェリコはそこまで回想して、再び目を開けた。目の前には炎が燃えており、温かい空気をジェリコに送ってくれる。傍らのエメやフォレンティーナも暖炉の心地よさに負けたのか、舟をこいでいた。「主よ」

背後のリュドリヤに声をかけられ、ジェリコは振り向いた。

リュドリヤは極めて無表情でジェリコを見つめていた。ジェリコは「なに？」と言いつつ起き上がると彼女と向き直る。

「あなたの願いは、一体何なのですか？」

唐突にそんな質問をされた。予想外にも甚だしい。

——しかし、

「僕は、みんなが幸せなればいいなって思ってる」

そんな無様で歪んで、しかしわけも無く追い求めている夢を、ジェリコは呟いていた。

「そして、そのために強くなりたいて思ってる」

幼い頃見た大きな背中。紳士の、ぶれない信念と誇りに目を奪われたあの記憶が蘇る。

リュドリヤはしばらくジェリコを見つめた後、穏やかに言った。

「そうですか。姿は変わっていても、やはり主は主ですね」

そう言ってリュドリヤは微笑んだ。

「エロドウエツテであった頃も、同じことをおっしゃっていました。上下関係の無い、平等な世界。誰もが肩を並べられる、境の無い世界。幸せな世界。そんな世の中になればいいのに、と。しかしそれは『この世』を完全に否定した世界だから、絶対に起きるはずもなければ起してはならないと。そういう風にもおっしゃっていました」
例え生まれ変わっても根付いた思念・思想は変わらないのかもしれない。文字通り因果なものだ、とジェリコは思った。

「ねえリュドリヤ。僕が魔族だった頃の話をしてよ。何が好きだったとか、どんな性格だったとか。自分の前世って気になるんだ」

悪魔——神——人。違うようで近い存在。かつて魔族だった自分は一体どんな人物であったのか。今のジェリコのように弱い人間だったのか。それとも強靱な精神力を持った人物だったのか。しかし『寂しいから』なんて理由で使い魔を生み出すぐらいだから、あまりにたいしたこと無い性格なのかもしれない。

「分かりました。少し長いですが、私が生み出される頃のことを話しましょう」

リュドリヤは穏やかな顔で昔話を始めた。

遙か昔。魔界が完成して幾ばくかの時が経った頃、一人の仕族が世界の裏側へ堕ちた。

彼には世界の構成品に方向性を与える仕事があり、日々、何でもかんでも命令した。

——あいつをあの一瞬間に死亡させる。

——あれを一陣の風が過ぎた瞬間に抱きつかせる。

——あの建物を三十年で風化させる。

——海を割って道を開かせる。

——あいつに民衆を従わせる。

——あいつに剣を抜けさせる。

——あいつとあいつで子を産ませろ。

上層部からの指示書というまるで運命の家系図のような長い紙切れを毎日渡され、それ通りに構成品に指示を出す日々。

別に難しい仕事ではない。しかし、自分の性には合わない。

なぜ創造主は我々に感情を与えたのか長年の謎だった。いつそ機械のようにその命令だけを繰り返させるようにした方が効率の良さそうなものだろうに。

——まったく、理解できない。

彼はその謎に苦しめられ、構成品という言葉に嫌気が差し、いつのまにか天界を抜け出していた。

もちろん天界にも壁と門があり、ただの仕族ならばまず抜け出せまい。しかし彼には強力な『命令権』があったため、門番に命令をし、真正面から出て行つたのだった。

罪悪感は無かった。天界に生きる者の繋がりなど、権力の相互作用しか存在しない。いかに効率よく世界を回すか。ただそれだけ。温もりも無ければ冷たさも無く、ただ創造主の命令を遂行する集団。正直、どうでもよかった。

彼は魔界にすぐ着いた。世界の裏側を覗くことなど容易かったから。

魔界は暗かった。世界の影故に、暗いのは必然だが正直苦手だった。

しかしそれも次第に慣れた。魔界は暗いが、静かで落ち着く場所だった。彼は適当に家を作り、その中でひっそりと住み始めた。

彼が魔界に来てからやっていることはたった一つ。思想。ただそれだけ。誰にも相談することも無く、考えるだけの存在になっていた。

しかしそんな生活も嫌ではなかった。どこまでも考える。定かではないかもしれないが、どんどん先を考える。この思考はどこに辿り着くのか。終着点はあるのか。いつのまにかそのことに興味が湧

いていた。

しかしある時、彼は『一人』を実感した。ひたすら自問自答を繰り返し、出口の無い迷路をぐるぐると回っているようなとき、『自分一人』を実感した。無限の思考の旅を一人で歩き続けるのは辛いと無意識に感じたのかもしれない。確かに、思考には出口が無く、終わりが見当たらなかった。どれほどの時間瞑想し続けたのか分からないが、いくつかの結論には辿り着いたが、完全な出口にはでられなかった。

それでも考え続けようとした自分が怖かったのかもしれない。誰かに止めてほしかったのかもしれない。くだらない瞑想という樹海から抜け出す道しるべが欲しかったのかもしれない。

故に、一人を感じた。すなわち孤独感。

なぜ自分は魔界に着たのか、その理由は単純なものなのかもしれない。いや、むしろ、そうだ。

“人間が羨ましい”

そう感じたのはいつだったか。もう覚えていない。

人間はいつでも不思議だった。自分の命令どおりに動いているだけにもかかわらず、仕族と同じ感情を持つ生命体であるにもかかわらず、人間の世界は何かに満ちていた。何と云うか、歯車の癖になぜあれほど楽しそうで哀しそうで、一生懸命なのか。自分の命令したどおりに動いているだけなのに。無知とは、幸せなのかもしれない。

——つまりはそういうことだ。自分以外の存在との繋がりを求めて自分は天界を降りた。

だから、孤独を感じては駄目だ。相棒を。人間達のように。仲間を。そういった存在を、自分は求める。

そして創った。自分の分身。相方。友。自分を裏切らない、唯一の存在。

「君の名は？」

「リュドリヤと申します」

「私は君にこれだけを求める——如何なる時も、傍に居てくれ」

「心得ました。我が命、如何なる時も主と共に在ることを誓います」
リュドリヤを傍らにおいてからは、考えることをやめた。来る日も来る日も、彼女と話をした。気まぐれに書物を書き起こしたり、魔界を散策したり、魔界の生物を研究したりした。実に平和だった。ある時そんな平凡な日々新しい刺激が訪れた。来訪者が現れたのだ。

アスモデウス。彼はそう名乗った。天界では存在を律動させる役割を持っていた。

アスモデウスも彼と同じような理由で魔界に下りたそうだった。彼はアスモデウスと気があい、友人となった。

「——主よ、大丈夫ですか」

「……え、あ、ごめん。少しぼうつとしてた」

「主はもう眠られた方がよろしいでしょう。旅の疲れと術の疲れが溜まっているはずです」

「ごめん。話の腰を折るようなことをして」

「構いません。限の無い話ですから。他の仲間方も眠ってらっしゃいますし」

言われて周りを見ると、フォレンティーナとエメはそれぞれ毛布を被って眠っていた。なんだかんだ二人とも疲れていたのか。暖炉の温もりが心地よいという効果もあったのかもしれない。

「ちなみに私に睡眠は必要ありません。ごゆるりと」

悪魔だから寝ないのか、使い魔だから寝ないのか分からないが、本人が言うからにはそうなのだろう。

「じゃあ、僕は寝るよ。リュドリヤも眠くなったら自由に寝ていいよ。おやすみ」

リュドリヤから毛布を受け取るとジェリコは包まって横になる。毛布の温もりと暖炉の温もりが心地よくあつという間に夢に堕ちそうである。

「おやすみなさい、主よ」

リュドリヤの言葉を最後に、ジェリコの意識は沈んで行った。それにしても、エロドゥエツテは大した器ではないなと頭の片隅に思いつつ。

#26・開戦

これは夢。他愛も無い、そこかしこに散乱している意思の残滓。ジェリコは間違いなくそう確信していた。

今ジェリコはあまりにも広大な枯れた大地に立っている。上を見上げると雲一つ無い天空が広がり、その先には黒い未知が羽を広げている。

夜、なのだろうか。よく分からない。

いたるところにひび割れが入った乾いた土をそつと掴む。さらあ、と指の隙間から小さな星が零れ落ちていく。このきらきらと輝く砂粒が、辺りをぼんやりと照らしていた。

空は暗いが地面は明るい。妙な法則で作られた世界に自分は放り込まれていた。

繰り返す、これは夢だ。自分が制御できない自分を劇のように觀賞していくだけ。ただそれだけのはずなのに、

（いやに、はつきりしている）

まるで異次元に跳ばされてしまったよう。突然別の世界に瞬間移動してしまったように、妙な現実感、意識の覚醒、そして触感がある。

ごうごうごうん……。

後方から音が響いてきた。地鳴りのような、機械めいた重い音。かなりの距離があるようだ。

振り返ると、地平線の彼方から風が吹いてきた。しかも、驚いたことに色が付いている。煙に色が付いているといえいいのか、なと呼べばいいのか。虹色の極薄の絹のような風とは、さすが夢だというべきか。

黒い空と枯れた地表の境目から流れてくる虹色の風を纏いながら、ジェリコは風が流れていく方へ誘われていく。

こんなわけの分からない世界にたった一人であるにも拘らず、ジ

エリコは恐怖をまったく感じない。それは夢だからなのか、他の理由があるのか、よく分からない。

ただこの虹色の風が気になって、風の上流へと歩いていく。足も疲れない。息も切れない。やはり夢だ、とジェリコは思った。

気ままに歩いていると、どうやらここは完全に荒廃した世界だということが分かった。歩けど歩けど灰色の景色。砂と石と小ぶりの岩ばかりが在り、草木や命の気配はまったく感じない。こんな夢を見るのは生まれた初めてである。こんな虚しい夢を見る自分が、なんとも言えない。

しかし空虚ではあるが、ある種の美しさも感じていた。夜以上に暗く、星の欠片すら見当たらない空と枯渴した地面は、あまりにも両極端で神秘性を感じさせる。

ごおううん……。

そして時折響くこの音。必ずジェリコの後ろから響き、どれだけ歩いても同じような響き方をしている。まるでジェリコの後ろをびったり付いてくるかのように。ただ、その距離は随分と遠いようだが。

そんな不思議で綺麗で寂しい世界を散歩していると、何者かの姿を見つけた。人形で、白い。今はまだその形が見えるだけで、どんな姿をしているのかは分からない。

この色々と果てた夢の世界に自分以外の存在がいるのか。そんな興味が身体の奥から瑞々しく湧いてくる。

遠くに一人で立つその人型は、ジェリコに気づいて居ないようだった。後ろを向いてジェリコに背を向けている。

ジェリコは臆することなくその謎の人物に近づく。これが現実ならあまりに怪しいこの人物に近づくことは愚か、逃げ出すところだが、今のジェリコには恐怖感というものを知らない。むしろ頭から恐怖という感情だけ削ぎ落とされたような感覚に近い。それにこれは夢だ。この世界で死んでも、実際に死ぬことはないだろう。

そして段々とシルエツトが露になる。白い裸体、華奢で幼い体つ

き、あれは……、

「リュドリヤ？」

ジェリコは無意識に呟いていた。間違いなくリュドリヤだ。つい先ほど衝撃的に見せられたあの美しい身体をそう簡単に忘れるわけもないし、ものを観る力はそれなりに養っているつもりだ。

ジェリコは間近まできても振り向かないリュドリヤに触れようと手を伸ばした。艶かしいその肩に触れるその刹那、

っささあ……。

一瞬にして、砂になった。

「な、これはどういう」

砂になり、地面と同化したリュドリヤを見下ろしつつ、ジェリコは激しく動揺した。まるでジェリコの手から逃げるように、リュドリヤは砂になった。これは一体何の暗示なのか。

ジェリコは思わずその場にしゃがみこみ、リュドリヤであった砂山を両手ですくう。砂は当然のようにジェリコの指から流れていき、「う、うわぁ！」

ある異物を残した。ジェリコはその異物に驚愕し、尻餅をついた。心臓がばくばくと鳴り、その異物から目を離すことが出来ない。

「め、目玉……」

なぜ目玉だけ残ったのか、理解できないがこれも夢の影響なのか。リュドリヤの色違いの両目は、傷一つ無いガラス玉のように砂の上に転がっている。生々しい血管は無く、白目は象牙の如く、緑目は翡翠の如く、青目は瑠璃の如く、そして黒目は黒曜石の如く。見つめていると段々と目玉という認識から精巧に造られた『宝石』のように見えてきた。

ジェリコはその二つの宝石を拾う。驚いたことに目玉は硬く、それなりに重さもある。本当に宝石ではないかとジェリコは戸惑った。

じゅうん……………。

じゅうん……………。

じゅうん……………。

『音』の感覚が近くなってきた。いや、急いできたという感じに近い。まるでジェリコに何かをさせないようにするために。

（おかしい夢だ）

ジェリコはリュドリヤの両眼をポケットに入れると、『音』から逃げるように風の方へ走った。走る理由なんて無い。何となく走ったほうがいい気がしたからだ。

ごうごうごう……。

音は何度も鳴り響いている。何となく、ジェリコはこの音に監視されている気がしてきた。（それはなぜ）

走る足に急激に疲労がたまってきた。まるで今まで感じなかった分の疲れをすべてぶつけてきたように。今がその好機だというように、どんどん脚が重たくなっていく。

（リュドリヤの眼を手に入れてから起きたということとは）

ごおおごうごう……。

——近い！

まだ距離はあるが、『音』の近づく間隔を考えるといずれ追いつかれる。追いつかれて一体何が起きるのか見当も付かないが、とにかく逃げた方が良さという強迫観念にかられてジェリコは走る。くたびれた両足を叩いて渴を入れつつ、ジェリコは虹の風の中を突き進む。しかし向かい風のせいで走り辛いのがもどかしく、額に汗が浮かび始めた。

音の狙いは間違いなくリュドリヤの眼だ。なぜそんなものを求めるのか、ジェリコを利用して手に入れようとしたのかまったく分からないが、リュドリヤの眼は誰にも渡したくなかった。

ごおおごおおん……。

鼓膜を震わせる音が強くなった。鐘の音のような、重苦しい音が疲れた身体にのしかかる。虹の風の出口にはまだ辿り着けない。終わりがまったく見えない。地平線は変わらず横一に広がっており、その境界から虹色が噴出している。

なぜ自分は『音』から逃げているのか。

なぜ自分は虹へと向かっているのか。

なぜ自分はリュドリヤの眼を大切にしているのか。

すべてに理由が無い。なぜなら夢だからと言えばそれまでだが、ただの夢と言いつ切るにはあまりにも現実感がありすぎる。

心臓の脈動、額の汗、苦しげに呼吸する肺、悲鳴を上げる両足、そして自分自身の意識。夢だというのに圧倒的なまでの生命を感じている自分が、不気味すぎる。

「ごおおおおおん！」

「あぐっ！」

真上から聞こえてきた爆音に、ジェリコは思わず耳を押さえた。鼓膜が破けるのではないかと思うほどの音量。苦痛に顔を歪めて、ジェリコはその場にうずくまる。

「ごおおおおおん！」

「ごおおおおおん！」

「ごおおおおおん！」

爆音は何度も鳴り響き、ジェリコを威嚇する。頭の中にまでがんと響く音に耐えながら、ジェリコは空を見上げた。

「！」

ジェリコは絶句した。空には、巨大な『顔』があった。

「ごおおおおおん！ごおおおおおん！」

空にぼっかりと浮かんだ顔は何度も叫んでいる。この音はこいつの鳴き声か。

髭を生やし、黒髪を振り乱した男の生首のようなそれは、血走った眼でジェリコを見据えている。瞬きせず、乾ききつて澱んだ瞳はこれでもかと見開かれ、その眼に睨まれただけで寿命が数年縮みそうである。

隕石のようなその巨顔を睨みつつ、ジェリコは再び立ち上がると走り出す。

「ごおおおおおん！ごおおおおおん！」

『顔』は変わらず鳴き続けている。追いつかれて何かをされるか

と思ったが、杞憂だったようである。それにしてもあの顔には驚いた。ジェリコは思い出したように恐怖を感じ始めていた。

あの顔は、怖い。ただひたすらに怖い。あの顔を見た瞬間、あらゆる意識が顔に吸い込まれた。文字通り我を忘れてしまっていた。今こうして走れているのが不思議なくらいである。

「うおおおおおおおん！」

音から今度は悲鳴のような声に変わった。拷問を受けている時の叫び声のような、思わず耳を押さえたいくなる声色だった。どす黒い断末魔のような、血の色を思い浮かべてしまうような、そんな不吉な声。ずっと聞いていると気が狂ってきそうだ。

「ちくしょう、何なんだよこれは！」

愚痴をこぼしても世界は変わらない。死人の雄たけびが背後から響き、対照的な虹色の風が目の前から流れてくる。身体はいい加減悲鳴をあげ、疲労が苦痛に変化してジェリコの意識を少しずつ食い散らかしていく。

ジェリコはリュドリヤの瞳を取り出した。『顔』はこれがそんなに欲しいのか。

瞳を捨てれば顔に追われることもきつとなくなるだろう。しかし、手放したくなかった。

この世界から抜け出すにはどうすればいいのか。疲労で朦朧とし始めた頭で考える。夢から覚めるときはいつも突然だ。現実と夢が混ざり、その狭間を意識が捉えた瞬間、目が覚める。その瞬間を探すしかない。

ふと、前方に人影が見えた。今度は誰だ。誰でもいいが起こして欲しい。まさか『顔』の仲間だろうか。

色々と思案しつつも足はその人影に向かって動く。もはや自分ではどうすることもできない。あの人型に賭けるしかない。

人型が近づき、その姿がはっきりとしてくる。屈強な身体。黒い雰囲気。寂しげな死神のような風貌。

「アヤジ！」

ジェリコが叫ぶと同時に、アヤジは振り向いた。焦りの顔。アヤジはジェリコに手を伸ばした。差し出されたその手をジェリコはがつしりと掴む。

「起きろ、ジェリコ！」

アヤジのその言葉と同時に、異世界はどろりと融けた。

「主よ！大丈夫ですか！」

リュドリヤの悲鳴じみた声が聞こえる。『顔』が発する爆音に耳をやられた後遺症なのか、膜がかかったように聞こえ辛い。

視界もぼんやりとしている。意識ははっきりしているが、感覚器官が狂っているせいで状況把握が出来ない。

「とりあえず術は解けたようじゃな。夢に介入する魔術とは、十字教会もえげつない事をする」

「エメ、追っ手はどうだ？——よし、撒いたようだな」

話しの流れからして十字教会に追われているようである。しかもジェリコは敵の攻撃を受けていたようだ。まさかあの夢がそうなのか。

ふと、ぼんやりとした世界に光が見え始めた。草の臭い、虫の音、風の音。ヘミングウェイの家ではなく、外にいるようだ。

「あのね、いい加減に起きなさいよ馬鹿！」

突然怒鳴られ、ようやくジェリコは覚醒した。目の前にはフェリシアの顔がいつぱいに広がっている。

「あ、ご、ごめん」

ジェリコは頭を振って夢の靄を振り払う。よし、もう大丈夫だ。

「ジェリコ、意識はしっかりしてる？」

フォレンティーナがジェリコの顔を覗いてきた。深い青い瞳に吸い込まれそうになる。

ジェリコは無言で頷くと、もう一度頭を振り払って周囲を見回した。

森。夜。虫の音。静かに流れる風を感じながら、ジェリコは深呼吸した。

「ところでユーリーはどうした？一緒に家を出たはずだが」

「そういえばそうね。あいつまさか教会の手先だったわけ？」

フェリシアの静かに怒りのこもった声に、ジェリコは「いや、それは無いよ」と答えた。

「ユーリーの話に嘘はなかったよ。だから教会の手先ではないと思う」

「まあ、あんたがそう言うなら」

ジェリコは珍しく大人しいフェリシアに驚いた。しかし嘘を聞き分けることが出来る自分の能力を考えれば当然なのかもしれない。ジェリコはほんの少しだけ鼻高々な気分になった。

「まあこの状況で探すわけにはいかないわね。もともとあたし達の後ろを付きまとっていたようだし、放っておいてもいいんじゃないの」

「そうだな。俺達のことを知られている存在を野放しにするのはまずいが、仕方ないだろう」

「ちょ、ユーリーを見殺しにするつもりなの？」

ジェリコの驚きの声に、アヤジは冷たい瞳で返してきた。

「ユーリーを探そうとして俺達が見つかったらどうする。あいつが教会の手先ではなくても、これまでの言動を振り返り信頼できる人間だとお前は思っていたか？それにあいつは魔術が使える。一人でこの現状を逃げ出すくらい容易いはずだし、生きていたらまたこちらに来るだろう。仮にあいつが調査団に殺されたとしても、もはや関係ない。あいつは俺達からはぐれた。その現実はどうにも変えることは出来ない」

「仲間を見捨てろっていうの？」

「お前は本当に仲間だと思っていたのか？少なくともお前以外の者は思っていないと思うが」

ジェリコはアヤジの言葉が痛かった。アヤジの言うとおり、ジェリコはユーリーのことを本当に信頼していなかった。だが、そう簡単に諦めるのは人としてどうなのだろう。

「ジェリコ、お前のくだらない偽善に付き合っている暇はない。お前のその態度がすべてだ。死にたくなければ、もっと素直になれ」

ジェリコは返す言葉が無かった。完全に、見透かされていた。

一瞬沈黙が訪れたが、話を変えるようにヘミングウェイが呟く。

「しかし不利じゃな。付近に調査団はおらんじやろが、下手に動けば見つかる可能性が高いぞ。ジェリコにかけた術もそうじゃが、彼奴らの包囲網を甘く見てはならぬ」

「だがここでずっと手をこまねいているわけにもいかないだろう。

ヘミングウェイ、何か術を使えないか？」

「使いたくても使えないのが正直なところじゃ。レメゲトンを開いた時に魔力をほとんど使い果たしてしもうた。リュドリヤとやら、お主の力で打破できぬか？」

「ワルドの三本系を使えば可能ですが、魔力が足りません。ここはもう強行突破しかないでしょう。それに私がいるかぎり、おそらく調査団という連中は私の魔力を嗅ぎつけてくるでしょう。ならば動き続けるしかありません」

リュドリヤはそこまで話すとエメを横目で見た。

「エメ——でしたか？あなたの結界で調査団を常時索敵しつつ、移動することを提案します。結局先ほどやることは一緒ですが」

「どうしようもないか。エメ、今の状況は——」

ヒュー！

短く、そして小さいエメの口笛が闇に響く。小動物の鳴き声のようなその危険信号に、アヤジは目を見開いた。

「複数の人間がこちらに向かっている！行くぞ！」

言うが早いか、ジェリコとリュドリヤを除いた全員はすぐさま森の中を走り出す。慌てて後を追いかけるジェリコの後ろには、リュドリヤがいる。

がさがりと藪を抜け、夜の闇に染まった草木を振り払いながら走る。仲間の小さく荒い息遣いだけが妙に耳に入る。次第に身体が熱くなり、足に疲れが溜まってくる。なんだか走ってばかりだ。

そんなことをジェリコはちらりと思った。それにしても意外にもヘミングウェイが年の割りにしっかり付いてきていることに驚きだった。日々身体を鍛えているのかもしれない。

時折、エメの口笛が鳴るとアヤジはすぐに方向を変えてまた走り出す。エメの口笛が分からないジェリコにしたら、ただただ右へ左へ引きずり回されているだけな気がしてくる。

「ごうごうごうん……」。

「うう！」

「主よ、どうしたのですか？」

思わずジェリコは足を止めた。後ろを走っていたリュドリヤに声をかけられ、再び走り出す。

ジェリコは走りながらリュドリヤに説明した。

「ごうごうごうん……」。

「リュドリヤ、この音、聞こえる？」

「ええ。厭な響きの音ですが、何か」

「夢の中でも同じ音が聞こえたんだ。巨大な顔が僕を追いかけきて、この鐘の音のような気持ちの悪い音を放っていたんだ」

「巨大な顔……！」

リュドリヤの顔が一気に強張る。何か知っているのか。

「お前達何を話している。静かにしないか」

前方からアヤジの野次がとんでくる。

「アヤジ、走っても無駄です。すでに敵の術中に嵌っています」

「何!？」

驚愕の声と共にアヤジは足を止めた。

「どういうことだ？」

「先ほど主にかけられた術が分かりました。ルドンの偶像という神族が大昔に開発した超広範囲の追跡魔術。調査団という者は、随分と古い魔術を扱えるんですね」

「一体どんな魔術だ。説明してくれ」

「世界の境界を越えて対象を探し出し、常時追尾するような魔術の

ことです。元々は大罪を犯した人間や魔族を捜し当てるための術です。術者の魔術が切れれば解呪されますが、そうでない限り効果は持続します。今回は夢の中で主を発見し、そのまま付いてきたと考えられます」

「つまり逃げても無駄、ということか。益々まずいな」

「でもここで止まったら向こうの思う壺でしょ？逃げてても無駄ならこんな視界の悪い森の中にいるより開けた場所で向こうを待ち構えてた方がまだマシだわ」

「そうですね。とりあえず森を抜けた方が良いでしょう」

「ごおうううん。」

またあの音だ。少しずつ、近づいてきている。ジェリコ達は音から逃げるように再び走り出した。

「森を抜けたとしても、一戦交えることになるだろうな」

前を走るアヤジが呟いた。

「そうじゃな。まったく、こんなことになるのならお主に手を貸すんじゃなかったわい」

ヘミングウェイが自嘲気味に言った。

「すまないと思っている。だが、俺にはヘミングウェイにしか当てが無かったからな」

「澱んだ目をしていた頃のお前を思い出すわ。いやはや、お前も成長したもんじゃて」

「あんたたち、暢気に会話なんてしてんじゃないわよ」

「おー怖い怖い。最近の若者は短気じゃからのう」

緊迫した空気を和らげようとしているのか、こういう状況に慣れているのか分からないが、前を走る三人はいつも通りだ。軽く絶望を感じているジェリコにとって、苛立たしいような羨ましいような不思議な気持ちになった。

「ときにジェリコよ。この中でもっとも弱いお前に一つだけ助言をやるう。これから先、お前の力が必要になるときがあるじゃろうかな」

元気に前を走るヘミングウェイが話しかけてきた。

「今の僕に戦う力なんて無いよ。みんなに守られることしかできない」

「そういうことを考えるからダメなのじゃ。この世にまったく意味のない、必要の無いものなど存在しない。もしあるとすれば、それは無いじゃ。自分の可能性をもっと信じる。自分の本当の価値を出したいのなら、好きとか嫌いじゃなく、一度自分を外から眺めて、自分にしか出来ないことを模索しろ。自分になら出来ることを想像しろ。人間に出来ることは、考えることぐらいしかないからのう」

「いきなりそんなこと言われたって、よく分かんないよ」

「大切なことは望むことじゃ。自分の本当に目指すべき姿を、紛うこと無きその姿を死ぬまで見失わなければ、お前は本物になれる。そのとき、お前はたくさんの人々を救うことが出来るし、守ることが出来るじゃろう」

なんでそういうことをこんな時に言うのか。本当に困る。ジェリコは文句を言いたかった。

だが、ヘミングウェイの言うことはよく分かった。今のジェリコには難しいが、やはり信じるのが大切なのだ。目指すべき到達点までの過程の中で、周囲に目移りして寄り道をしまくるのか、惑わされること無くまっすぐ最短距離で向かうのか自分が決めることだが、その到達点を見失わないことが大切なのだ。きっと、それを目指し続けることに人が生きる意味がある。意味が生まれるのだ。やはりヘミングウェイは賢者だ、とジェリコは思った。

「――抜けた！」

ヘミングウェイの言葉を反芻していると森を抜けた。どうやら下山もしていたらしく、だだっ広い草原に出たようだ。東の空には朝日が薄っすら浮かび上がり、黄昏じみた光が照らされ、いびつな影を落とす。

そしてその日の光に背を向ける形で、逆光の黒い姿で佇む人間が三人。初めてアヤジを視たとき、ジェリコはアヤジのことを死神だ

と思った。それとまったく同じ気持ちで、再び胸の中を暴れまわっていた。

「待ち伏せ、ね」

フェリシアが舌打ちする。

「こうなることは予測済みだ。おそらくしばらくしたら後ろからも来るだろう」

アヤジの声は無機質だが、言葉の端々からぴりぴりしているような気配を感じた。よく見ると、額に汗が浮かんでいる。あのアヤジがここまで動揺しているとは、よほどの相手に違いない。

「全力で殺り合うしかないでしょう。相手がどんな技を持っているのか知りませんが」

物騒な言葉を容易く呟くリュドリヤ。まさに悪魔である。

「全員生き残れば御の字じゃな。とりあえず、ジェリコだけは守らなければなるまい」

言いつつヘミングウェイはちらりとジェリコを見やる。その口元はどこか微笑んでいるように見えた。

「神に背を向ける愚か者共！」

朗々とした女性の声が小高い丘に響く。

「今ここで死ねェ！」

そのすぐ後に、真反対の下卑た男の声が響き、あまりの落差に衝撃を受けたジェリコである。

「来るぞ！避ける！」

っヒュン——ごがぁあぁあ——！！

アヤジに突き飛ばされてジェリコは尻餅をつく。そして虚空を何か赤いものが通り過ぎたかと思うと爆音が森の方から響いた。

「犀角の槍——ルドンの偶像といい、古典魔術が教会という連中は好きなのですね」

「解説はいい、リュドリヤ、お前はジェリコを守れ。エメ、行くぞ。フェリシア、フォレンティーナはジェリコを連れて遠くへ逃げろ」

「あたし達も戦うわ！」

「お前たちが敵う相手ではない。とつとと行け！」

怒号にも似たアヤジの指示に文句を言わせる暇の無く、アヤジとエメとヘミングウェイは太陽の方角へ走っていた。日の光に背を向けていた調査団もこちらへ向かつてきている。開戦、そんな言葉がジェリコの頭に浮かび上がった。

すぐさま向こうの方で刃の触れ合う音がし始めた。アヤジはヌイを召喚し、敵の剣を巧みにかわしながら攻撃の隙を窺っている。エメは全身に無数の目を持つ不気味な人型を召喚し、右手のナイフで敵に斬りかかっている。ヘミングウェイは術を使えないと言っているが、苦悶の顔を浮かべて魔術を使ったり、何か薬品みたいな物を投げて応戦している。

敵方も各々魔術らしきものを使ったり、剣を振り回したりして戦っている。女騎士は竿のように長い剣でアヤジの首を狙い、狂気の顔をしている長い髪の男は両手に光る剣——あれも魔術だろうか——を持ち、ヘミングウェイに何度も斬りかかっている。坊主頭の男は目を閉じているにも関わらず杖のようなものでエメのナイフを巧みにいなしていた。

まさに小さな戦争。容易く命が刈り取られる空間が、すぐ傍で発生していた。

「主よ、行きましょう。追っ手が来ます」

リュドリヤに手を取られ、引つ張られる。

——いや、待ってくれ。何か違う。

まるで死に行くかのように調査団へ向かった三人——とくに、アヤジとエメはジェリコの価値に頼って来たのではないか。だが、二人は今死に行っている。死を覚悟して、勝負を挑みに行っている。幸せを手に入れるために、死に行く。そんな矛盾、人々の幸せを願うジェリコにとって、見逃せない行為だ。むしろ、見逃してはならない。ここで見逃せば、目指すべき目標が霧に消える。

ふと、ベルガモでのアヤジの言葉が蘇る。アヤジは言った。「俺とエメも幸せにしてくれるのか」と。いつの間にか、ジェリコは二

人の幸せを願っていた。アヤジは嫌いだ、幸せになって欲しい。
この気持ちに、嘘は無い。

「だから、ここで、逃げちゃダメなんだ」

ジェリコはリュドリアの手を振り払うと、拳を握る。

「ここで僕は、目指すべき道を決めるんだ」

ヘミングウェイの言葉を思い出す。信じる。自分を信じる。可能性を、信じる。そして、自分の技術を省みる。想像する。今までの経験、知識、世界、すべてを一つにする。

そして目を閉じて想像し始める。右手には、何かの役に立つだろうと思って持ってきた筆を握っている。

——守る。

願い、想像していることはそれだけ。僕は、僕の中に居る皆を守る。殺させない。死とは究極に孤独なこと。あらゆる夢や思いを無慈悲に食いちぎる、いずれは訪れる恐怖。本来なら緩やかな時の中で訪れる死に、突然無理矢理遭遇させるなんて許せない。最凶の孤独を強要するなんてそんなの酷い。あまりにも酷い。

孤独の悲しみは身に沁みてよく知っている。そんな自分でも厭なことを、自分の大切な人にさせるなんて、僕は望まない。嫌だ。

——だから守る。

皆を、護るんだ。護る、護る、護る、護る、護る、護る、護る、護る、護る、護る——！

「僕はッ！」

ジェリコは目を開いた。全身には汗。まるで夜通し絵を描いたときのように熱く強張った全身。右手に握っている筆は毛の部分がほとんど抜け落ちている。地面には『護る』を描いた図形。誰がなんと言おうと、この図形は『護る』を意味している。ジェリコのその意思に、矛盾や不純物など欠片もなかった。

そしてジェリコは筆を思い切り振り上げ、

「護るッ！」

『護る』の図形の中心に筆を突き立てた。

#27・開戦 part 2

筆が地面に突き刺さると同時に、ぼきりと音を立てて崩れた。

空は青く染まり始め、日の光が草原を隅々まで染み渡るように照らしている。

遠くの方では剣戟の音。不吉で、心臓を黒く躍動させるような音。流れる風に変化は無く、虹色でもなければ向かい風でもない。

「――」

世界は、何の変哲も無く回っている。今日という一日が始まるうとしている。向こうの方で死の空間があるのは別として。

「ねえ、あんた、大丈夫？」

後ろから気の抜けたフェリシアの声が聞こえた。どこか声をかけづらそうな、ためらいがちな声。ジェリコはゆっくりと振り向く。そこには眉をひそめたフェリシアとフォレンティーナが余命を知らされた病人を見るような突き放した目でジェリコを見つめていた。

「気でもふれたの？まるで狂ってるようだったわ」

毒のあるフェリシアの言葉に、ジェリコはぼんやりとした意識が覚醒していくのが分かった。先ほどの行為、確かに、傍から見れば怪しいことこの上ない。ジェリコは急に恥ずかしくなった。

それと同時に、諦めの心が芽生えていた。やっぱり、という呟きさえ出ないほどジェリコは哀しかった。

「魔術でも使おうとしたの？気持ちだけじゃ魔術は使えないわよ」

冷たく言い放つフェリシアの瞳は、どこか悲しげだった。

「あたしたちは逃げるのよ。あいつらの異常な戦闘を見てたら分かるでしょ？きつとあたしじゃ手助けしようとするほど迷惑を掛けるわ」

そのとおりだ。今のジェリコ達では戦力にはならない。それは誰がどう見ても明らかだった。

だが――と、ジェリコはフェリシアを見据えた。ジェリコの何か

に取り付かれたような気配を察して、フェリシアはたじろぐ。ジェリコは極めて慎重に、落ち着いた頭で話す。

「けどあのままじゃ、誰か死ぬ気がするんだ。根拠は無い。けどダメなんだ。放っておくわけにはいかない。僕はアヤジとエメを幸せにするんだ。僕の大切な人を、幸せにするんだ」

何事もあきらめたり逃げたりするのは容易い。しかし逃げれば追われる。一度逃げるとなかなか――場合によっては二度と振り返れず、逃げ続けるしかない。ならば立ち向かうしかないのだ。心が、火花を散らして再び燃え盛り始める。

いつものようにため息をついて、フェリシアは冷めた顔をしてジェリコに言う。

「だからって何するのよ。逃げるほか無いでしょ？ほらリユドリヤも何か言つてよ。分からず屋の主を説得しなさいよ」

「私は主の指示に従います」

無表情に返すリユドリヤはそのままに、ジェリコはフェリシアを見つめる。フェリシアの猫のような丸い両眼は珍しく黒い動揺の色を見せていた。フェリシアの眼には恐怖が生まれている。死に対する恐怖。それほどアヤジ達の戦闘は常人離れているということだ。ジェリコはあまりに現実味離れている彼らを見て驚きはしても恐怖はあまり感じなかった。やはり自分は世間知らずらしい。それとも考える力が欠如しているのか。

ともかく全員が恐怖に吞まれるわけにはいかない。なんとなく、しつかりしなきゃ、とジェリコは思った。孤児院で仲間達と暴れていた頃をふと、思い出す。夢中で、しかし無知で、何かを追い求めて、日々を過ごしていた頃。

そしてジェリコの瞳には力が宿った。それは決意の力。ジェリコは自分自身に言い聞かせる。細胞細胞一つ一つに伝わるように、何度も強く。

一度下した決断に迷いは禁物。諦めの心を持つ余裕など今の自分には無い、と。

貫く姿勢。貫いた軌跡は未来への道標となりうる。

「フェリシア、僕は決めたんだ。さっき僕は無意識に魔術を使おうとして、失敗した。フェリシアの言うとおり、魔術には魔力が必要だ。僕の血液には魔力が宿っているんだろう。なら答えは簡単だ」

ジェリコは折れてささくれ立った筆を、迷い一つ無く左腕に突き刺した。

「ジェリコ!？」

驚愕の声を上げるフェリシア。ジェリコはあまりの痛み顔に顔をゆがめた。これは——とんでもなく——痛い。

「あんた何やってんのよ!」

ばつと近寄ってきたフェリシアを、ジェリコは静かに見つめていた。フェリシアにここまで心配されるなんて、今の自分はよほど狂ったことをしているのだろう。

しかし、この程度の痛みでジェリコの意味は動じなかった。自分でもよく分からないが、今のジェリコは盲目的に何かを信じていた。何を?——分からない。自分は絶対魔術を使える?——そうかもしれない。

たぶんあれだ。今ここでつまずくと、きっと二度と立ち上がれないということを本能的に悟っているのだ。だから何をしても、何を思っても、もう後に引き返すことはできない。

僕は、魔術師であると。ヘミングウェイの言ったその言葉を信じる。

「魔力が必要ならいくらでも使う。だから僕はこの『護る』魔術を、発動させるんだ」

熱と共に溢れ出る真っ赤な鮮血を、ジェリコは図形の上にたらしめていく。血は線の上を流れていき、じわじわと図形がジェリコの血の色に染まっていく。空っぽの図形に命が吹き込まれていく光景はどこか神聖なものに見える。

これは色塗りだ。輪郭線のみでは絵の持つ力は弱い。色彩を加えることによって、絵はより具体性や真実味を帯びる。そして絵は訴

えかける。世界に、人の心に。ジェリコにとって魔術は絵を描く行為に等しい。先ほど術が発動しなかったのは、まだデッサンの段階だったからだ。だから術が発動しなかったのだ。この絵に文字通り命を吹き込む、線に命を吹き込む者こそ、ジェリコが目指す画家なのだ。

「馬鹿！あのね、あんたそんなに血を流したら死ぬわよ！」

慌ててジェリコの腕を取ろうとするフェリシアの手を、ジェリコは乱暴にはらった。そして、本気でフェリシアを睨む。あまりの形相だったのか、フェリシアは一步後ずさった。そしてジェリコは今まで出した事の無いような声で怒号をあげた。

「僕は、決断した！ここで死ぬならそれまでだ。誰にも邪魔はさせない」

「あんた、馬鹿じゃないの！？そういうのを無駄死にっていうのよ。アル、あんたあいつの友人でしょ？止めないの？」

フォレンティーナは先ほどから状況を静観していた。何かを待っているように、どこか懐かしむような目をして。そしてフェリシアにゆっくりと話しかける。

「あんなにジェリコの目が生き生きしているのを見るのは何年ぶりかしら。フェリシア、ジェリコが『あの目』をしているときは何か起きるわ」

「何かが？」

「そう。孤児院に居る頃も、『あの目』をしたジェリコはいつも不思議だった。大胆な行動、愚直なまでに貫く意志、そして決して折れない心。まるで人格が入れ替わったようだった。そんなジェリコに私達は助けられた。たまに失敗することもあったけど」

「信じられないわ……」

「でも信じることは大切。気持ちというのは、無限に繋がられる精神の糸。だから信じる心というのは無限大の力がある。だから強靱な心を持つ人は強いのだ。肉体がそれに追いつくかは別だけだね」

そう。信じる心に限界はない。ただ一点——ほんの一瞬、ほんの

僅かなあきらめが全てを崩壊させる危険はあるが、それを乗り越える強靱な心——諦めを吹き飛ばすほどの精神の进りが、いつか必ず新しいモノを掴む。それはすぐ目に見えて分かることかもしれないし、年月が経ち、ふと振り返ってようやく気づくものかもしれない。かつてジェリコは絵描きになりたいと決断し、穏やかな生活を捨てて故郷を飛び出した。そうすることで、新たな世界を垣間見ることが出来た。仲間も増えた。技術を学んだ。危険もあった。酷い目にも遭った。だが、今の自分を形作ってきたのは『今まで』があったからこそだ。「魔術師になる」などと突飛この上ない考えを持つ自分を、何だかんだで嫌いでは無い。そんな自分を形作ってきた『今まで』は、節目節目の決断によってもたらされたものだ。そして先ほどジェリコは新たな決断を下した。自分自身に。弱い心を持つ、憧ればかりが膨らむ幼稚な心に。この決断はもはや決して取りやめない。この決断を、現実のものとするまで、貫き続けるのだ。

図形——いや、魔方阵に魔力は行き渡った。血を失いすぎて視線がふらつくが、深呼吸して心を落ち着かせる。

魔術は人によって発動方法が違う。呪文を唱えるものも居れば、何時間も儀式を行うものも居る。いずれも魔力を行使して術を発動する。ジェリコは血に魔力が宿っているという。ならば、血を消費すれば発動させられるはずだ。あとは魔力に『何を発動させるか』という方針を示せば、結果が現れるはずである。

そして魔方阵はジェリコの方針を表している。それに魔力を満たした。あとは、発動させるだけ。スイッチを入れるだけ。

ジェリコは大きく息を吸い込んだ。

「僕の魔力に命令する！」

ジェリコは血だらけの左手を拳にすると大きく振りかぶり、

「みんなを護れ！」

魔方阵にたたきつけた。魔方阵と血液は弾け飛び、跳ね返りが顔に当たる。そんな砂粒や赤い血の動きがゆっくり見えた気がした。肉体的に無茶をしすぎて、視力が弱くなっているのかもしれない。

だが、意識に変動は無かった。先ほど失敗したときと同じ、純粹な願いのみが精神を支配している。頭の中には『護る』という言葉の
みが掲げられている。

——ところでどうやって護るんだ？壁でも作ればいいのか。
と、思った刹那、

エメエー————

ごおおおおおうううううう！

急に時が動き出したように、自分の周囲に風が吹き荒れだした。
怒り狂う嵐の如く、砂を撒き散らしながら、辺りの空気を震わ
せている。

——魔術は、完成した。そんなことをジェリコは思った。

#28・開戦 part 3

彼らと手を合わせるのは何年ぶりだろう、とアヤジは思った。戦闘中にほかの事を考えるのはアヤジの癖だった。

計算して七年ぶりだということが分かった。分かると同時に、ベアトリクスとマルボウの斬撃をかわす。

ベアトリクスとマルボウ。彼女と彼は、七年前とある賊が隠し持っていた大昔の魔女が用いていたとされる水晶を巡って争った。異様にしなり、伸縮自在の魔剣を操るベアトリクス。心の眼とでも言うのか、目を閉じてエメの魔眼を無効化しながら戦えるマルボウ。

二人は強敵だった。

あの時は結局決着が付かなかった。こいつらに渡すのなら、と思いい隙を見てヌイの足で水晶を粉々に砕いたのだ。あの時はそうやって場を納めたが、今回はそうは行かない。ジェリコを殺すことは出来ない、彼女らに渡せない。説得も無理。ならば、障害は排除するしかない。

「相変わらずすばしっこいですね貴方は」

魔剣を閃かせながら、ベアトリクスは呟いた。

「相変わらず鬱陶しい剣だとも言えはいいのか」

「やはりあのとき相打ちしていても決着をつけるべきでした。あなた是我らにとって脅威です。今ここで理解しました」

「ご苦労様だな。しかし残念だが俺は死なないし、エメもヘミングウェイも死なない。神様の隣へ逝くのは、お前らだけだ」

「減らず口は大概にしなさい。貴方のような汚らわしい魔神に取り付かれた者が無礼な言葉を……。天罰が下りますよ」

「神が遣したゴミに群がる連中が何を言う。天罰がくだるのなら、

ゴミ漁りを続けるお前らの方じゃないのか」

「黙りなさいッ！」

アヤジはベアトリクスの荒い斬撃を飛び退ってかわし、一瞬だけ

ヘミングウェイとエメの方に視線を動かして状況を確認する。予想通り、やはりエメはマルボウに苦戦していた。相性が悪いのだ。エメの魔神——百の邪眼を持つドドメ——は強力だが、邪眼は目と目が合わなければ効果が薄い。目を開かないマルボウとはほとんど相性が悪い。ドドメ自体に戦闘力はほとんどないため決定打が出せないのだ。マルボウの攻撃をドドメの能力で予知してかわすことができるが、エメの攻撃ではマルボウほどの相手に傷を負わせることが出来ない。だからベアトリクスを早く始末してエメの手助けをしなければならぬのだが、こちらも手が出しづらい。エメにベアトリクスを当てたいところだが、奴らも自分たちの弱点をよく把握しているらしく、そうはさせてくれないのが現状だった。七年前と同じ状況である。

ただ違うのは、ヘミングウェイともう一人の調査団の存在。頭のネジが外れているような、目をぎらつかせ涎をそこらじゅうに巻き散らかし飢えた獣のような言動をとるあの男のことをアヤジは知らない。戦い方を見たところ魔術が達者なようだった。おまけに両手に光剣のようなものを生み出してヘミングウェイを攻撃している。リュドリヤが犀角の槍といていた赤い矢のような術も放っていたし、おそらく扱える魔術はかなり種類があるのだろう。剣の腕もベアトリクス程ではないが、かなり立つように見えるし非常に厄介な相手だ。

そんな風に現状を分析した後、再び意識をベアトリクスに向ける。ベアトリクスの剣戟をかわしながらも思考は鈍らない。常人ではありえない冷静さも、ヌイによる恩恵の一つだ。憎き能力だが、感謝すべき能力。ヌイとはそういう存在である。

次第に剣に苛立ちを見せ始めたベアトリクスが呟く。

「まったく、あなたはあの少年が何者なのか分かっているのですか！？」

「分かっている。揺り籠の鍵だ」

首の方へ襲ってきた、うねうねとしなる刃を紙切れ一枚くらいの

隙間でかわしつつアヤジは答えた。ベアトリクスはアヤジの答えでさらに頭に血が上ったのか、美しい顔を憤怒の形に歪ませた。

「何も分かっていません。アレはそんな一魔術の発動の鍵なんかじやありません」

「ではなんだ」

「とにかくあなた方が後生大事持っているべきものではありません」

ベアトリクスはしゆるる、と刃のしなりを納めて腕を振りかぶったかと思うと、鋭い突きを放った。刃はまるで銃弾のような速さで伸びていき、アヤジの心臓をめがけて宙を疾る。しかしヌイの動体視力であれば容易く見極められた。線では無く点である為余計かわしやすい。ベアトリクスほどの剣士であればアヤジに対して突きなど当たるわけがないと分かっているはずだが――、

「……！エメかつ！？」

アヤジはいつものように身体をそらして銃弾をかわすと、向こうの方で戦っているエメを見る。マルボウとの勝負に集中しているエメは刃の銃弾にまったく気づいていない。

そしてようやく索敵圏内入る。エメと刃の銃弾との距離はわずかに十歩程度の間——エメではかわせない。自身の手を犠牲にする覚悟でヌイの身体能力で刃を叩いたとしても今更追いつかない。あのままだと当たる。間違ひなく当たる。容赦なく当たる。刃の切つ先はエメの眉間に向かって吸い込まれるように走っており、命中すれば間違ひなくエメは死ぬ。逃れられない、死。

「エメエー……！」

どうしようもなく気づけばアヤジは吼えていた。驚きの顔でアヤジの声に振り返るヘミングウェイ。状況を把握したヘミングウェイは目を見開かせた。

アヤジは苦惱した。叫んでもどうしようもないというのに。これからエメは死ぬというのに。たった一人の肉親の苦しみを救えず、死なせてしまうというのに。まるで自分自身が死ぬように、アヤジ

の頭の中で猛る競走馬の如く走馬灯が駆け巡っていた。その走馬灯をばつさりと切り裂いて現実の世界に引き戻す「勝った」というベアトリクスの呟きが草原に小さく響き、その言葉がアヤジの脳天からつま先までを貫いたまさにその瞬間、

ツギいいん——。

刃の銃弾は、突如出現した真珠の貝殻にも似た虹色の壁に弾かれ、がしゃんと力なく地面に落ちた。

「……!？」

アヤジ、エメ、ヘミングウェイ、ベアトリクス、マルボウ、謎の調査団全員が全身の血流と呼吸が停止したように時が止まった。アヤジたちにとつての悲劇は、何者かの手によって軌道修正され、ベアトリクスの悲劇になっていた。

謎の壁によって必殺の攻撃を防ぎ、未だ何が起こったのか分かっていない様な顔をしているエメをよく見ると、薄っすらと何かの幕がかかったように見える。油が水の上で虹色に広がるような波紋が輝くベールとなりエメの全身を包んでいた。

「何なのですか……あれは」

からからの声でベアトリクスは言った。魂が抜けたような顔をして、刃を戻すのすら忘れている。すなわち、『好機』。

誰よりも早く冷静——いや、むしろ機械じみた状況判断を行い戦闘を再開したアヤジは振り向き様ヌイの右足をベアトリクスのみぞおち辺りに放った。

しかしさすがはベアトリクス。一騎士団長の実力は伊達ではない。彼女は驚異的な動体視力と反射神経を奔らせ、既のところでは攻撃をかわすと同時に刃を元に戻した。しかしヌイの攻撃はいくらかベアトリクスの身体に影響を与えたようで、彼女の鎧にはびしりと輝が入っていた。

「一体何をしたのです!」

悲鳴じみた声を上げてアヤジを睨むベアトリクスの眼は、先ほどの青白いような鋭さを失い、少しばかり翳っていた。アヤジはお返しとばかりにベアトリクスを睨み返すと不敵な笑みを浮かべた。

「それは私も聞きたいところだ。しかし一つだけ確かなことがある。それは勝負の流れはこちらにあるということだ！」

無理な体勢でヌイの攻撃をかわした代償としてベアトリクスは構えが整っていない。実力が伯仲している同士が決着をつけることができるのは、どちらかが『伯仲することができ態勢を崩した』瞬間のみ。この機を逃すアヤジではなかった。

額から汗を流し明らかに動揺の色を見せ始めたベアトリクスに向かってアヤジは容赦なく拳を、蹴りを繰り出していく。ごうごうと空気を裂いて残像を残すほどの速さと重みのある攻撃は、さながら嵐を纏う雷のような一撃。雷に打たれれば生きては帰れないように、アヤジの拳を直撃してしまうと即死は免れない。

ベアトリクスは巧みに魔剣を操り、常人を越えた身体能力でアヤジの攻撃を髪の毛一本のところでもかわしているが、次第に追い込まれているのは明白であった。極めて静かな呼吸、拍のある間隔（一秒と満たないが）で連続した攻撃を繰り出すアヤジと比べ、ベアトリクスははつはと息を切らし、まるで老馬が全身の筋肉という筋肉を無理矢理酷使して町から町へ全力疾走した後のように、いつ切れてもおかしくない風化した糸のように弱弱しく、病的だった。

もうかれこれ二十撃ほどのアヤジの拳と蹴りをかわしているが、ベアトリクスは耐えていた。騎士団長という誇りがそうさせるのか、死にたくないという生への執着心か、アヤジのように神を信じず地べたを這いつくばっているような男に殺されたくないというのか。いずれにせよ、アヤジ自身もベアトリクスの驚異的な身体能力に驚き、ある種尊敬の念を持ち始めていた。

「ベアトリクス！ここは一度退くぞ！今のこいつらには攻撃が効かない！」

マルボウの声が耳に入る。あの『虹色の壁』に関することだろう

か。一撃必殺であったベアトリクス of 魔劍の銃弾をさも当然のように弾いたあの謎の防壁。一体何なのだろうか。

なお、考えつつも、アヤジは攻撃の手をやめない。ここでベアトリクスは叩いておきたい。そうすれば団長位の人員を補充されない限り、今後調査団と再び剣を交えるときに必ず優位に立てる。

「分かりました！退きます！エドガー！一度態勢を立て直します！アルビオの狼煙を上げて下さい！」

額に汗をびっしりとかいてアヤジの鬼神めいた攻めを堪えているベアトリクスは、精一杯の声で叫んだ。

アルビオの狼煙とは何なのか。気になるところだが今のアヤジにとって最も重要なことは、ベアトリクスを殺すこと。あと少しである。あと少しで、この拳がベアトリクスの端正な顔に届くのだ。そして彼女の頭部を破壊さえすれば、とりあえず現在の調査団との勝負に負けることは無い。あの美しい、いつか街で見かけた絵画に描かれた女神のような、燦然と輝く宝石金属のような、この世を青く反射するその瞳を、うるおい、瑞々しい薄紅の花弁のような唇を、小高く、しかしどこか誇らしげな細い鼻を、とにかく、すべてを神々に寵愛されていそうな彼女を『破壊』できる。『破壊』、できるのだ。

故にもっと早く。もっと強く。もっと正確に。アヤジはヌイの力の開放率を少しずつ上げていく。あと少し。あと少し。あと少し。あと少し。アと少し。アトスこし。アトスコし——。

フーーーーーッ！

突如鳶の鳴き声のようなエメの口笛が響いた。同時に上空が真っ赤に輝く。思わず目を伏せなくなるような、赤。血の雨が降ってくるかのような不吉な色。そしてその赤が空にはじけて消えた瞬間、目の前にいたはずの可憐な、しかし危険な獲物は跡形も無く姿を消

していた。

そのことに對してアヤジは酷く落胆した。残念。あまりにも残念。無限のため息をつきたくなるほどに。しかしそれは、一体どんな理由だったのか？

何とはなしに左手を見ると、腕のあらゆるところが乾いた地面に起きる細かい地割れのごとく裂けており、そこから血が細長くただらと流れていた。

その症状は両手両足が一番酷く、全身にも少しばかり発生していた。そこでようやくアヤジは意識を取り戻した。『またやってしまった』と。

とりあえず周囲を見回す。調査団は全員いなくなっていた。この様子からすると、おそらく森を徘徊している手下どももいなくなっていることだろう。

向こうからエメとヘミングウェイが走ってきた。息を切らしながら走ってくるエメの瞳は、焦りと悲しみと不安の色でいっぱいだった。

——そんなとき、後ろの方で声が聞こえた。

ジェリコ。真っ先に思い浮かんだ言葉。アヤジは急いで彼の元へ走った。

「ちょっとあんた！しつかりしなさいよ！」「なんだこの血溜りは何があつた」「こ、これは！ジェリコ、気をしつかり持てい！」「私に分かる？ジェリコ。今回もあなたのお陰で助かつたわ」「……っ」「主よ、お気を確かに。久しぶりに魔術を行使して意識が朦朧としているのだと思います。ひとまず目だけでも開いてください」

——自分は、今どういう状況なのだろう。

魔術を発動させた——のだと、思う。自分の血を大量に使用して魔術が発動した瞬間、意識がすーっと地面に吸い込まれるような感じがしてそれからずっとこの状態だ。色々な感覚が無い。目を開けている感じなのに、リウドリヤの言葉から察すると目を閉じているらしい。視界は真っ暗。そして仲間たちの声だけは聞こえる。それ以外の音——空気や砂や動物——の声が無い。まるで無の世界。何にも無い、すべてをどこかに置き忘れてしまったような、空っぽの世界だ。

ただ、フォレンティーナの言葉を聞く限り、戦いは終わったようである。ジェリコの魔術が功を奏したのかはよく分からない。とりあえずみんなが無事なようでよかった。その点だけは、本当に良かった。

「おいどうにかならないのか。このままだと死んでしまうぞ」

焦るアヤジの声。アヤジがこんなに動揺する姿なんて滅多に拝められないはずだ。その姿が見られないことをジェリコは少し残念に思った。

「だが、どうすれば」

そして訪れる沈黙。まるでどうしても救えない患者を目の前にした名医が起こす、あの沈痛とした重たい空気。黒と、青と、血の色と、緑が渦を巻いて混ざるような雰囲気。そんな雰囲気 of 絵を描く

のも、面白いかもしれない。無言の叫びとでもいうのだろうか、悲痛な声を上げる沈黙とでもいうのだろうか、とにかくそういう雰囲気。また一つ、絵を描くテーマが増えた。

そんな絶望を恐ろしく精確な直線の白色で切り裂くように、小さくフォレンティーナは呟く。

「……血を、元に戻したらいいんじゃないかしら」

「アル、どういうこと？何をどうやってこの駄々漏れしたこいつの血を戻すのよ」

フェリシアの疑問は最もだ。一度流れ出た血液をどうやって戻すのか。すくって流し込むわけでもあるまいに。我がことながらどこか人事のように考える自分が、ジェリコは不思議だと思った。

「リュドリア、あなたの能力でジェリコを正常な状態に戻せない？魔力は目の前に大量に在るわ」

「そういうことか。魔術の代償であるジェリコの血は、今目の前にあるからな」

どうやらリュドリアのワルドの三本系を使おうとしているらしい。すべての結果や可能性を現実のものにするリュドリアの反則的な魔術。一体どんな魔術なのかこの目で見てみたいものである。

「なるほど、分かりました。では——やってみましょう」と、リュドリアは静かに答えた。「手を触れるだけで何か分かるの？」と、問いかけたのはフェリシア。リュドリアは何かに触れているらしい。「主の血にどれほどの魔力が残っているかを確認しているのです。

これならば——主を『会話可能な状態』にするくらいならできますね。人間で言えば、熱を出して寝ている時の体力の状態、とでも言えば分かりやすいでしょうか」

リュドリアの分析は正確なのかどうかよく分からない。それにしても、死にかけよりも幾分マシだが、それも酷い状態だと思う。

「構わん。頼む」

アヤジは一も二もなく答えた。他の仲間たちも無言の肯定の気配。「承知しました。私も主がこのまま死なれるのは困ります。それで

は――」

「!??」

全員が息を呑んだのが分かった。再びリュドリヤが何かをしているらしい。

ち――ちゅづ――ずずう――ちゅ――。

一呼吸置いて何かを嚙るような音が聞こえてきた。スープをスプーンではなく獣のように直接口を付けて飲むときのような音。原始的で、どこか懐かしい音。この場に実に不釣り合いで、奇妙な音だった。

「吸ってる……?」フェリシアはその光景を見て驚愕しているようだった。あのフェリシアがこうまで驚いているのだから、さぞおぞましい光景に違いない。「直接魔力を取り込んでいるのじゃろう。わしらが食事をするようにな」と、対して極めて落ち着いているヘミングウェイの声。だがいつもよりも声のトーンが低い。

それにしても自分の血を吸われるなんて非常に不愉快というか、気持ちが悪い。ましてや悪魔である。ジェリコはおぞましさと恐怖が混濁した複雑な気持ちになった。

「――はあ」

ちゅるちゅるとまるで赤子が乳を吸うような音がひとしきり続いた後、リュドリヤはどこか恍惚な声色で息をついた。

「では、魔術を発動します」

そしてリュドリヤはレメゲトンを『開錠』したときのヘミングウェイのように、淡々とした口調で詠唱を始めた。その声色はいつもよりもさらに無機質で、まったく感情のこもっておらず、岩石のようになく骨なトーンだった。

――父は遠いです

――母は遠いです

――愛するものは、まだ遠いです

ずーん、と空気が一気に重くなった感じがした。この場だけ世界から隔離され、秘密の基地の中に入ってしまったような。禁断の地へ足を踏み入れてしまったような、空虚感と閉塞感。

――金色の世界は終わりを認め 黒い穴に墮とされます

――しかし私は孤独の最後に 再びその世界を望みます

空気に同化するように、世界に同化するように。一同はリュドリヤの不思議な言葉の連なりに耳を傾けていた。わずかな息遣いで発生する空気の流れさえも固く禁止してしまったような、極限的な緊張感が満ちていた。これはリュドリヤの世界。リュドリヤだけがこの場に留まることが許されている空間。故にリュドリヤのみが扱える能力という訳なのだろうか。

――それは空しさの道の上を大股で歩き 歴史に関する本は森になります

――そして明るい赤の渦で歩き 地球走力は終わってしまします

――生産視覚と鋼の心は卵に戻って 波頭に乗って海で楽にされます

ぼうううううう。

妙な音がし始めた。音波のようなふわふわとした音。自然的な音ではなく、特殊な楽器から流れるような今まで聞いたことの無い音。ゆっくりと侵食していく病原菌のように、この音を聞き続けていると耳が麻痺してくる。音は全身に問いかけ、脳を震わせ、視覚を惑わせる。世界が溶けていく……いや、分解されていくような感じがした。

——つまり郷愁の道を行くならば

ううううううん。

急激に音が高くなり、耳鳴りのようにきんきんと鳴りはじめた。破裂寸前の風船のような、一触即発の気配。

——灰色の時間の惑星が輝くだけでした

ビシリッ！

リュドリヤが詠唱を終えたその瞬間、ジェリコの全身を何かが駆け巡った。全身の血管と言う血管が蠢くと言うか、虫が這い回ると言うか。とにかく気持ちの悪い感覚。

そして急に心臓の音がうるさいほど頭の中に響き始め、どくんどくと身体の細胞一つ一つが目を覚ましていく。死んでいた身体に

生命力が宿っていく。胸の辺りから何かが全身に広がっていく感覚。すうーっと、身体のすみずみまでに行き渡るような、爪の先までその不思議な流れを感じる。

しばらくすると光が差し込んできた。海の底から水面を見上げたときのような景色。もう少しで水面を突き破り、太陽の下へ飛び出せるあの感覚。ああ、もう手を伸ばせば光に届きそうだ。光が強くなる。光が大きくなる。現実へ、世界へ、帰ってくる――。

* * *

「ジェリコ！」その声で、ジェリコは閉ざされていた目を開いた。視界の先には金髪の三つ編みを揺らしている青目の少女。眉をひそめ、瞳を波紋のように揺らしながら真っ直ぐにジェリコを見つめている。

フェリシア、という声は出ず、左手の指が少しだけ動いただけだった。地面にこびりついたように身体が動かせない。何十年何百年と眠った代償として、身体を動かすことを忘れてしまったような感じ。

「目が覚めたか。無事か」

傍らから男の声。不吉ではあるが、嫌いではない。声のした方へ目を向けると、異国の男が不安そうな顔をしていた。アヤジらしくない、と言う言葉が出そうにも出ない。

よく周りを見ると、仲間たちが囲うようにしてジェリコを覗き込んでいた。ただ一人、白い悪魔は遠くを見つめていたが。

「ぼ……」ようやく口が動いた。この調子で、身体に動けと命令していく。「僕は、生きている……？」と、我ながらよく分からない言葉を呟く。だが、一言言葉を発したことがきっかけとなったのか、身体の神経に電気が走るように、全身が躍動し始める。

「ええ、生きているわ。ありがとう、ジェリコ」

フォレンティーナの穏やかな声を聞きながら、ジェリコはフェリ

シアに支えられつつ起き上がった。

「意識が戻ったか……。あれほど血を流しておきながら、よく生き返ったものじゃ。まこと恐ろしい魔術じゃな」

「ヘミングウェイ、やっぱり、僕は魔術を使ったのか」

途切れ途切れのジェリコの問いに、ヘミングウェイは強く頷く。

その仕草を見て、ジェリコは嬉しい誇らしいという感情よりも、何より自分自身にほっとしていた。あのときの決断は間違いではなかった、という若干情けない感情ではあるが、それでも仲間たちが無事で、自分もなんとか無事で、そして魔術を会得することが出来た。きつとこれ以上の結果は無い。一歩、ジェリコは足を踏み出すことができたと感じた。

「本当に死んだかと思っただわ……」

安堵の息をこぼしたフェリシアは、俯き加減にもう一度深いため息をついた。ジェリコは、ここまでフェリシアに心配されるとは思っていなかったためその光景に驚きと違和感を覚えた。

そんなことを思いつつ、苦笑いを浮かべながらジェリコは呟く。

「フェリシアに心配されるなんて、よっぽど僕は無茶してたらしいな」

はは、と渴いた声でジェリコは笑うと、フェリシアは我に返るようにハッとして顔を上げ、「あ、あのね！別に心配をしてた訳じゃあないわ！アホ！バカ！」と、力いっぱい貶しつつ否定しつつ、猫のようなしなやかな身のこなしでジェリコから離れた。なかなか本気の言い草だったので、ジェリコは傷心した。まあいい加減慣れているが。

「そんな露骨に言うなフェリシアよ。今回は、間違いなくジェリコの力に助けられた。ありがとう。おかげでエメの命が助かった。本当に感謝する」

驚いたことに、アヤジは頭を下げた。あの高圧的で皮肉屋のアヤジが、である。正直ジェリコ以外の人間も驚いたに違いない。

「お前のその魔術がなければ、間違いなくエメは殺されていた。そ

してエメが殺されれば、分が悪くなった俺もヘミングウェイも殺されていたはずだ。今回の勝負はジェリコが居なければ負けていた」

しみじみと戦いの感想を述べるアヤジの話を聞き、ジェリコは誇らしい気持ちに成りこそすれ、やはり全員無事で居られたと言う安心感が強かった。仲間が苦しみ死ぬ姿など見たくも無い。ジェリコは「皆が無事で本当に良かったよ」と誰に言うでもなく呟いた。

「ところであの魔術は一体なんだったのだ。柔らかそうな膜みたいなものに包まれたが、ベアトリクスの一撃を簡単に弾いていたぞ」
「おそらく防御魔術の一種じゃろう。女騎士の武器も大概謎に包まれていたものじゃったが、かなり強力な攻撃力を持つておったはず。それをたやすく弾いておったのだから、高位の魔術なのかもしれん。魔術は使用した魔力量によって効果が大幅に変動するからのう」

自分はヘミングウェイを唸らせるほどの魔術を使用したらしい。我ながら大したものだと褒めてやりたいが、魔術を使う素質はあつたらしいのだから、これぐらいやれて当然なのかもしれない。いずれにせよ、魔術を使ったことは非常に大きな経験だ。自分を表現する術が一つ増えたのだ。これから魔術についてもっと本格的に学ぶ必要がある。使いこなすべき技術は、貪欲に学び、手足のように扱えるようにしなければならぬ。それが、『目標』への唯一の近道だ。

新たな力を得たことを、拳を握りしめながら実感しているジェリコに向かって、遠くを見つめていたリュドリヤが話しかけてきた。

「主よ、ご無事で何よりです」

どこか冷めているというか、怒っている様な口調でリュドリヤは言った。いつもと様子が微妙に違う声色に戸惑いながらジェリコは「うん」と答えた。

「主よ、二度とあんなやり方で魔術を使用しないでください」

恐ろしいほど冷たく言い放つリュドリヤに気圧されつつ、ジェリコは黙って話を聞いていた。

「今は人間の姿とはいえ、誇り高き魔族として恥ずべき行為です。」

正直私は、呆れてものが言えませんでした」

「ちよつとあんた、主人に向かってなんていう口の聞き方してんのよ」

「うるさい。」

ぴしゃりと、有無を言わせぬリウドリヤの言葉に、フェリシアはぐうの根も出ないようだった。それほど、今のリウドリヤは本気で怒っていた。今までは無機質だった瞳にも今は燃え盛る炎のように真っ赤な怒気を孕んでいる。今まで彫刻のように空っぽの心を持っていたような気がしていたが、ここまで本気で怒っているという事は感情がしっかりあるということだ。その点に関して、ジェリコは嬉しかった。

「それから、『壁』を発動させる魔力を完全に超える量の魔力を垂れ流していました。無駄極まりないです。あの場ではああするしかなかったのかもしれませんが、もう少し考えて行動してください。」

死んでは元も子ありません」

「反省はしてる。ごめん」

ジェリコは素直に謝った。確かに、振り返れば行き過ぎた行為だ。おまけに、とても恥ずかしい。正直まともに思い出さなくなかった。「しかし」

ふと、リウドリヤの声から棘が抜けた。

「主のあの揺ぎ無い心の表れは、やはり我が主そのものでした。あれでこそ真の魔族。あの熱情こそ我らの誇り。改めて、主が我が主であることを認識しました。今までの非礼、お詫びします」

「いやそんな、謝らなくていいよ……」

深く頭を下げるリウドリヤを見て、思わずジェリコも頭を下げるようになった。あたふたしているジェリコを置き、リウドリヤはマイペースに再び顔を上げると、気合の入った顔をして言う。

「今回の件で、主は自分が魔術を扱える者であると身を持って理解してもらえたはず。主がこのような失態を犯してしまったのは、僕である私の不備にあると感じます。故に、主がかつての我が主のよ

うに魔術を扱えるようになるまで、僭越ながら私が責任を持って指導させてもらいたいのですが、よろしいでしょうか」

魔術を正しく扱う方法を知らないジェリコにとって、リュドリヤのその言葉は願っても無い言葉だった。ジェリコは一も二も無く頷くと、思わずリュドリヤの手を握りながら「ぜひ頼むよ」と、言った。その行動が予想外だったのか、リュドリヤは眼を丸くして驚いていた。そんな顔もするのか、とジェリコは思った。

「話は済んだか？そろそろ行こう。あまり長居していてもしょうがない」

アヤジはいつもの口調に戻り、いつものようにジェリコに言ってきた。その落差に多少げんなりしつつも、『普段どおり』という幸せをジェリコは実感した。

「それじゃあ、この辺で別れよう。わしにとって都会は眩しすぎるからのう」

言ったのはヘミングウェイ。賢者は山に残るというらしい。

「……分かった。世話になった。ヘミングウェイ。縁があれば、また会おう」

アヤジは淡々と言ったが、背中はどこか寂しそうだった。アヤジにとって、きつと数少ない腹を割った話が出来る人物なのだろう。

ヘミングウェイは皺まみれの顔をさらにしわくちやにして微笑みながら、「縁があればな」と言っつてジェリコ達に背を向けた。しばらくヘミングウェイの背中を見つめていたが、彼は一度も振り返ることなく、悠然と一人草原を歩き、何事も無かったかのように離れていく。まるでいつもの散歩道を歩き、途中ジェリコたちに出会っただけだったかのような穏やかな静けさ。その厳然とした姿、無駄な未練を起こさせないような姿はとても気高く見えた。

「俺達も行こう。次はロンデバリイだ」

そう言っつてアヤジも歩き出す。先頭を歩く後ろ姿は、どこかヘミングウェイと似ている。真意は分からないが、もしかするとアヤジは密かにヘミングウェイを師として仰いでいたのかもしれない。ア

ヤジの後姿は何度も見てきた。静かで、しかし力強いその背中。その気配は、ヘミングウェイのそれとよく似ていた。アヤジにも憧れという感情があるのか、とジェリコはふと思った。

「あんたも早く来なさいよ、三流魔術師」

ジト目で文句を言ってきたのはほかでも無い、一流錬金術師のフエリシアである。「はいはい」と言いながら、ジェリコはこの懐かしいような空気を愛おしく噛みしめながら、多少重たい身体に鞭を打ちつつ歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8620h/>

draw - - -

2011年8月8日03時34分発行